

家集菖蒲

老若五十首歌合

久安百首

承久二年四季百首晚

六十五韻歌附忘竹長月

家集

みくり

中務卿親王家歌合

家集さる事有て人の物申

つかはしける返事に五日

貞應三年百首沼邊菖蒲

五社百首

大尊會經紀方御屏風

水きよきとみのをかはの菖蒲草けふをまちてそなかき根もひく

五月ひくたまえにおふるあやめ草いつれのねをかわきて引へき

なほさりに袖のあやめをかたしきて枕もゆめもむすふともなし

まつのやはもとは蓬のかたひさし菖蒲はかりをけふはふかなん

我すみかものよもきのやとなればあやめ計をけふはふかなん

こもりえのみきはの菖蒲ひき植て玉のうてなにかゝるけふかな

いろはまたわかれぬ軒のあやめ草さつきとなるあけくれの空

玉のをの長さよちきれまらいとにまかふ菖蒲のねはほそくとも

あやめかるあさかのぬまに風ふけはをちのたひ人袖かをるなり

あやめくささやまの池の永きねをこれもみくりの習ひにそひく

つくまへのぬまへのみつやふかゝりし人苦しめのあやめ引なり

をりにあひて人に我身やひかれましつくまの沼の菖蒲なりせば

つくまへのいりえのぬまのあやめ草この五月雨にかる人もなし

みくりくるつくまの沼の菖蒲草ひけと盡せぬねにこそありけれ

難波人あしまの菖蒲あしのやにやかてうゑてやけふはふくらん

みつ垣やさ月のけふのみとひらきかざる菖蒲のかさへなつかし

なかさはの池のあやめを尋ねてそちよのためしに引かへりける

同

基

後京極攝政

法性寺入道關白

季通朝臣

上西門院兵衛

前中納言定家卿

同

俊頼朝臣

卜部兼直

權僧正公朝

西行法師

民部卿爲家

皇太后宮大夫俊成卿

同

同

御集十首御歌中江菖蒲

家集戀歌中

文治六年女御入内御屏風

寄菖蒲二祝

貞應三年百首古池菖蒲

家集

家集江中菖蒲

住吉社三十首

百首御歌

正治二年百首

けふとてやなには堀江の菖蒲草たこのもすそもなくそひく

とほつ人かりちの池のあやめ草なかたえねこむもたのまし

菖蒲草このふしをやとへのへて玉のよとのにけふはふくらん

君かよにひきこそそむれたにかけの樂のあやめなかきためしを

あはれなりいくたのいけの菖蒲草いかなる人のねかよひけん

和歌の浦の入江に朽しあやめ草ことしはしめてよにひかれぬる

この歌は續古今の撰者にくはり侍ける比鎌倉中書王御會に菖蒲をよめると云々

あやめ草ひくとや賤のおりたちてけふ墨の江をふみにこすらん

すみのえにひけとつきせぬ菖蒲草ちよのさ月やちきりおきけん

墨の江のみきはのあやめからてみんほかの軒端の物となるとも

のさは瀉あめやははれて露おもみのきによそなるはなさうふ哉

櫻ちるやとをかされる菖蒲をはなさうふとやいふへかるらん

此歌家集かやう院に中の院と申所に菖蒲ふきたるはうの侍け

るにさくらはのはなのちりけるがめづらしくおぼえてよめると

云々

こゝろさしあさゝは沼の菖蒲草いかはねやのつまとみるへき

後鳥羽院御製

從二位家隆卿

後徳大寺左大臣

參議爲相卿

民部卿爲家

光俊朝臣

源仲正

從二位家隆卿

慈鎮和尚

同

四行上人

正三位季經卿

文應元年七社百首

建保三年名所百首御歌

まけりこしあさくはをの、菖蒲草いまは五月とはやかりにけり

民部卿為家

五月きてかもの社のあやめくさけふはこまさへひきくらふなり

同

思ひのみますたの池のみかくれにきらぬ菖蒲のねのみたれつ

順徳院御製

五月雨はいかほの沼のあやめ草けふはいつかとたれかひくらん

從三位家隆卿

あやめ刈る浅香のぬまにましりてもかつみにえるき夏虫のかけ

從三位家隆卿

貞應二年當座百首名所百首

六帖題

家集院北面にて

毎日一首中菖蒲を

百首歌

てなれつ、すゝむ岩井の菖蒲草けふはまくらにまたやむすはん

前中納言定家卿

としふかきおきの古江のあやめ草まつむまたねはひく人もなし

民部卿為家

下り立て引やつくさむけふをのみたのむの池におふるあやめを

大藏卿隆輔

いかにせんいまは六日のあやめ草ひく人もなきわか身なりけり

衣笠内大臣

橘

題不知

我宿の花たちはなのいつしかもたまにぬくへくそのみならなむ

中納言家持卿

野郭公といふ事を

たちはなのたまぬくつきのみしか夜にあかてもすくる郭公かな

從二位家隆卿

題不知

ほととぎす今きなけとやかみなるあはの、原に匂ふたちはな

從二位行家卿

家集夏歌中

題不知

ほととぎすなきとよむなる橘のはなちるさとをみんひとまかな

同

たちはなの花散里のほととぎすかた戀まつなく日しそおほき

讀人不知

かみなる我みし君をあはの野の花たちはなのたまにひろひつ

同

たちはなのかけふむみちのやちまたに物をそ思ふ妹にあはすて

三方沙彌

島山に照れるたちはなうすにさしつかへまつるはまうち君たち

藤原八束朝臣

ものゝふの、やそとものをの、ままやまに、あかる橘、うすに

中納言家持卿

題しらす

かせにちる花たちはなを袖にうけて君かみためと思ひつるかも

人丸

たちはなのはやしを植むほととぎす常に冬まてすみわたりかね

同

たちはなのまた吹風のかくはしきつくはの山を戀すあらめかも

占部廣方

つくは山またふく風やさそふらむ花たちはなのかをるよなく

待賢門院安藝

やまふきのはなたち花のかをとめてをりそしにけるゐての里人

平祐舉

我宿の花たちはなもさきにけりやまたのさなへいまやとらん

小辨

にほひくる花たちはなのそらたきはまかふ螢の火をやとらん

股宮門院大輔

たちはなのまたてるえたに郭公かたこひすらしこゑもまのはぬ

權中納言長方卿

かをとめてむかしをまのふ袖なれや花たちはなにすかるあま水

悲鎮和尚

ほととぎす寢覺に匂ふたち花のかはたれときになのりすらしも

民部卿為家

康元二年毎日一首中

百首御歌盛橋子低山雨重

歌

股宮門院人々よませける

百首歌

百首歌閑居橋

六帖題

堀河院御時百首橋

百首歌

北野社百首御歌

御集夏御歌中

百首御歌

千五百番歌合

御集

十風百首御歌

嘉元二年百首御歌盛橋

正治二年百首

百首

千五百番歌合

五日郭公といふ事を

新六ノ六  
 たちはなは、このよの外のたねなればのかる、宿に植てこそみれ  
 古郷の花たちはなは、のえたをりにかたみおほかるひとむかしかな  
 我園のはなたち花のいろみればこかねのすゝをならすなりけり  
 橘のきのまろとのかをる香はとはぬになる物にそありける  
 かとちかきかつらのえたの追風に花たちはなはいまやちるらん  
 ゆめさそふおひかせまると花のいくさと人の袖にまむらん  
 もゝまきやみはしの本のたち花になれしむかしそいまは戀しき  
 新撰風  
 あやめふくよもきのやとの夕風にほひすゝしきのきのたち花  
 たち花のむかしにかをる袖にまたけふの菖蒲もねはかゝりける  
 新撰後撰  
 たちはなにあやめのまくら薫るよそ昔をまのふかきりなりける  
 吹風にわか袖のかやにほふらんとつからうゑしのきのたちはな  
 行末にわか袖のかやのころへきてつからうゑしのきのたちはな  
 わすれすよ右のつかさの袖ふれし花たちはなやいまかをるらん  
 たちはな花ちるさとの夕くれにわすれそめぬる春のあけほの  
 のきちかく花たちはなや匂ふらんおほえぬものをすすみそめの袖  
 のきはもる月のひかりにかをるよは花たちはなにあき風そふく  
 あやめふくのきにはほへるたちはなにきてこゑ具せよやま郭公

光俊朝臣  
 信實朝臣  
 頭仲朝臣  
 俊頼朝臣  
 光俊朝臣  
 後鳥羽院御製  
 衣笠内大臣  
 同  
 前大納言忠良卿  
 皇太后宮大夫俊成卿  
 押小路内大臣  
 後京極攝政  
 龜山院御製  
 後京極攝政  
 寂蓮法師  
 從二位家隆卿  
 西行上人

光院入道二品親王家五  
 十首夜盛橋  
 文應元年七社百首

ふかきよをとふ人もかな岡のへのをとろかのきにはふたち花  
 昔よりえたにまもをけるときはなる花たちはなはいまもかはらす  
 たちはな花は昔のそてのにかにおもひよそへしひなのなみち  
 五月まつ花たちはなをろたへのきともわかすふれる雪かな  
 袖さぬゆきこそにはへたち花のかけふむみちに花やちるらん  
 そてふれし昔をいかに忍ふらんまかのみやこにのこるたちはな  
 ふく風に昔をのみやまのふらんくにのみやこにはふたちはな  
 から衣きなれのさとのかたみとてはなたち花もそてのかそする  
 たち花のはなやはもとのはなゝらむかこそ昔しのまかのふる里  
 よゝふりてとほつあすかの宮人のそてかとみゆるにはのたち花  
 もゝしきやのきはに薫るたち花によゝのむかしの風やふくらん  
 思ひいてゝ君かあたりもこひしきはあすかのさとにはふ立花  
 わか心こひしきかたへかへれとや花たちはなにあめのゆふかせ  
 たち花のたち榮たるうてなよりみのなりいつるときにあへるか  
 さつきやみくもまはかりの星かとして花たち花にめをそつけつる  
 なつかしき薫りならすはたち花の雲のほしとまかふへきかな  
 さよふけて花たち花に風ふけはわかまつひとのくるかと思ふ

百首御歌名所夏  
 寛元三年結縁經百首歌  
 建保三年家百首御歌盛橋  
 千五百番歌合  
 中務卿親王家歌合  
 百首御歌  
 或人のいへにたちばなの  
 さかへたるなみて  
 家集  
 禊子内親王家歌合花橋  
 嘉保三年五月家歌盛橋

如願法師  
 民部卿為家  
 同  
 同  
 同  
 土門御院御製  
 民部卿為家  
 入道攝政光明峰寺  
 大藏卿有家  
 同  
 大藏卿隆輔  
 慈鎮和尚  
 大宰大貳高道卿  
 好侍  
 小侍  
 讚人不知

天仁三年四月師時卿家歌  
合郭公  
藤子内親王家歌合橋  
百首歌里盛橋  
文治六年五社百首橋  
六帖題あへ橋

ゆふされは花たちはなの薫るかをまつ人かとおとろかれぬる  
常世よりかゝる木實をうつしうゑて山ほとゝきす時にしそきく  
たまにぬくはなたち花をいつしかとけふの袂にかをりかへたり  
おもひやるむかしもとほきみちのくのまのふの里にはほふ立花  
いにしへをまのふころをそふるかなみおやのもりに匂ふ立花  
すみのえにはなたち花もにほひけり松もやむかし思ひいつらん  
新六ノ六  
いかなればあへ橋のにはふかにうすきたもともすしかるらん  
新六ノ六  
なにか匂ふあへたちはなの袖のかは涼しかるへき風のつてかは

同  
仲 實 朝 臣  
藤 祐 朝 臣  
皇太后宮大夫俊成卿  
同  
衣 笠 内 大 臣  
信 實 朝 臣

花柑子

百首御歌中夏

此程は伊勢に去る人おとつれてたよりいろあるはなかうしかな

慈 續 和 尚

夫木和歌抄卷第七終

夫木和歌抄卷第八

夏部二

郭公 五月雨 照射 麥 牡丹 栲  
百合 鶺鴒 水鶏 螢 夏神樂 夏雜

郭公

家集  
竹内郭公  
天仁三年四月師時卿家歌  
合郭公  
千五百番歌合  
正治二年百首  
千五百番歌合

けふそまたこそかねやまに郭公はつねなくやとたつねいりぬる  
うくひすのねくらのたけをまめおきておやのあとふむ郭公かな  
郭公なくそいろのうくひすにまれになくてふことなへらひそ  
ほととぎすやまのいつくにうちほふき鶺鴒かへるほととぎすをまつらん  
五月雨のくもまの月のをりしもあれ身にまむときの鳥のこゑ哉  
うくひすのいりぬる跡の雲地よりまちつるときの鳥もなくなり  
ほととぎすかよひそむれば卵のはなのかきねうかるゝ鶺鴒のこゑ

大納言經信卿  
同  
俊 頼 朝 臣  
醍醐入道前太政大臣  
前大納言忠貞卿  
家 長 朝 臣  
正三位季能卿

家集郭公歌中

正治二年百首

建仁元年老若五十百歌合

正治二年百首

家集

正治五年三嶋社十首歌待

郭公

家集

夏歌中

題不知

家集

題不知

洞院攝政家百首郭公

文治三年閑居百首

閑郭公といふ

鶯のふるすよりたつほととぎすあゝよりもこきこゑのいろかな

うくひすのふるすにとめし郭公かへらはさそへくもにいろこゑ

へたつなるうのはななきのこなたにて鶯のふほととぎすかな

ほととぎすおもひや出るまのひねをなきておちにしうの花の宿

待ごとをわかつてやもらすほととぎす卯の花かけのまのひねの聲

ほととぎす初音をまつか崎にきて聞かて歸らむことを思へ

せめてなほまつあらしにほととぎすなかぬ初音を心にそきく

郭公おのかねやまにたつね来てきくをりさへのひとこゑやなす

ほととぎす待夕くれはつれなくてねさめのとこの山になくなり

ほととぎす尋ねにゆかん五月山卯の花かけに啼かすまもあらし

かくはかり雨のふる日をほととぎすうの花山になほやなくらん

卯の花もいまたさかねはほととぎすさほの山へをき鳴とよます

ふるさとのならしのをかの郭公ことつけやりしいかにつけきや

つくはねにわかゆけりせは郭公やまひことよめなかましやそれ

つくは山ありとやこゝにほととぎす花たちはなの色になくらん

たち花に風吹かをりくもるよをすさひになるほととぎすかな

過ぬともこゑのにはひをなほとめよほととぎすなくやとの立花

四行上人

寂蓮法師

慈鏡和尚

同

式子内親王

能宣朝臣

前中納言爲兼卿

俊基法師

正三位經朝卿

源雅重朝臣

赤人

中納言家持卿

よみひとしらす

龜

後九條内大臣

前中納言定家卿

光嚴院入道二品のみ

嘉元元年百首郭公

貞應三年句題百首遠郭公

寶治二年百首待時鳥

題不知

なくこゑも檜原の山にこもり江の初瀬をいでぬほととぎすかな

誰里にさなやむらんほととぎすほのめきわたる雲のをちかた

郭公くへきよひとやたのまゝしひとはたれかはくものふるまい

神なひのいはせの森のほととぎすならしの岡にいつかさなかん

ものふのいはせの森のほととぎす今もなかねか山のとかけに

ひとりのみきはかなしも郭公にふのやまへにいゆきなくにも

雨はれし雲にたくひてほととぎす春日をさしてこゆなきわたる

郭公とはたのうらにまきなみのまはくきみを見んよしもかも

ちはやふるたすの神の杜にしてそら鳴あつるほととぎすかな

なにことをぬれ衣にきてほととぎすたすの森に鳴あかすらん

君こふとふしあもせぬにほととぎすあを山へよりなき渡るなり

さなへとるひむろのを田のほととぎす聲おちかゝる山あひの里

ほととぎすまたせてまのゝめのはからかにこそ啼渡るなれ

散木

なげかしなたむけのやまの郭公あをほのぬさをとりあへぬまで

一聲はたむけの山のほととぎすぬさもとりあへずあくるよは哉

郭公ほのにはつねをきしよりよるとしなればめをさましつゝ

なほまたんかてもやまし郭公こそならしのをかのひとこゑ

參議爲相卿

兵部卿爲家

正三位知家卿

志貴皇子

よみひとしらす

同

人丸

よみひとしらす

同

清原輔朝臣

中納言家持卿

入道前太政大臣

源仲正

俊頼朝臣

從二位家隆卿

好忠

大藏卿有宗

千五百番歌合

三百六十首中

久安百首

家集夏歌中

嘉元二年百首郭公

常盤井百首朝郭公

家集

千五百番歌合

夫木和歌抄卷第八

天仁三年四月師時卿家歌合郭公

建保三年内大臣家百首

洞院攝政家百首郭公

社頭郭公

題不知

光養院入道二品親王家五十首岡時島

永萬二年重家卿家歌合郭公

新六一

百首歌中人家

元永元年正月中院入道左大臣家歌合郭公

保安二年閏五月贈左大臣長實家歌合郭公

弘長元年百首郭公

たつねはや五月こすともほととぎすまのふの山のおくのこゑ  
つひになをあはてのもりの郭公まのひかねたるこゑたてつなり  
ほととぎすこゑあらはる衣ての森のまつくをなみたにそかる  
ほととぎすこゑや五月のたまをなすわかこゑもてのもりの白露  
ほととぎすからくれなゐのふりいて啼けともそめぬ衣ての森  
このもりをふるの社ときくからになを神さひてなくほととぎす  
ふたかみの山にこもれるほととぎす今もなぬか君にきかせん  
ほととぎすよはのなこりはあすか川ゆきゝの岡にまたも尋ねん  
玉鉢のゆきゝの岡のほととぎすいまひとこゑにくらすころかな  
待人をなとかたらはてほととぎすひとりまのひの岡になくらん  
ほととぎすなくや五月をいつとてかなをもまのひの岡のこゑ  
誰にこはまのひの岡のほととぎす猶うちとけぬよはに鳴くらん  
夏きてもまのひの岡のほととぎすなほこかくれに五月まつなり  
五月まつまのひの岡のほととぎす卵の花ちりぬこゑなをしみそ  
五月開くらふの山のほととぎす聲はさやけきものにそありける  
ましかねてくらふのやまのたそかれにほのかになる時鳥かな  
月よりもいてさき立てよひのまのくらふの山になくほととぎす

参議 藤原 經 卿  
琳 賢 法師  
前中納言 定家 卿  
藤原 有季 朝臣  
光 俊 朝臣  
大宮 太政大臣  
よみ人 しらす  
信 實 朝臣  
藤原 孝 繼  
法 印 光 寛  
俊 禪 法師  
藤原 賴 保  
正三位 知家 卿  
法 印 印 宗  
修理大夫 鳳季 卿  
藤原 爲忠 卿  
後九條内大臣

寶治二年百首開郭公

洞院攝政家百首

同

七首百歌中

家集

殿上會郭公

家集古來歌合

夏歌中

小倉山の郭公

正治二年百首

岡園入道攝政家百首郭公

聲連

題不知

家集夏中

いるまのふたみのうらに

ちはやふる神なかいかき山なかいをこゑすきてなくほととぎす身を惜まぬ  
ふたかみのみねをやすらふほととぎす心つくしの聲そふりせぬ  
ほととぎすやとりやすらふたち花の小鳥か崎のあけほのこゑら  
いままはしまち心みんほととぎすよもきなてはやましの里  
ゆくへきをはしたしたる時鳥はしのこなたになきわたらん  
この歌はあはたどのいし山にまふで給けるにせたのはしの  
あなたにほととぎすのなくをきよてよめると云々  
いつちとかなきわたらん時鳥みかきのはらもまたあけぬよを  
なき渡るみかきの原のほととぎすなへての里にこゑなふるしそ  
夏ころもたつたのやまのほととぎす袖かた敷て待たぬよはなし  
横横後拾遺後拾遺夏  
たちかへりたかとへはかも郭公おのか名をのみなるるらん  
夕されは空もをくらのほととぎすあらしの山にこゑなまのひそ  
ほととぎすうの花山のあかすしてそらにまられぬ月になくなり  
さてやさはなかくて過へきほととぎす五月くるまで音つれもなし  
ほととぎすなく聲きくや卵の花のさきつる岡にたくさひくいも  
後後撰撰夏 伊勢集  
卵の花のにはふ五月の月きよみいねすきけとやなくほととぎす  
たましくしけふたみのうらの郭公あけかたにこそなきわたるなれ

同 光明寺入道攝政  
同 権信正公朝臣  
能 宣 朝臣  
太宰 大貳 高遠 卿  
源 仲 正  
小 辨 方  
元 方  
大納言 經 信 卿  
喜多院入道二品のみこ  
民部 卿 爲 家  
人 丸  
中納言 家 持 卿  
前中納言 匡 房 卿

郭公歌中  
 同 家集桑門  
 同 御集  
 文永二年白川殿七百首  
 題不知  
 百首歌  
 百首御歌  
 家集登山郭公  
 海路郭公  
 家集  
 題不知  
 仁和元年行平卿家歌合郭公  
 同  
 永治二年預家歌合郭公

大きみのみかさの山のほととぎすたつぬるほと夕日さすらし  
 まとろまでまつかひなしや郭公あしたのはらにひとこゑそなく  
 まられしな水無瀬の里のほととぎす今も戀しきねのみなくとは  
 ほととぎす鳴音ほとなくあくるよにちきり短かき久米の岩はし  
 さして行かさと山道のほととぎすこよひはこゝに雨やとりせよ  
 一字抄  
 たとりゆくさかの山路をうれしくも我に語らふほととぎすかな  
 山かけのふはの關守とはねともこゝろとななるほととぎすかな  
 備中 百首歌現在六  
 秋のみそいふきの山のほととぎすまれに鳴音はうれしからぬを  
 現在六  
 ほととぎすなきてのちせの山もなほねられぬそらに有明のつき  
 石川  
 月かけのいるさの山のほととぎすあふきをあくる人やきくらん  
 夕つく日いるさの山にとぎままれをりはへて鳴ほととぎすかな  
 今日もなほ船出物うしほととぎす聲たかさこにたえずなきけり  
 ほととぎすなきわたるなる波の上に聲たみおくさかの浦かせ  
 一字抄  
 ほととぎすいかてきかまし音羽山すその里にやとらさりせば  
 おほつかなおとはのやまの郭公さすかにいはぬことなたのみそ  
 あけぬまにはこねの山のほととぎすふた聲とたに鳴わたるらん  
 ほととぎすすまちなかね山の一聲はきくにつけてもうらめしきかな

前中納官匡房卿  
 同  
 光俊朝臣  
 正三位知家卿  
 藤原基俊  
 花園左大臣  
 光俊朝臣  
 よみ人しらす  
 前大納官基其卿  
 後九條内大臣  
 修理大夫顯季卿  
 同  
 西行上人  
 藤原盛房  
 よみ人不知  
 同  
 讀人不知

保安二年閏五月贈左大臣  
 長實家歌合郭公  
 同  
 同  
 承安二年前參議教長卿家  
 歌合郭公  
 千五百番御歌合  
 正治二年百首  
 同  
 同  
 御集  
 御集旅泊郭公  
 基保三年内大臣家百首  
 寛治八年八月京極關白家  
 歌合郭公  
 中務卿親王家歌合水郷郭  
 公  
 郭公中  
 同  
 同  
 同

夏ひきのいとかの山のほととぎすくるしきまでにまたれてぞ鳴  
 鳴て出るみ船のやまのほととぎすいかなるかたへさして行らん  
 ほととぎすいくなか待せつたまさか山になき渡るらん  
 月よりもなくさめかねつほととぎすおはすて山のあけほの聲  
 新後撰夏  
 ほととぎすすなれも心やなくさまぬおはすてやまの月になくよは  
 風雅夏  
 ほととぎすすよ雲かすむ山のは有明のつきになほをかたらふ  
 ほととぎすすなこりそいとをしほ山小松か原のあけほのこゑ  
 おもふこといはてのもりの郭公つひにはこゑもいろにいてけり  
 夏ばかりいくたのもりをことひて秋風えらぬほととぎすかな  
 うきねするみなとはすきぬ郭公いくたのもりやとまりなるらん  
 新拾遺 家集  
 つの國のいくたのもりのほととぎすおのれすすは秋を問まし  
 ほととぎすす心のまにたつねついはたのもりに一こゑそきく  
 みしまえやあしのかりねのみしか夜にきくもほととぎす郭公かな  
 ほととぎす待しわたらはやつ橋のくもそのかすに聲をきかはや  
 ほととぎすすなくねのかけしうつらねは鏡の山もかひなかりけり  
 あさねかみゆふのみ山のほととぎすはやうちとけぬ思ひ亂れて  
 ほととぎすす系松山かせふけは浪こすくれにたちあなくなり

源兼盛  
 神祇伯顯忠卿  
 藤原忠隆  
 清原朝臣  
 宜秋門院丹後  
 式子内親王  
 隆信朝臣  
 喜多院入道二品のみこ  
 後九條内大臣  
 從二位家隆卿  
 同  
 權中納言通俊卿  
 從二位顯氏卿  
 俊賴朝臣  
 同  
 同  
 同

山中郭公  
夕陽三郭公

南山の御幸のとき

御集

五月くらまにまうでたりけるに郭公なきいてかみなびのしりの前をわたるとして

御集古來歌合

寛治七年五月御芳門院根合

磯子内親王家歌合郭公

仁和元年行平卿家歌合郭公

同

承安二年閏十二月東山歌合晚郭公

同

千五百番歌合

百首御歌

時鳥おのかねやまのまひしはにかへりこねはやおとつれもせぬ

みくまの、はまゆふかけて郭公なくねかさねよくへなりとも

みくまの、山路になのるほと、きす神も初音やうれしかるらん

こゝにたにつれ、となく時鳥ましてこかねのもりはいかにそ

五月やみくらまの山のほと、きすおほつかなしやはのひと聲

神なひのもりのあたりのほと、きすこゝるきかて行やすきなん

ほと、きすいつる山ちに旅寐までよはにかへらん聲やかまし

なかつとてうちもふされす郭公こゝるまつひとねかたかりけり

まのひねにこかくれゆきし郭公こゝるさみたれてなきわたるなり

宮こいて、いつくもたひそほと、きすこゝにもむすへ草の枕は

ほかにまたまつ人あれやほと、きす心のとかにこゝるのきこえぬ

時鳥なにとてこゝるをかはずらんはねかくまきはともならなくに

夜をこめていつちゆくらんほと、きす有明の月に友よはふなり

此歌判者清輔也云左首尾かなひてきこへす又郭公ともよば

ふとはふるくよめばにやと云々

ほと、きす去年のふる聲いまさるになにかは忍ぶおのか五月を

柴の庵のかけ樋のみの音とめよ谷のすきふにほと、きすなく

俊 朝 臣

同

後鳥羽院御製

藤 原 清 正

藤 原 法 師

堀 川 右 大 臣

よ け び と し ら す

同

同

同

道 因 法 師

法 橋 顯 照

同

同

宜 秋 門 院 丹 後

喜 多 院 入 道 二 品 の み

御集郭公

文治六年五社百首

正治二年百首

三體和歌

となりをあらそひて郭公なきといふことを

光隆院入道二品親王家五

十首岡郭公

家集時鳥

願季かつらの家にて釋天郭公を

殿上にて郭公十首歌

郭公としからずといふことを

久安百首

家集深山岡郭公

馬上岡郭公

老若五十首歌合

後鳥羽院城南寺にて御會ありけるに雨中時鳥

千五百番歌合

きけはありきかねはわひし時鳥すへてさつきのならましかは

ほと、きすさやかに近くなく聲は濁れるよにはあはすもある哉

さとさそふ花たちはなの夕風にやまほと、きすこゝるかをるなり

住なれし卵の花つきよとさふけてかきねにうとき山ほと、きす

たか方に心さすらむほと、きすさかひのまつうれになくなり

あふちさく岡邊にきなくほと、きす藤のゆかりの色やとふらん

ほと、きす鳴音雲井にとろきて星のはやしやうつもれぬらん

暮にけり聲をさめてよほと、きす己かをくらの山にはあらずや

はしめなき身のはしめより郭公あかてもよ、をすくしけるかな

同

同

同

今こそはふたむら山のはと、きす聲をりはへてあやになくなれ

ほと、きす衣のせきに尋ねさてきかぬうらみをかさねつるかな

斧のおともまはしはをやめまきもくの檜原の山にほと、きす鳴

郭公みさかのかたになくなへにこまわたしえぬきそのかけはし

ほと、きすすみあれのせめに引こめて外にけかさぬ聲をまかはや

早苗とる鳥羽田の面に雨おちてをりはへきなくほと、きすかな

とふとりのあすかのさとの郭公むかしのこゝるになはやなくらん

花 山 院 御 製

皇 太 后 宮 大 夫 俊 成 卿

藤 原 和 尙

鳴 長 明

四 行 上 人

從 二 位 家 隆 卿

俊 頼 朝 臣

同

同

同

同

同

同

前 參 議 親 隆 卿

權 大 納 言 實 家 卿

同

同

同



名所郭公	こと問んすみた川原のほととぎすむかしの鳥のあとになくなり	後九條内大臣
御集	五月雨の雲のかゝれるまきもくの檜原のみねになくほととぎす	鎌倉右大臣
同	郭公きくとはなしにたけくまのまつにそなつの日かすへぬへき	同
同	ほととぎすきなく五月の卯の花のうきことのはのまけき頃かな	同
六帖題	新六ノ六 さつき山雲ははれぬとほととぎす卯の花つきよさやかにそなく	正三位和家卿
家集	晝はいてすかたの池にかけうつせ聲をのみきく山ほととぎす	四行上人
家集文永元年名所郭公	たかやすにうつりにけりな郭公いこまのやまをこえてかたらふ	權僧正公朝
建保三年内大臣家百首續	なこりまで雲なへたてそほととぎすいこまのみねの月になく聲	信實朝臣
郭公	わするなよきなれの山のほととぎすなきてわかるゝあかつきの空	前大納言伊平卿
承久元年内裏歌合夏曉更	夏ころもきなれの里のほととぎすかはらすそきくそのふる聲	順徳院御製
百首御歌	なげやなけ待夜ふけゆくほととぎすぬしたまれる戀の山路に	後九條内大臣
御集夏夜戀	後鳥羽院の御影の前にて講せられける三首歌名所郭公	
水無瀬山むかしのあとのほととぎす忍ふにたへぬ音をや鳴らん	中務卿の二みこ	
はやもなけいはたの森のほととぎす心おそくはたむけせさりつ	皇太后宮大夫俊成卿	
夕くれのいはたのをのほととぎすかたらひ捨て山路こゆなり	民部卿爲家	
まちえたるいこまの嶽のほととぎす雲なへたてでを行かたもみん	同	
去ら雲のうへかた山のほととぎす空にはたれかことかたるらん	従二位行家卿	

近聞郭公	玉更 あはれにもともに伏見の里にきて語らひあかすほととぎすかな	皇太后宮大夫俊成卿
文應元年七社百首	ほととぎす聲ふりたて、鈴か山いませせきちをこえてなくなる	民部卿爲家
正治二年百首	ほととぎすまはしやすらへ菅原やふしみの里のむらさめのそら	前中納言定家卿
建保三年名所百首	月宿るみもすそ河のほととぎす秋のいくよもあかすやあらまし	同
同	郭公こよひみやまをいつみなる志のたのみにひとこゑそきく	兵衛内侍
郭公歌中	松浦かたひれふる山のほととぎすあかても聲のとほさかりぬる	正三位知家卿
四國寺入道前太政大臣家百首	ほととぎすまつら佐保姫たちあしてひれふる山に聲なをしみそ	俊頼朝臣
中務卿親王家五十首歌合	去らたへの衣ほすよりほととぎすあまのかく山をりはへてなく	従二位家隆卿
建保三年名所百首	かこ山のさかきかうれのほととぎす常世の鳥のねにやなくらん	權僧正公朝
同	判者光俊朝臣右とこよの鳥など日本紀問多尋入てかけざまに侍	
郭公御歌中	れば勝の字をゆるさるべくや侍らん云々	
同	ほととぎすなくひと聲や過ぬらんいまそあけゆくあまのかく山	知家卿
同	よをかさねいななの小篠ふしのまもなくや五月の山ほととぎす	行能卿
同	まなかとりのな山わかればほととぎすなきゆく聲はたひ人そきく	鎌倉右大臣
同	ものゝふのやそうちやまの郭公わひてもたれにつけよとか思ふ	同
建保三年内大臣家百首續	一二ゑもなきていなはの衆に生るまつかひあれや山ほととぎす	大藏卿有家
郭公	新續古離別 今はとていなはの山のほととぎすわすれかたみの一二ゑもかな	法橋顯昭
千五百番歌合		

くまのにまらせ給ける  
夏歌中

聞すてよそにはすきしほとくすかつらぎ山の雲になくなり  
なきわたるこゑうつりせは郭公ひのくまかはにこまとめてまし  
いかにせんひのくま川のほとくすた一聲のかけもとまらす

後鳥羽院御製

文治三年百首

こころはんこゑもをしまぬ郭公なにかうきたのもりのよことに

前中納言定家卿

承久二年四季百首

新後撰歌  
まらあかすさよの中山なかくにひと聲つらきほとくすかな

同

院北面にて郭公

五月雨のふるの神すきすきかてに木高く名のるほとくすかな

同

秀能すめける五十首

戀すとやなれもいふきのほとくす山のまづくに羽衣をるらん

同

承久元年内裏御會曉郭公

ほとくすす出るあなしの山かつらいまやさと人かけてまつらし

同

卅首歌野郭公

宮城野の木の下露にほとくすぬれてやまつるなみたかるとて

同

最勝四天王院名所御障子

ほとくすす鳴や五月もまたえらぬ雪は富士の峯いつとわくらん

同

御集郭公

時えらぬ富士のたかねのほとくす雪のうちなる聲もめつらし

中務卿のみな鎌倉

建保四年内裏十首歌合

郭公こゑきくをのほきかえをかりのなみたのいつかそむへき

從二位行能卿

案五十首里時鳥

色ふかくたれもまのふの里の名を山ほとくすなくくそとふ

光隆院入道二品のみこ

洞院攝政家百首郭公

ほとくすすおきみの里に過ぬなりいかなるひとの夢むすふらん

法印定範

家五十首里郭公光隆院入

涙こそ露とおくらめほとくすすおのかなつのふかくさのさと

從二位範宗

道二品親王

ふかくさの里をはかれぬほとくすすなかなく方を誰うらむらん

後九條内大臣

正三位家衡卿

郭公を

歌苑抄  
住吉の松をはまらてほとくすすとをさとはのゝかたになくなり

寂念法師

百首御歌中

すみよしの神もまつとや己かねを手向てするほとくすすかな

慈鎮和尙

同

きく人もおいそのもりのほとくすすなこり露けきみな月のそら

同

同

よとのあたりよ深き空のほとくすすみなせ河原のくもちをそ行

同

同

軒の雨のやと訪ふよりもほとくすすかはける聲に袖のぬれける

同

同

五月雨にやまほとくすす聲ぬれて軒のあやめのいろになくなり

同

同

五月雨にまをれつなくほとくすすぬれ色にこそ聲もきこゆれ

同

永萬二年歌合時鳥

雨山にきつなげはやはほとくすす聲のいろさへぬれわたるらん

太宰大貳重家卿

参河國名所歌雨山

五月雨にふり出てなげと思へともあすのためとやねを殘すらん

爲忠朝臣

應和二年五月四日内裏歌

判者郭公といふ事なけれと歌かたちよとして爲勝

侍從輔正卿

千五百番歌合

ときしもあれ花ちる里の軒の雨におのか五月のとのりのひとこゑ

後京極攝政

山寺郭公

ほとくすすきにとてしも籠らねと初瀬の山はたよりありけり

四行上人

舟中郭公

まつらふねかちとりまはしこきめくれたまつまわに郭公なく

源仲正

同

まきのたつ荒山いつるほとくすすくにの宮こにさつきつくなり

從三位行能卿

同

なれぬればよるもやこゆる郭公をくらのみねのくものかよひち

後九條内大臣

同

なりならずおふのうらなしうらなれてねぬにかたらふ郭公かな

洞院攝政

同

武藏野やまはしやすらへほとくすす己かいるへき山のはもなし

同



嘉祿二年十首歌合時鳥

かんさふるなげきのもりの時鳥ひくまめなはもなく／＼やこし

後久我太政大臣

仙洞三首歌河邊時鳥

玄からきのとやまのすゑの時鳥たかさとちかきはつねなくらん

陸祐朝臣

關時鳥といふとを

郭公おのかさつきの名とりかははやむれきのあらはれてなけ

少將内侍

家集雨中時鳥

五月雨にいまきの岡のほと／＼きすまと／＼にぬれてなき渡るなり

前右兵衛督爲教卿

中院入道右大臣家歌合郭公

ほと／＼きすいまきの岡のひと聲は五月なれともめつらしきかな

修理大夫顯季卿

原不知

六帖 かねをかの小松の森のほと／＼きすほのかにそなく戀しかるへき

神祇伯顯仲卿

杜郭公

夏衣たつたのもりのほと／＼きすけふをりはへてはつねなくなり

よみ人まらす

山郭公

心なきいはきのやまのほと／＼きすはつねは人にさそをしむらん

平範忠朝臣

五月のすゑの歌人々よみけるに

いまはとて山路に歸るほと／＼きすなこしの月もありといふなり

法印四男

内裏にて時鳥待とて速歌に

かきこもりなとや音せぬほと／＼きすかまくら山に路やまとへる

能宜朝臣

長秋後草

早苗つき五月雨そむるはしめとやよものあま雲くもりゆくらん

實方朝臣

五月雨

千五百番歌合

水まさるにふの川瀬の五月雨にそまひとをらぬまきなるなり

皇太后宮大夫俊成卿

百首御歌

五月雨の雲まくのきのほと／＼きすあめにさはりて聲のおちくる

中務卿のみこ

家集河五月雨

五月雨にやそうちかはを見渡せば網代やいつこ瀬々のむもれ木

信實朝臣

家集五月雨

ひろせ川わたりのせきのみをまゐるしみかさそふらし五月雨の比

四行上人

同

なかれやらてつたの入江にまくみつは船をそもやふ五月雨の比

同

同

五月雨はゆくへき路のあてもなしをさ／＼か原もうきになかれて

同

同

ふねとめしみなどのあしまさはたえて心ゆくらん五月雨のころ

同

同

くもはれぬ五月きぬらしたひ衣むつかしきまであままゆりして

同

同

とけてすらぬるよしもなき五月雨は寢覺かちにて明しつるかな

同

同

五月雨は賤の垣根にひかすへてあさのはきえをほすひまそなき

同

同

天の川やそせもえらぬ五月雨におもふもふかきくもの水尾かな

土御門内大臣

同

五月雨にかひやのけふりうちしめり山田のくれにかはつ鳴なり

前中納言定家卿

同

五月雨のひまなき比もさをしかのうはけのほしは曇らさりけり

從二位家隆卿

同

五月雨に柴のいほりはかたふきて軒のまつくのおとそみしかき

衣笠内大臣

同

さつきやま雨にあめそふゆふ風にくもよりまたをすくるえら雲

後京極政

同

五月雨はむなしき空にみちぬらしゆくかたみえすあくるえら雲

後九條内大臣

同

いと／＼また雪氣の水やかさぬらんふしのたかねの五月雨のころ

從二位行能卿

同

信實朝臣

同

信實朝臣

信實朝臣

同

信實朝臣

信實朝臣

四季百首雨  
 百首御歌五月雨を  
 家集山家五月雨  
 百首御歌中に  
 嘉元元年百首五月雨  
 乾元二年二月五月雨  
 君臣御歌合  
 嘉元元年仙洞三十首五月雨  
 山の五月雨  
 御集江五月雨  
 喜多院入道二品親王家五十首  
 正治二年百首  
 十題百首御歌  
 五月雨歌中  
 同  
 永萬二年五月經盛卿家歌合五月雨  
 蓮生法師八十賀に

五月雨にまことの浪もこえにけり卯の花まろきたまかはのさと  
 人またはいとひやせまし庭の草にあなところせの雨のけしきや  
 なひきふすのきのくれ竹枝見えてたきつせあをきのきの五月雨  
 五月雨ははれぬとみゆる雲間よりやまのいろこき夕くれのそら  
 新後拾遺  
 みなと河うはなみはやくかつこえてまほまてにこる五月雨の比  
 日をかさね軒端におほふあま雲のよそにもならぬ五月雨のころ  
 五月雨はところ／＼にたきおちて見ぬ山かはのかすそをひゆく  
 去つくそふ水まで石をうちわひてうき五月雨にほとふりにけり  
 明玉  
 五月雨はいくかになりぬまきもくのあなしのやまにとく井たり  
 五月雨も久しくなりぬすみの江の行あひの雲のひまやなからん  
 をちかたやななめし峯も雲路にてやまこそなけれ五月雨のころ  
 ふもとまでひとつ雲路となりはて、山のはもなし五月雨のそら  
 昨日けふちさとのそらもひとつにて軒端にくもる五月雨のやと  
 玄のふ草まけきまつくはなかく／＼に人にまられぬ五月雨のやと  
 徒然とあしやの海士のをくしきす五月雨かみやほさてねぬらん  
 五月雨はきしの柳のこするこそよとのわたりのふなちなりけれ  
 五月雨はまのにきふねの河やしるぬれてはすへき夏ころもかな

慈 嶺 和 尙  
 同  
 前民部卿 雅 有  
 中務卿の みこ  
 參 議 爲 相 卿  
 同  
 前中納言爲兼卿  
 從二位爲實卿  
 大藏卿 行 宗  
 後九條内大臣  
 大藏卿 有 家  
 從二位家隆卿  
 後京極攝政  
 從二位家隆卿  
 同  
 藤原資隆朝臣  
 民部卿 爲 家

資盛家歌合五月雨  
 正治二年百首  
 治承二年右大臣家百首  
 正治二年百首  
 六帖題五月雨  
 喜多院入道二品親王家五十首  
 洞院攝政家百首五月雨  
 御集  
 雨中郭公  
 百首歌五月雨を  
 千五百番歌合  
 待人  
 家集夏戀  
 元永元年正月十日中院入道右大臣家歌合五月雨  
 千首歌

五月雨は雲まもなきを河やしるいかにころもをしのにはすらん  
 みたやもりそとの池に水みちてかねてあきある五月雨のそら  
 長秋録  
 五月雨は高嶺も雲のうちにしてなるさはふしのまるしなりける  
 五月雨にふしのなるさは水こえて音やけふりにたちまさるらん  
 みそらにはいほへの雲のはれすのみ雨間もおかぬ五月雨のそら  
 新六  
 いかすへてゆきつもありぬるあま雲のかへりわつらふ五月雨の空  
 山のはにつきまもまちいてよをかさねなほ雲のほる五月雨のそら  
 五月雨の雲のまされになかたえてつゝきもみえぬ山のかげはし  
 花にとひ月にたつねしともなしくもこすみねの五月雨のころ  
 たちはなのにはひこすゑにさみたれてやま郭公こゑかをるなり  
 かすみしくおほろ月夜とみしものをへたてはてつる五月雨の空  
 五月雨は雲まなけれとひさかたの月のさかりはなほまきかな  
 六五 玉戀 新集  
 五月雨のたそかれとよきの月影のおほるけにやはわかひとをまつ  
 まかねたにとくといふなる五月雨になにの岩木のなれる君をも  
 まかねふくおとたえにけり五月雨の日かすふりゆくきひの中山  
 かきりあれば雪もけぬらし富士のやまはれせぬ雲の五月雨の空  
 あしのやのうなひをとめのぬれ衣ころもひさしき五月雨のそら

俊 成 卿  
 同  
 同  
 慈 嶺 和 尙  
 前大納言隆房卿  
 正三位知家卿  
 前中納言定家卿  
 同  
 後京極攝政  
 西 行 上 人  
 參 議 雅 經 卿  
 前大納言兼宗卿  
 躬 恒  
 能 因 法 師  
 藤 原 道 經  
 民部卿 爲 家

毎日一首歌中	五月雨に竹のわかばもたわむまてたまぬきかくるくもの糸すち	同
正元二年毎日一首中	あらし山くつれておつるたきつせの雲まにまろき五月雨のころ	同
文永四年毎日一首中	はれまなきそとの山の五月雨にふる日かさなるみねのあま雲	同
寛元四年日吉社歌合に五月雨を	山もとの入江のいそにたきおちてまはのおさる、五月雨のころ	信實朝臣
光俊朝臣家會夏河	こけのむすいはのかけみち水こえぬきさのをかはの五月雨の比	源仲遠
夏歌中	ともつなをとかて幾日になりぬらんか井のうらの五月雨の比	憲盛
家集	こまわたすやすの河原の柳かけまつえはひちぬさみたれのころ	後徳大寺左大臣
醍醐朝臣家三百六十首歌合	水なしときよてふりにしかつまたのいけあらたむる五月雨の比	四行上人
夏歌中	磯の上ふるのたかはしたかまとも見えすなりゆく五月雨のころ	二條院院政
後九條内大臣家歌合	浪こゆるやそせやいつく五月雨にいせのすゝかのやまかはの水	光俊朝臣
千五百番歌合	船よはふこゑもおよはすなりにけりおほえのきしの五月雨の比	源長俊
最勝四天王院名所御隠子	五月雨にせきりの浪のわかかへりさの、なか河みつまるるなり	具親朝臣
千五百番歌合	五月雨にこえゆく浪はかつまかやかつみかくる、まのつき橋	參議雅經卿
家百首御歌五月雨	五月雨はひまこそなけれ津の國のあしやの里のくものやへふき	慈鎮和尙
有餘	津の國のあしのまろやの五月雨にひまこそなけれ雲の八重ふき	具親朝臣
	五月雨に灘のまほやきいとまあれやおのかたくひの煙やすめて	洞院攝政
	五月雨のなかきさつきの水ふかみたま江のあしの夏かりもせし	加賀右衛門

嘉祿二年百首  
千五百番歌合  
喜多院入道二品親王五十首  
天慶二年二月賀之家歌合  
延和二年四月師時卿家歌合五月雨  
久安百首  
弘安元年百首五月雨  
喜多院入道二品親王家五十首  
家集五月雨を  
洞院攝政家百首五月雨

五月雨はきしのうはてに船つけてなきさをみのよとの河みつ	民部卿為家
五月雨はたのみしのへに水こえていかにたつねんもすの草くき	大納言通具卿
見渡せばあやめにすかる五月雨の軒のまつくやけふのくすたま	正三位季経卿
ふりくらす五月の空のななめにはねのみなかれて人そこひしき	よみ人しらす
七月ふる五月のそらのさかなればはれすも人をわひさするかな	仲實朝臣
五月雨のふるやの板間ひまをあらみもしめてけり床朽るまで	花園左大臣家小大造
たえもせずけふはいくかと五月雨のいとぬきかくるのきの玉水	常盤井入道前太政大臣
五月雨のをやまぬほとはうちへて軒よりおつるぬのひきの瀧	源師光
五月雨のあまの空やふけぬらん木々のまつくの音そすみぬる	源有仲
たちのほる雲間に山は見えそめてやみかたまるき五月雨のそら	民部卿為家

照射

百首御歌  
御集照射を  
照射するたかまと山のまかすかにおのれなかも夏はまららし  
あくるまで箱根の山にねらへとも鹿のたちとそともしかりける  
五月やみくらふの山にともしきて鹿ふすとこをたつねかねぬる  
五月やみほくしの松をまるへにているさの山にともしをそする

同  
同  
同

順徳院御  
法性寺入道關白

同 目をたにもあはせぬ程に明る夜はともしの鹿やうれしかるらん  
 同 五月やみともしにいつる狩ひとのおのかおもひに身をや焼らん  
 重 夕されはともしにいつる狩人のやとさひしくやいもかなくらん  
 少 かり人の夏のよふかくいるさやまともしの影の見えみ見えすみ  
 二條院皇太后宮大貳  
 六條院宣旨  
 百首歌 うちま山すその河原にともし火はそらかなしくや鹿は見るらん

長久二年五月庚申夜祐子内親王家所歌合むさし野のともし

武藏のともしにそいるむらさきの鹿のゆかりと思ひなしつゝ  
 同 いなみのともしの草のまけみに見ゆる火や鹿のたちとの照射なるらん  
 俊 賀 法 師  
 藤 原 助 則

長治元年五月源宗光家歌合山路照射

同 五月暗たつきも知らぬともしすとまかの山路にねらひきにけり  
 二條院 讚 岐  
 權大納言實家卿  
 從二位家隆卿

正治二年百首

同 照射する比にしなければはつくは山このもかのともしあらはなりける  
 同 徒にはくしのかすやあまるへきはやまをいれはかねきこゆなり  
 皇太后宮大夫俊成卿

家集かきよのともし

同 ともしする人やまゑるらんまのふ山まのひてかよふおくの思ひを  
 同 ますらをはまかに心をかけつゝやまのふの山によをあかすらん  
 同 雲井までゆくほたるかと思えつるは高間の山のともしなりけり

正治二年百首

照射にもまなかとりをや大丈夫かゝるのはやまをわけ忍ふらん  
 同 いくよるも葉山の露にまほるらんともしなるともし賤のますらを

家集終夜照射を

神祇伯願仲卿  
 左京大夫頭輔卿

家集

同 梓弓たかまと山にともしひはほくしにかけているにやあるらん

御集

法性寺入道前關白  
 藤原清輔

久安百首

同 五月やみくらふの山にともして鹿ふすとこをたつねわひぬる  
 同 ことほりやさこそはつらく思ふらめ照射の鹿のめをともしあはせぬ  
 高陽門院越前

千五百番歌合

同 照射する賤かゆくへのかなしさもおもひまらるゝ五月やみかな  
 同 あつさ弓ひけは本末よるくはいるのともしまかやかなしき  
 從二位家隆卿

百首歌中

同 夏ころもたつたの山にともしすといくよかさねて袖ぬらすらん  
 同 ともしするまけみかそこのすり衣そてのまのふも露やおくらん  
 前中納言定家卿

文治二年百首

同 夏け山のはくしの光ほのみえて木のまかすかにあくるまのともしめ  
 同 ともしする葉山の鹿は我ことよにあはてこそ身はたすくらめ  
 前大納言爲氏卿

同五年百首

同 ほくしかけ鹿にあひつの山なれば射るにかひある獵男なりけり  
 同 あひつ山すその原にともしすとほくしに火をそかけ明しつる  
 法橋顯昭

六帖題

同 みちとほみほくしの松もきえぬへし八重山越るよはのともしひ  
 同 照射とあふさかまてと思ふかないるをともし關のともしめさらなん  
 同 ともせとも今宵も明ぬいたつらにあふさか山もかひなかりけり  
 修理大夫顯季卿

千五百番

同 五月山みねたつ鹿よこゝろせよともしのせこもみたれいるなり  
 權大納言公實卿

堀川院御時百首

顯家卿家歌合照射

天喜四年五月六條右大臣

家歌合照射

家集十首歌照射及曉

ともしする端山の原にたつ鹿のめも見えぬよをなけきてそふる 俊 頼 朝 臣

麥

山かつのはたにかりほす麥のほのくたけてものを思ふころかな 好 忠  
 みそのふに麥のあき風をよめきて山ほととぎすまのひなくなり 俊 頼  
 かりしほのそともの麥も朽ぬらし干すへきひまもみえぬ五月雨 清 輔  
 たねまきし木の下麥のほにいて、風にあきあるやまはたのいほ 前大納言陸房卿  
 おくるてふ蟬のはつ聲きくよりもいまはとむきの秋をまりぬる よみ人しらす

牡丹

夏木立庭の野すちの石のうへにみちていろこきふかみくさかな 慈 鏡 和 尙  
 くれなゐのいろ深見草さきぬれはをしむこゝろもあさからぬ哉 前全羅長卿  
 むらさきの露さへ野邊のふかみ草たかすみすてし庭のまかきそ 家 隆 卿

榎

百首御歌 夏木立庭の野すちの石のうへにみちていろこきふかみくさかな 中納言家持卿  
 久安百首 くれなゐのいろ深見草さきぬれはをしむこゝろもあさからぬ哉 前全羅長卿  
 建保四年百首 むらさきの露さへ野邊のふかみ草たかすみすてし庭のまかきそ 家 隆 卿

百首 高祿四年百首 六帖題 後鳥羽院御製  
 新六ノ六 民部卿爲家  
 新六ノ六 同  
 新六ノ六 信實朝臣

百合



題不知

正治二年百首

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

夫木和歌抄卷第八 鵜河

二百十七

我妹子か家の垣内のさゆり花ゆりなりといふはうたはぬに似る かふい 紀 豊 河  
 わきもこか宿のさゆりの花かつら永きひくらしかけてすまん 後京極攝政  
 志ほみたぬまのゝはまちのさゆりはもいりぬるいそは浪の下草 寂 菫 法師  
 わきかねし草ふかゆりもありけりと花さきてこそ人もまらめ 正三位經家卿  
 路の邊の草ふかゆりの花ゑみにゑみせしからに待といふへしや よみ人しらす  
 筑波根のさゆりの花のゆとこにもかなしけ妹そひるもかなしけ  
 ともし火の光にみゆるさゆり花ゆりもあはんとおもひそめてき  
 夏狩のせこふみまたきわくる野にまほれやすらんさゆりはの花 坂 上 耶 女  
 人まれすまたはのくすのまくりてにいさとりつかん姫百合の花 殷宮門院大輔  
 百濟野のちかやかまたの姫百合のねもころ人にまらぬそうき 源 仲 正  
 庭のおものつちさへさくる夏の日にひとりつゆけき姫ゆりの花 仲 實 朝 臣  
 雲雀たつあらたにおふる姫百合のなにつくともなき我身かな 土御門院御製  
 今もなは草のまそてにかくろへてあらはに見えぬ野邊の姫百合 四 行 上 人  
 知 家 卿

鵜河

六百番歌合鵜河

大井川なほ山かけにうかひふねいとひかねたるよはのつきかな 後京極攝政

此歌右方人難云月よにもうをつかふことのあるにや陳云月よ 家 隆 卿

とはいへども山かげなどにてはつかふことのあるなり判云左 右人難云聞侍めりと云々

大井河いくせのほれはうかひふねあらしの山のあけわたるらん 家 隆 卿

此歌判詞云うがはのならひは瀬におかひくたすつねの... なるをいくせのぼればと云へるくたさんれうにそあくればあ

けがたことほかに遅くなりいかにも疑ひおほかるべしと云

かつら河七瀬のよとをうかひ船くたしもはてすあけぬこのよは 中宮権大夫家房卿

夜河たつさつきぬらし瀬々少女八十伴の男もかゝりさすはや 法 橋 顯 昭

かひのほる鵜船をしけみ桂かは瀬々のなみやくかゝり火のかけ 光 俊 朝 臣

このかはにさよふけぬらしかつら人鵜繩手にまき船くたすなり 衣 笠 内 大 臣

かゝりさす鵜飼の小舟かひくたりあけてをのほるよとの河なみ 寂 茂 貞 久

あけぬるか小舟のかゝりたき捨て、煙もしらむみしかよのそら 権 僧 正 公 朝

そひ河にあたの鵜飼へかゝりさし千代のひつきの贅そなふなり 法 性 寺 入 道 關 白

もかみ河鵜舟のかゝりもろともにかれてものを思ふころかな 六 條 み こ

よしのなるなつみの河のうかひ舟月夜もわかすやまかけにして

正治二年百首

匡房卿家歌合鵜川

永茂元年五月源宗光家歌合夜川

藤子内親王家歌合鵜川

長承三年九月顯輔卿家の歌合燈

天治元年五月無動寺歌合夜川

同

家集夏河

水風知涼

永久四年百首

同

八條入道太政大臣家歌合鵜川

家集鵜川

同

同

同

篝さしよるへのたなはうちへてのちをもしらぬうかひ舟かな

ひさかたの月のかつらのうかひふね川風はやしたなはみたるな

鵜飼船ちかふ手繩をさはくとともしそかぬるよはのかゝり火

篝火に手繩のかすをくりかへしさはきてもなほあかぬふちかも

あまたとるよかはの手繩きれにけりみたれかちなるわか心かな

よかは船ともすかゝりの光にはもにすむいのかすもみえけり

うは玉のよかはの船のかゝりにはもにすむ魚のかくれなきかな

大井河ふちせもわかすかつくらにまかせてたすかゝり舟かな

かゝりたく鵜河を照すなつ虫のおのかひかりもやみやまつらん

一字抄

うふねさすとせの瀧のゆふ風にまたきたもとにあきをしる哉

かひのほる鵜舟のつなのしけは瀧にふすあゆの行方そなき

鵜船おほくたす折しも瀧川にやなくつれしてあゆこたはしる

かゝり火の光にまかふたまもには鵜飼のいほもかくれさりけり

となせ川鵜ふねにもす篝火のひかりのまゝにわけにけるかな

ますらをか鵜河の瀬々に鮎とると引まらなはのたえすもある哉

もかみ川おとす鵜船のみなれ棹さしもはいかてはやきならなん

篝火の火影に見ればますらをばたもといとなくこひこむらし

皇太后宮大夫俊成卿

よみひとしらす

参議忠基卿

よみ人しらす

藤原忠兼

俊宗法師

行真法師

真快法師

前民部卿雅有

大藏卿行宗

太皇太后宮后

神祇伯顯仲卿

同

太宰尊遠卿

俊頼朝臣

同

百首歌中

御時卿家歌合水邊篝火

夏歌

藤子内親王家歌合鵜川

同

承暦四年十月堀川院中宮歌合鵜河

むむつにて鵜船のかりを見て

夏御歌中

承暦四年堀河院宮歌合鵜川

長治元年六月匡房卿家歌合鵜川

延喜二年中宮御屏風

長歌

をちこちのよかはにたける篝火とおもへは深のほたるなりけり

五月やみかゝりなかけそたかせふねみきはの笠ひかりまけしも

のほりせの岩浪わくるうかひ船ゆきこそやらねみをはやみかも

かゝり火のかけにそしるき玉川の鮎ふすせにはひかりそひつゝ

ふなはたにさほうちならし篝火のいかなるふちを行かへるらん

玉川の瀬々かひのほるかゝり火にさはく手繩のかすをしりぬる

梅津河ともす鵜ふねのかゝり火に底のみくつもかくれさりけり

かゝり火のひかりももうすくなりにけりふなみかほの曙のそら

よしの川うふねやつれて上るらんさをさす音のしけくもある哉

よしのかは河瀬をくたす鵜飼船うつなはなみのよるやくるらん

しらかはの瀬をたつねづゝわかせこは鵜河たゝさは心なくさに

おほそらにあらぬものからかはなみに星とそ見る篝火のかけ

こもりくの、はつせの河の、のほりせに、うをやつひたし、くたり

せに、うをやつひたし、のほりせの、あゆをくはしめ、くたりせの、

同

よみ人しらす

従二位行家卿

武

源頼綱朝臣

仲實朝臣

惠慶法師

後一條入道關白

源經兼朝臣

よみ人しらす

同

真

よみ人しらす

水鷄

うしまと、いふ所にて水  
雞のたいくおとまければ

家集海邊水雞

神山といふ所にてくひな  
水承六年五月庚申夜祐子  
内親王家歌合くひな

君臣御歌合

散木  
かしまとをたく水鶏の音すなりなみうちあけて誰かきくらん

里のあまはなるとの浪に耳なれてたく水鶏におとろかすとか

柴の戸をたたくと思ひてあけたれば人もこすゑの水鶏なりけり

門させるやとも見えぬ梢にてなにをあげぬとたくくひなそ  
夕つくよ卯の花かきにかけてそひてのきはにちかく水鶏なくなり

螢

建保三年名所百首歌

大江山まけみかもとにましりても人に志らるゝはたるなりけり

同

ちえにもる志のたの森の下露にあまる志つくやはたるなるらん

同

秋かせをみつのみまきのまこもくさかりにもつけてゆく螢かな

同

かはつなくいかほの沼にすむ螢もゆるおもひにねをそあらずふ

同

まくす原たままくさすやまさるらんはにおくつゆに螢とふなり

同

ねにたて、つけぬはかりを螢こそ秋はちかしのろに見せけれ

同

夏むしの身をともしける光こそやみにまよはぬ志るへなりけれ

同

さは水にはたるの影のかすそふわかたましひや行てくすらん

家集夏中歌

順徳院御製

僧正行

正三位知家卿

從三位行能卿

後京極攝政

同

寂蓮法師

四行上人

同

文治五年五社百首歌

正治二年百首

千五百番歌合

同

同

同

承久六年四季百首

百首歌

御集

千五百番歌合

百首歌

六十五韻字歌夢覺愁人枕  
不知

永久四年百首夏虫

喜多院入道二品親王家五  
十首

堀河院御時百首

おほえぬをたか魂のきたるらんおもへはのきにはたるとひかふ

としけつ光を見るはあはれなりあれにし路のほたるなれとも

新後拾夏  
水くらき岩間にまかふ夏むしのとしけちても夜をあかすかな

ともしける澤のほたるはほの見えてくもるも志らぬとりの一聲

夏むしのとしすてける光さへのこりてあくる志のめをそら

玉にまかふよはのほたるの影むれて雲井のかりの聲をまちける

いにしへの野守のかみあたとたえてとふ火はよはの螢なりけり

むかし思ふとふひや螢春日の、野もりやいかにゆふやみのそら

やみといへはまつもえまさる螢もや月になくさむ思ひなるらん

まとわたる宵の螢もかけえぬのきはに去ろきつきのはしめに

軒老ろき月のひかりに山かけのやみをまたひて行はたるかな

むらさめのくも間のにたるかす見えて風吹すふ庭のなつくさ

水くらきあし間の池のゆふ暮によを去るむしのかげそほのめく

かり枕またふし馴ぬあしのはにまかふはたるそくるゝよはしる

草むらにすむ夏むしはその秋くちしたはのなかにや有らん

五月雨はまよのかやふきのさくちてあつめぬまとも螢とひかふ

五月雨にくさのいはりはくつれとも螢となるそうれしかりける

同

皇太后宮大夫俊成卿

式于内親王

大納言通具卿

二條院院

西園寺入道前大政大臣

寂蓮法師

從二位家隆卿

前中納言定家卿

後京極攝政

後鳥羽院宮内卿

土御門院御製

中務卿みこ

前中納言定家卿

源兼昌

前大納言兼宗卿

前中納言匡房卿

正治二年百首

五月雨の庭のよもきやくぬらんすくるほたるの敷そひにけり

小侍 從

同

すゝみけんむかしやまのふ橋のにはふまそてにくるほたるかな

從二位家隆卿

柿本影供百首

あけ行はもゆるほたるも影きえてけふりを水にのこすなりけり

喜多院入道二品御

寶治六年百首水邊盤歌

草わけてもゆるほたるやいはたきの浪のうはての夏のさわらひ

後九條内大臣

名所歌内興津盤

さよきせに螢ゆふる玉さゝの葉わけのみつのいろそすしき

同

建長八年百首歌合

岩こゆるおきつの浪に影うきてあらいそつたひゆくほたるかな

參議爲相卿

同

船とめぬみなどのあしの絶え間よりとす籜やよはのなつむし

右近中將經家卿

同

身にあまる思を人に見せんとてそてまのうらに飛ふほたるかな

土御門院小宰相

同

けふりたつ富士のすそのに飛螢もゆるおもひを身にやしるらん

藤原伊嗣朝臣

建仁歌合

もしほやくあしやのあまのうきねたに浪にまをれてゆく螢かな

後久我太政大臣

家集

あしの葉にまかふ螢のほのくるとたりそ渡るまのつきはし

鴨長明

建仁二年歌合

螢飛ふまかのおほわたなみふけてあまなき里にあまのいさり火

慈鎮和尚

夏歌中新深歌

もかみ河すたく螢はいなふねのほればくたるかゝりなりけり

大江廣百

家集

きよたきのせいのまらいとのおのつから玉ぬきとめすちる螢かな

正三位知家卿

光隆院入道二品親王家五十首

雨ふれとくるれはもゆる夏むしのたれゆるつむころもての森

從二位家隆卿

伊勢のうみの入江の草のまほひかたあまのはたるの玉は拾はし

同

承久二年四季百首

たか袖につゝむほたるのころもかは思ひあまりて玉とうくらん

同

家集

里人もいまはみくさをうちらはらひほたるはかりや玉の井のみつ

同

家集海邊盤

はま風になひくの島のさゆりはにほれぬ露はほたるなりけり

清輔朝臣

題不知

ひろふてふたまにもかまなひさきおふる清き河原に螢とふなり

信

永仁二年内裏五首水邊夏

みたれゆくほたるの影やたきかはの水くらきよの玉をなすらん

參議爲相卿

乾元元年仙洞歌合

みたれゆく螢のけしきなきみえて月におとらぬ夏のゆふやみ

同

後九條内大臣家百首盤

島ひくいらかかさきの浪間にもこたへぬ玉はほたるなりけり

同

十禪師社百首樹下盤

おとは河かはそひやなきふく風にかたへ秋なるなつむしのかけ

同

喜多院入道二品親王家

おとは河せいのいはなみ玉ちりてもゆるほたるも影そすしき

同

住吉社百首御歌

住の江のよるのほたるのあはれさをなほおもはする松風のこゑ

同

文應元年七社百首

住の江の玉もひとつにうつりつゝ浪のそこにもとふほたるかな

同

河邊几盤と云とを

水川のはまのなみにとふほたるくたくる玉のきえぬとそみる

同

千首歌

むもれ木の心もまらす名とり川さもあらはれてとふほたるかな

同

文應元年毎日一首中

くるゝ夜はうきてほたるの思ひ川うたかた誰に消えはかぬらん

同

新編百首

小倉山夕やみかこつあめのよのまととふものはほたるなりけり

同

長久二年五月祐子内親王家名所歌合

あさか山あさきながらも山の井のかけみる水に行くほたるかな

同

名所歌合

名とり河をこさへそてる夏の夜はほたるひまなくみえ渡りつゝ

同

小將内侍

よみひとしらす

同

染河登

行路登

古寺登

河登を雲葉

旅登

仁和寺殿にて人々作文せられける次に水上登

家集登火亂風

長承三年六月常盤井五百香歌合登照細流

源川院御時百首

家集中

長恨歌夕殿登飛思惟然

家集なりとく雲のまきといふ事な

享子院歌合借于日

家集はたるな

いさり火の浪まわくるとみゆれともそめかはわたる登なりけり

行くれぬほたるすたかぬ夜半ならはまよひやせましふるの中道

いまそまゑる雲の林のほしはらや空にみたるゝほたるなりけり

ほたるとふ岸の木陰やあまのかはほしのはやしの名には立らん

散木夏  
あらし山ほたるをかけのまゑるへにてたとは谷のこすゑ成けり

よるひかる玉をなかとみえつるは河くたり行ほたるなりけり

風ふけはうちあくる浪にたちあひして玉のひふつくよはのなつ虫

夏むしのほそたにかはをてらすよはたまのおひするきひの中山

まかねふくきひの中山夏くれはすたくほたるのかけそひまなき

帯にする細谷河に見ゆる火はほたるもまかねふくにやあるらん

巴字なすみきはにめくる登かなあふむのつきにあらぬものゆる

なかれゆく河邊にすたく登をはいさこにましるこかねとそみる

續後拾遺 好家集夏  
ゆふやみにあまのいさり火見えつるはまかきの島の登なりけり

思ひ餘り戀しき君かたましひにかけほたるをよそへてそ見る

あまひこよくものまかきにとつてん戀の登はもえはてぬへし

六帖六  
くらきよにともす登のむねの火をおしこめもたる玉かとそみる

夏蟲はうらやましくやおもふらんおのか思ひにもえぬほたるを

大納言經信卿

同

同

法印實仲

俊頼朝臣

源仲正

同

同

爲忠朝臣

藤原盛忠

藤原盛忠

隆源法師

好忠

大宰大貳高遠卿

祐舉

忠舉

能因法師

御集登

建長八年百首歌合

百首歌登火透履

家集

祇園社百首登

百首御歌

夏御歌中登火亂飛秋已近

同

家集登

同

微子内親王家歌合

同

正治二年百首

光義院入道二品親王家五十首江登

同

百首歌登

いたつらに身をたきすつる登かなのりのためとは思はさるらん

かけるふのゆふさりくればとふ登なれもなにゆるもゆる思ひそ

玉すたれいふせきなかのむつことをおもひまりてもゆく登かな

まきのともさすすしき背のまのすたれにすきてゆく登かな

身よりあまる心の程は知らねとも袖のほたるはあはれなりけり

をやま田は夏の暮こそうれしけれいなほたるは賤のかやりひ

ゆく登かねて雲路やおもふらんかりなきぬへきかせのけしきに

かきつはたおふる澤邊に飛ふほたる敷こそまされ秋やちかけん

うつりゆく草葉にたまをあらはして露くらへなる夏むしのあと

かねてより草はにおもる白露はまたよにいらぬほたるなるらん

くさまけみまかふ登のひかりこそむら／＼おける露とこそ見れ

ひかりそふ夕への露と見えつるは草はにまかふほたるなりけり

夜もすからくさはにつたふ登こそ風にはほれぬつゆとみえけれ

かゝりさすたなし小舟こきかへり入江のほたる敷そゝひゆく

夏と秋とたれかはわきてみつの江にかたへすゝしく行ほたる哉

日くるれば袖のみなとをゆくほたるさわく思ひの程やみゆらん

中務卿みこ

法印實伊

寂蓮法師

參議爲相卿

皇太后宮大夫俊成卿

喜多院入道二品のみこ

後京極攝政

鎌倉右大臣

前民部卿雅有

後九條内大臣

武藏

同

二條院讃岐

家長朝臣

法印幸清

光俊朝臣

夏神樂

屏風歌なかの夏神樂する  
所  
天慶四年内裏夏神樂  
四季百首夏神  
正治二年百首  
家集夏神樂  
式于内親王家歌合  
家集夏神樂  
家集夏神樂  
夏神樂をよめる秋摺風  
夏神樂歌中

山人のたけるには火のおきあかしこゑくあそふ神のきねかも  
ゆく水のうへにいはいはへるかはやしう河浪たかくあそふなるかな  
拾遺外上  
みな月のつきかけまのきをみ衣うたふさなみよるそすしき  
ゆふかけてさかきをいはふ河やしるをりめつらしきさ浪の聲  
明玉  
まのにをるあたりもすし河社さかきにかくるなみのまらゆふ  
いはかねに浪かけこゆる河やしるまのころもやほさて涼しき  
かはやしう浪のまめゆふ水のおもは月のひかりも清く見えけり  
歌苑抄  
かは社まのにふりはへあきつはのそてふる妹もなつかくらす  
かは社まひまはかくれゆく水になかれぬなみやまのゆふして  
同  
かは社まなみをればみなつきあらふる神もころゆくらん

夏雜

三百六十首夏歌中

家集  
夏の夜の長閑けき雨をあしひまの山まつかせのふかそそきく

順  
貫  
前中納言定家卿  
隆信朝臣  
西行上人  
参議爲相卿  
清輔朝臣  
權僧正公朝  
中原光成  
藤原重義

好  
忠

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

あらはにて焼生にみえしはるの野も夏はいろく花さきにけり

なつかしく手にはをらねと山かつの垣根のむはら花さきにけり

庭におふるあさてかはなをばやしけん昔の人そみねとこひしき

けふよりは名越の月になりぬとてあらふる神にも物物のなるなへのなりなへる

花ちりしはるの嵐をおしおきてなつのひよりにふかせてしかな

夏かはのいはねをわくる岩千鳥つひにさてやはよをばすくさん

散木  
をくろさきあなねぬなはふみまきひもゆふまに蛙鳴なり

見わたせは浪もゆるかぬ夏の日に松かけとほきいそのほそみち

ほととぎすおのかさつきくれしより歸雲路にこゑうらむなり

ほととぎすこゑたえくにきえはつる雲路もつらきみな月の空

秋ならて野邊のうつらの聲もなしたれにとほまじふ草のさと

夏ふかきそのの植木をまつかなるこすゑのとりや昔におるらん

つくりやらぬ夏の荒小田拂ひかねよもきながらや今かへすらん

夏をあさみ露おくとしはみえねとも草葉すしきあさあけの庭

かはつなく田中のゐとにひはくれておもたかなひく風わたる也

秋きぬといはぬはかりそ月きよみ下もみちするまのはきはら

日くるれば下はこくらき木のものおそろしきなつの夕暮

同

同

同

同

同

同

忠

俊

後鳥羽院宮内卿

後京極攝政

同

同

後九條内大臣

参議爲相卿

同

寂蓮法師

寂念法師

好

忠

同

露

六月瀬整似雨と云事な

建長三年毎日一首中

三百六十首の中

藤原長輔すゝめける六首

三百十首中

正安二年夏百首歌

建保四年百首

百首御歌夏

いもと我ねやのかさとに遊寐して日たかき夏のかけをすくさん

下もみち秋もこなくにいろつくはてる夏の日にこかれたるかも

夏六の日にこかるゝ山のくさなれやまはしの露にこゝろやるらん

うちよする瀬々の白浪おとたかみまたみな月にまくれふるらん

あま雲の五月雨くれしそらはれてけふみか月のかけもめつらし

夏はきのあさのをからとあた人のこゝろ軽さといつれまされる

雨そゝくもりのみとりの夏木たちそめんもみちの色はまたれす

あかねさす岩戸の山も見えぬへしめをきはめても照れる夏かな

ふきまをるけしきはみえて夏山のわか葉によわき風のおとかな

ものことに時雨のわきし松の色をひとつにそむるなつの雨かな

むらさめの雲ふきさすさふゆふ風にひとはつゝちる玉のをやなき

同

同

よみ人しらす

前中納言匡房卿

民部卿為家

好

藤原為顯

好

参議為相卿

前中納言定家卿

順徳院御製

### 夫木和歌抄卷第八終

### 夫木和歌抄卷第九

#### 夏部三

夏夜

夏月

紫陽草

夏草

夏野

蚊遣火

夏衣

扇

菝麥

瓜

夕顔

蓮

題

菱

夏田

夕立

蟬

茅蜩

納涼

泉

水室

夏鹿

夏虫

晚夏

荒和歌

#### 夏夜

建保四年百首歌

千五百番歌合

弘安三年檢柄宮百首

百首御歌

十題百首御歌

夏の池のみきはにともすかゝり火のひかりもすゝしゆふ闇の空

夏むしの思ひをうつす池みつにたくひまらするかゝり火のかけ

更行けは庭のかゝり火やき捨てはたるにゆつるなつのみしか夜

雨をやむ雲のうすみをゆく月のかけおほなるなつのよのそら

夏のは枕をわたる蚊のこゑのわつかにたにもいこそねられね

光明寺入道攝政

後久我太政大臣

安嘉門院四條

後鳥羽院御製

後京極攝政

六百番歌合夏夜

建久二年百首歌

六百番歌合夏夜短

うたゝねの夢よりさきに明ぬなり山ほととぎすびとこゑのそら  
大井かはなつのみむすふ筈やかたみしか夜ならぬ月もやとらし  
夏の夜はなかるゝ水のうきまくら結ふほととぎすうたゝねのゆめ

同 前中納言定家卿

同 同

夏月

千五百番歌合

老若五十首歌合

文永十年毎日一首中

建仁二年水無瀬殿六首御  
合川上夏月

家集

嘉元元年百首夏月

乾元元年仙洞歌合夏月

三百六十首中

夏歌中

一字百首

家集夏夜短月

かさゝきの雲のかけはしほとやなき夏のよわたるやまのはの月  
ほととぎす鳴ねも稀になるまゝにやゝ影すゝしやまのはのつき  
かさゝきのかゝみの山のなつの月さしいつるより影もくもらす  
たかせ舟くたす夜川のみなれさほとりあへすあくる夏の月かけ  
きよみかた袖にもなつの月をみてかたへもまたぬ風そすゝしき  
待いてしは山の木の問まけりあひて影とほくなる月にはかな  
空にしるく袖にすゝしきかけみえて月は夏とそまたおもはるゝ  
影きよみ夏の夜すからてる月をあまのとわたるふねかとそみる  
なつもなほ雪けのみつにつきさえて氷まぬへきふしのまはかは  
夏の夜はうきあかつきの雲もなしこゝろのそこに月はのこりて  
かりそめの夕すゝみなるうたゝねにやかて有明のつきをみる哉

後京極攝政

同

民部卿為家

中納言定家卿

同

参議為相卿

前中納言為兼卿

よしした

法昭源全  
(他本権律師仙覺)

前中納言定家卿

源仲正

百首御歌

千五百番歌合

六百番歌合

六帖題夏月

保延二年家成卿歌合夏月

久安二年六月顯輔家歌合  
夏月

山家夏月

月のいろも秋ちかしとやさ夜ふけてま垣の萩のおとろかすらん  
まちもせすをしみもあへぬ夏の夜は山の端うとき月をこそ見れ  
すむ月のひかりは霜とみゆれともまたよひなからありあけの空  
庭のおものみつ音ちかきうたゝねにすたれ涼しき月をみるかな  
夏の夜はひかりすゝしくすむ月をわかもの顔にうちはとそみる  
夏やまの木々の木葉も白たへにはなさけるかと思ゆるつきかけ  
またてたゝこえてや見まし山の端をいつれはあくる夏のよの月  
なつ河のそこまで月のすみぬれは瀬にふす鮎のかすもみえけり  
山さとはこやのえひらに澄月のかけにもまゆのすみはみえけり

式子内親王

宜秋門院丹後

従二位家隆卿

信實朝臣

高松院右衛門佐

源親房

よみひとしらす

源頼朝行

俊頼朝臣

紫陽草

だいしらす

久安百首御歌

家集夏月

顯仲朝臣家十首歌合

千五百番歌合

萬廿六  
あちさのの八重咲ことくやつよにをいませ我せこみつゝ忍はん  
紫陽草のよひらの八重に見えつるは葉越の月の影にそありける  
あちさのの花のよひらに照月のかけもさなからをる身ともかな  
紫陽草の花のよひらは音つれてなそいなめのなさはかりは  
夏もなほこゝろはつきぬあちさののよひらの露に月もすみけり

橘左大臣

崇徳院御製

俊頼朝臣

同

皇太后宮大夫俊成卿



百首歌

御集

六帖題

あちさの下の葉にすたく螢をはよひらのかすのそふかとそみる  
とふほたるひかりみえゆく夕暮になほいる残るにはのあちさの  
花咲し庭のあちさのあちさなくとてよひらにわれをすてけん  
あちさのよひら少なきはつ花をひらけはてすと思ひけるかな  
去もつけや離に交るあちさのよひらに見れば八重にこそさけ  
これ程とひとはおもはし川かみに咲つゝきたるあちさののはな

中納言定家卿  
衣笠内大臣

同

信實朝臣

光俊朝臣

権信正公朝

夏草

六百番歌合

同

なつやまの草はのたけそまられぬる春みし小松ひとしひかすは  
なつくさの野鳥かさきのあさ露をわけてそきつる萩かはなすり  
なつきてそ野中のいほはあれまざる窓とちてけりのきのした草  
まげき野と夏もなりゆくふか草の里はうつらのなかぬはかりそ  
うつら鳴夏野のくさはおいにけりあさふす鹿もみえぬはかりに

前中納言定家卿

法橋顯昭

大藏卿有宗

従二位家隆卿

よみひとしらす

承久四年六月八條入道太政大臣歌合夏草

此歌判者顯季卿云左夏草はくせなくみせ給ふれど右よりうつ

らは秋なんなく夏鳴かぬものなりと侍めれば證歌こそはいた

さるべけれと其歌出こすばあやまれるにやと云々

承安三年經正朝臣歌合夏草

文永三年毎日一首中

貞應三年四季百首夏朝

六帖題

藤子内親王家歌合夏草

寶治二年百首

三百六十首中

同

同

家集夏戀

寛喜元年女御入内御所風

建保三年名所百首

いさやこら朝露わけてかりゆかむをしが臥野のなつのくさたち  
草ふかみむしのたれきの結びあけてとほりわつらふなつの旅人  
夏草のつゆけき中のまもつけにむろのやしまのことやとはまし  
夏くさの夜の間の露のまた葉までさもほしはつるあさひかけ哉  
御馬草にいくたひかりつ又はえのまのをすゝきほに出ぬ間を  
夏草をむすふまゐるしのなかりせはいかてゆかましやま里のみち  
遠つ人なつみくるかもみやけちの夏野のくさのしけりゆくころ  
夏麻のした葉のくさのまげさのみ目ことにまざる比にも有かな  
大原やせかゐのみくさかり分てをりやたゝましすゝみかてらに  
わかせこかきませりつると見ぬ程に庭の小草もかたまよひせり  
あふことはなつ野に茂る戀草のかりはらへともおひむすひつゝ  
森のかけまたほに出ぬなつ草のたもとすゝしきやまの井のみつ  
ふみまたく淺香の沼のなつ草にかつみたれそふしのふもちすり

前參議經隆卿

正三位季能卿

民部卿爲家

同

光俊朝臣

よみひとしらす

前中納言定嗣卿

よした

同

同

俊賴朝臣

従二位家隆卿

前中納言定家卿

夏野

六帖題

夏ふかみまたかりそめぬ粟つ野のきゝすのひなの草かくれつゝ

衣笠内大臣

家集夏歌中

おのつから萩女郎花さきそめて野邊もやあきのけしきなるらん

後 頼朝 臣

蚊遣火

百首御歌

下くゆるむかひのもりの蚊遣火におもひもえそひゆくほたる哉

後鳥羽院御製

同

かひたつるかきねむかひの細道はみやこの人にみせまうきかな

喜多院入道二品親王

千首歌

人とはぬやとの蚊遣火しはくへて夏もみやまのいほそさひしき

民部卿為家

同

かやりひの煙はかりやまらるらんはやまかみねの柴のかりいほ

同

住吉社百首

けふりゆる菰屋とよそにおもふらし蚊遣火たつるすみよしの里

慈 鎮 和 尙

正治二年百首

かやり火やあまの菅屋におきつらんたくもの煙たちそまされる

正三位季経卿

女につかはしける

藻屑たく蚤のかやり火それすらもすゝろにかゝる下もえやせし

藤原雅親

建長八年百首歌合

いかにして人に去らせんもくつたく蚤の蚊遣火くゆりわふとも

衣笠内大臣

蚊遣火を

すみかまはたく人あらし小野山のなつのけふりや宿のかやり火

後九條内大臣

堀河院御時百首

蚊遣火のけふりになるゝこもすたれものむつかしき我こゝろ哉

俊 頼朝 臣

百首蚊遣火

雲かゝるとほちのさとの蚊遣火にけふりたつともみえぬ也けり

権中納言時卿

文治六年五社百首

夕立のそゝきて過るかやり火のめぐりはてたるわかこゝろかな

皇太后宮大夫俊成卿

かやり火

かはつなくかひやにたてる夕けふりまつかまわさも心すみけり

同

文應六年七社百首かやり火  
永仁元年内裏歌合野亭夏朝

夏ふかきまつか山田におくかひはほにこそいてね下むすひつゝ

民部卿為家

百首歌

かやり火のけふりや庵にのこるらんかすむす野の明ほの空

藤原為通朝臣

正治二年百首夏歌

蚊遣火のけふりのすゑもほのかにてかすみにのこる夏のよの月

寂 蓮 法師

御集蚊火

山かつのけふりはかりとおくかひのうへにもゆるは螢なりけり

同

御集蚊火

すゝろなる難波わたりの煙かなあし火たくやに蚊火たつるころ

後京極攝政

夏衣

三百六十首中

夏の日すかのねよりもなかきをそ衣ぬきかけくらしわひぬる

よ した

承久四年百首夏衣

夏衣いもかみけしのあやなれはうらなきさへそしたにきまうき

俊 頼朝 臣

建保三年名所百首

夏ころもいつかはときをわすれ草ひもゆふくれのあまのかこ山

從二位家隆卿

建久七年百廿八首

まのゝめのゆふつけ鳥の鳴こゑにはしめてうすき蟬のはころも

前中納言定家卿

六百番歌合夏衣

たちはなの匂ひをかせのさそひきてむかしにかへす夜はのさ衣

大藏卿有家

久安百首

のきちかき花たちはなにかせすきて匂ひを殘すせみのはころも

陸 信 朝 臣

承久二年四季百首

きてかへるものともまらて夏きぬのひとへ心はすかされにけり

花園左大臣

六帖題夏衣

せみのはのうすき衣のひとへやまあを葉すゝしき風のいろかな

從二位家隆卿

新六、五  
よを安み民のわつらひかへりみてひねりかさねはさる人もなし

光 俊 朝 臣

扇

六百番歌合扇

同

同

家集夏歌

永久四年百首扇

家集

藤子内親王家歌合夏夜月

手にならすなつの扇とおもへともたゝあき風のすみかなりけり  
うたゝねに扇をならすとこの上の月とかせとはあきのものかは  
うちばらふ扇のかせのほとなきにおもひこめたる萩のおとかな  
うらみても散にし花をたつねはやあふきそ風のやとりなりける  
雪のいらの夏もきえせぬかひやこれあふきの風の秋よりもけに  
袖の内になかはかくるゝ扇こそまたいてやらぬつきとみえけれ  
あかねさす青みな月の日をいたみ扇のてかせぬるくもあるかな  
ふりつみし雪の心のかよへはやあふきのかせのすゝしかるらん  
するひろのなゝつ骨にてはる扇やつれにけりなもとのたかたに  
手なれけるぬしはまらねとむらさきの扇の風のなつかしきかな  
しら露とおさまとはする秋ともりのにあふきの風はことなり  
此歌水無月のつごもりがたに六波羅の説經さゝにまかりたる  
人あふぎを取かへてやるとと云々

夏の夜の月みるほとすゝしさはうちのはの風にけにそたかはぬ

後京極攝政

陸信朝臣

從二位家隆卿

寂蓮法師

大藏卿有家

正三位季經卿

惠慶法師

仲實朝臣

藤原忠房

六條院大進

和泉式部

源賴綱朝臣

六帖題

四季百首夏旋

六帖題

同

六帖題扇

新六ノ五  
かくれける月にたとへし扇こそふかぬかせをもまたをしへけれ  
たひまぐらまろき扇の月かけもなれてくやしきかたみなりけり  
うつりかの身にしむはかり契とてあふきの風のゆくへたつねは  
新六ノ五  
ひのおものさかりをつけたをやめの扇の音もえやはわするゝ  
日くるれば軒にとひかふかはほりの扇のかせもすゝしかりけり  
おほあふきさしかくしてそ行ひの深きことをはならひつたへし

民部卿爲家

同

同

光俊朝臣

衣笠内大臣

權僧正公朝

瞿麥

六月内裏のぜんざいほりにまかり侍けるにさがのにて撫子を

新古今夏

家集  
家集なてし歌合  
たいしらす  
家集なてし  
久安百首

ほとゝきす鳴つゝかへるあし引のやまとなてしこ咲にけらしも  
二葉なるわか撫子もあはれなりびくその秋にあはんとするらん  
山賤のかきはをせはみおひそめしいろとはみゆやなてしこの花  
かすかのゝやまとなてしこをりてける心を人はおもひまらなむ  
君か代のためしにひかん春日野はいしの竹にもはなさきにけり  
今朝も又いさみにゆかんさゆりはに枝さしかはすなてしこの花  
庭の面の苔路の上のからにしきまとねにまけるとこなつのはな

能宣朝臣

たみかね

元真

よみ人しらす

俊賴朝臣

皇太后宮大夫俊成卿

寛喜四年五月六條右大臣  
歌合歌  
千五百番歌合

庭のおもにから紅のこまにしきまけるとそみるやまとなてしこ  
みぬひとをまつの木かけのこけむしろなほ敷嶋や大和なてしこ

仲 實 朝 臣  
後鳥羽院宮内卿

暹不知

よそへけんむかしの人のみるに似て露にぬれたるなてしこの花  
撫子のうすくもこくも日くるればみん人わきておもひさためよ

小 侍 從  
贈太政大臣(兼)

百首御歌

夕かすみたなひくやまの春よりもいろの千種にさけるなてしこ

順 德 院 御 製

元喜四年五月八條右大臣  
家歌合なてしこ

詩しにはおなし種とそみえしかと千くさにさけるなてしこの花

源 親 元 朝 臣

天喜元年五月十一日庚申  
夜禪子内親王家歌合

いろくくにほひふかくもみゆるかな千代をこめたる床夏の花

よ み 人 し ら す

光善院入道二品親王家五  
十首御歌なてしこ

うすくこきまかきにうるしとこ夏のいろをわすれぬはなの朝露

権 律 師 隆 昭

建長八年百首歌合

夕立の露おきわたすませの中にみたれてさけるやまとなてしこ

右 近 中 將 經 家 卿

同

たかために手折てゆかんなてしこはとみのをかへにいま盛なり

前 大 納 言 顯 朝

暹不知

せに立てとみの岡邊の撫子の花房手折我は行きなん奈良人の爲

よ み 人 し ら す

同

たかまとの秋の野かみの撫子の花盛か人ものかさし撫子の花

同

同

住のえのこすのとこ夏さくもみす隠れてのみやこひわたりなん

同

建保四年百首

よそへてのかひこそなけれまつ人のこすのとこ夏花にさけとも

前 中 納 言 定 家 イ

同三年家百首歌合

ゆきしまや岩ほなてしこ水こえてやとる月さへうつろひにけり

光 明 峰 寺 入 道 攝 政

同

戀しくはなとかはとはぬゆきしまの岩ほにさけるなてしこの花

從 二 位 家 隆 卿

同  
家百首

まれにくるをどめの袖やなてしこの花咲かゝるいはほなるらん  
古郷やたれによそへてうゑおきしかきねなてしこ花さきぬらん

同  
民 部 卿 爲 家

建長八年百首歌合

若ら露のたまはおつともふるさとのかきね撫子志をれさらなん

衣 笠 内 大 臣

同

色ふかくおもひそめてしなてしこのその花つまは今もあかれす

前 大 納 言 顯 朝 卿

光善院入道二品親王五十  
首御歌子

おく露ややとりなるへき夕暮のまかきはやかてやまとなてしこ

參 議 雅 經 卿

同

花の色によるはこえしと宿りしてくるまかきは大和なてしこ

正 三 位 知 家 卿

長永三年爲忠朝臣家歌合  
夜思撫子

玄ろたへの露の玉きぬうへにきてからなてしこの花やねぬらん

よ み 人 し ら す

修子親王家歌合聖夢

大和にも唐にもほふ花なればかきはほかにてらすなてしこ

加 賀 左 衛 門

永久四年百首なてしこ

おほつかな唐なてしこをこゝまてにたれかわたして植初めけん

源 兼 昌

夏歌中

大和ともからとも見えす山しろのこまのにさけるなてしこの花

権 僧 正 頼 信

洞院攝政家百首五月雨

さみたれに蓬かしたはみつこえてかきはあれゆくなてしこの花

俊 成 卿 女

同

さみたれに袖もぬれくはらへとも露おもけなるとこ夏のはな

藤 壁 門 院 但 馬

百首歌

とこなつの花にはつゆもおくものを秋にさきたつ蟲のねもかな

寂 速 法 師

久安百首

とこ夏の花のいろくちりゆくは秋のとなりやちかくなるらん

前 參 議 教 長 イ

天曆十年五月芳子女御歌  
合

たつのすむ濱へに匂ふとこなつはいととのとき影そみえける

中 務

なてしこ

なてしこの花咲そむる夏の野にけふひくらしのこゑそきこゆる

よ み 人 し ら す

家集聖夢

なてしこの花はあたる種なればいさしら川の野へにちりにき

小 野 小 町

家集

權中納言俊忠卿家歌合盟  
參判者俊賴朝臣

家集古郷なてしこ

草中なてしこ

保安二年閏五月贈左大臣  
長重卿家歌合盟

天曆十年五月芳子女御歌  
合

長承三年六月爲忠朝臣家  
歌合夜思親參

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

なてしこの花咲にけりなきひとの戀しきときよきかたみくさ

露おもみまたをれふして常夏のおきぬやはなのあさいなるらん

ふるさとにわかまき捨し撫子をたれあはれとおほしたてけん

はらひあけぬ祿の下はかくせともこかねのせにの花はやつれす

終日にみれともあかすあをによしならのみやこの大和なてしこ

古郷となりにし小野のあさ露にぬれつゝにほふやまとなてしこ

宮城野にけふ咲そむるなてしこはならぬいろに人やみらん

夜もすから哀とそ思ふその原やひとりふせ屋のとこなつのはな

露けさは思ひこそやれわきもこかひとりふしみのとこなつのはな

旅ねするひとにまらるななつかしき伏見のさとのとこなつのはな

うらやましなつさふ人やたれならんふしみのさとのとこ夏の花

よかれせて露もおかすなきみとわかふしみのさとのとこ夏の花

よそなからあはれとそ思ふ川島の草のはつかにみゆるなてしこ

うら人やかさしにをらん草の野島かさきのやまとなてしこ

このうちに夜なくつるのこゑまでも思へはかなしなてしこの花

とこなつの花にたまなるゆふ暮をまらてやしかの秋をまつらん

かつ見てもめつらしき哉なてしこのいやはつ花の色をそへつゝ

み っ ね

源 仲 正

同

同

爲 忠 朝 臣

鎌倉右大臣

清涼殿女御

藤原道經

よみひとしらす

源 淳 國

爲 忠 朝 臣

法性寺入道關白家淡路

民部卿爲家

衣笠内大臣

權僧正公朝

後京極攝政

正三位季經卿

寛喜三年女御入内御屏風

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

咲まさるいやはつ花の日をへつゝまかきにあまる大和なてしこ

くれなるのやしほの錦たれそめてまかきにさらすとこなつのはな

久かたの雨はふりしくなてしこのいやはつはなに戀しきわかせ

我せこか宿のなてしこちらめかみやはつはなに咲はますとも

撫子は咲てちりぬとひとはいへと我ぞめし野の花にあらめやも

みわたせはむかひの野への撫子のちらまくをし雨なふりそね

よろつ代の岩ねにねさすとこ夏にいとよときはの松をおひそふ

前中納言定家卿

民部卿爲家

中納言家持卿

同

同

よみ人しらす

元 輔

瓜

小うり人の宮の御方に

奉けるを

ちひさき瓜を人のおこせ

たるを

鳥の子のやうなる瓜を有

所にたてまつるとて

家集

屏風夏歌

同

山城のとはのわたりのうりつくりこまほしと思ふ折をおほかる

いはくらや田中のむらの瓜つくり秋ははつともかりにもなせそ

我君のますへき千代のまるしにはつるのこにこそ瓜もなりけれ

柴かこふ園のうりふのいつらになるとしならはまるひあへかし

我宿のませのわたりにはふ瓜のなりもならずもふたりねまほし

山城のとはにかよひてみてしかなうりつくりける人のかきねを

此歌小大君家集云大監物なりけるととき内侍どころにみかきも

權中納言定頼卿

胎 聖

憲 慶 法 師

權中納言長方卿

鎌倉右大臣

よみ人しらす

りしに大舍人ひきてきたるにある人内侍のすけ去るやうあり  
てそこに有けるをりなりければまへに有けるふちふと云瓜を  
きなるまきしにつゝみて大舍人と云おきなにこれたてまつれ  
とてとらせたりければくらづかさにつけてそこよりおくりけ  
ると云々

返事

賀茂社百首御歌合

六帖

夏歌中

六帖題

家集

とことにはゆけはなりけり瓜作そこともなきにたてりしやきみ  
拾玉四 奈良よりと聞ゆる瓜を大和路やいかてもちふにすこしゆるさん  
新六ノ二 百敷やくらのつかさのふりうりに我おとらしといとふうなるこ  
いまたにもひく人あれや山まろのこまのうりふに去ける下くさ  
新六ノ六 結ひおく青葛籠このかほうりはさそなめならふたくひのみして  
小大井集 兼盛集 山しろのこまのわたりもみつるかな瓜つくくりける人のかきねを

小 大 君

慈 鎮 和 尙

衣 笠 内 大 臣

正 三 位 知 家 卿

同

兼 盛

夕顔

六百番歌合ゆがほ

同

同

かたやまの垣根の日かけほのみえて露にそうつる花のゆふかは  
おのつからなさけそみゆるあらてくむまつか外面の夕かほの花  
山かつの契りのほとやしのふらんよるをのみまつゆふかはの花

後 京 極 攝 政

法 橋 顯 昭

寂 蓮 法 師

同

同

同

すたれ

建保三年名所百首

千五百番歌合

建保四年百首

嘉祥元年百首夕顔

毎日一首中

陸奥百首

家集夕がほ

百首歌

はらす

まつのめか片岡まめてすむ宿をもてなすものはゆふかはのなは  
煙たつしつかいほりのうすさりのまかきにさける夕かほのなは  
日かすふる雪にまほるゝこゝちして夕かほさけるしつか竹かき  
たそかれにまかひてさける花の名を遠かた人やとはゝこたへん  
夕かほのうつるすたれのひまもなく心にかゝるたそかれのやと  
わたりするをちかた人の袖かみやみつ野にまろきゆふかはの花  
やまの陰おほめくさとに日くらしの聲たのまるゝゆふかはの花  
木の間も垣根にうすき三日月のかけあらはるゝゆふかはの花  
夕かほのはなの垣ほのしら露にひかりそへてもゆくほたるかな  
小倉山くるゝをいそくゆふかはの花のたよりをたれかとはまし  
うらやまし垣ほにまほむ夕顔もくるゝ日かけをまつことにして  
山かつのすとかたか垣えたもせにゆふかはなれりすかひゝに  
あさてほす賤かはつきをたよりにてまとはれてさく夕かほの花

慈 鎮 和 尙

從 二 位 家 隆 卿

正 三 位 經 家 卿

陸 信 朝 臣

卜 部 兼 直

前 中 納 言 定 家

同

同

同

同

同

同

同

蓮

はらす

六六 伊勢集 濁江はかたふかくこそあせにけれみを逃さへみればおひにけり

よみ人しらす

建久元年六月一字百首

崇徳院百首歌めしける時

文治六年五社百首

同

百首歌

同

同日一首中

同

同

同

同

蓮開水上紅

三百六十首中

西洞隠士百首御歌

題不知

荷の花を

家集

蓮さくあたりの風もかをりあひてこゝろの水をすますいけかな

小舟さし手をらてそ手にうつしみんはすの立枝の露のしらたま

夏の日もこゝろのみつをすませとや池のはちすに露のすしき

なほいとへはすの立葉の露たにもこの世のいけは風ちらしけり

よそふなる月の御かほをやとす池にところをえてもさく蓮かな

すみのえにそむる心はにこるともはちすの色はさやけかるへし

大寺のいけのはちすのはなさかりはこふこゝろに手向とそなる

なみに入海よりにしの夕日こそはちすのはなのすかたなりけれ

くれなるの初花そめを見つるかな水をうかてるいけのはちすに

池水にはしめていつるはちす葉をけにくれなると思ひそめけり

夏の内に千本のはちす花さけといのるけふこそこたへそむらめ

秋ちかくはちすひらくる水の上はくれなるふかく色そみえける

夏の日の水の面かくすはちすはにたよふ露の身をいかにせん

夏ふかき入江のはちすさきにけり浪にうたひてすくるふなひと

夕されは池のはちすのなひきはに露ふきわたすかせそすしき

たまみつを蓮のわかには巻こめてこほすや花のひかりなるらん

夕立のはるればつゆそやとりける玉ゆりするはすのうきはに

定家卿

皇太后宮大夫俊成卿

同

同

四行上人

慈鎮和尚

同

民部卿爲家

同

同

千

よし

後京極攝政

修理大夫顯季卿

俊頼朝臣

四行上人

喜多院入道二品親王家五

家集池院方附

建久元年六月一字百首

六帖題

堀川院御時百首

同

同

同

同

同

正治二年百首

殖物百首中

千五百番歌合

六帖題

同

夕されはなみこすいけのはちす葉に玉ゆりすゆる風のすしき

風わたるいけのはちすの夕つく夜ひとにそあたるかけも匂ひも

いつかみん八のくとの池にさく四色のはちすきよきひかりを

つゆやとすちきりもあるを花荷なほたまこすやうきはなるらん

をとめ子かすかたの池の荷葉はこゝろよけにもはなさきにけり

はやくとも小舟こきよせかのみゆるままわの荷たをらまくをし

三條入道左大臣

前中納言定家卿

安嘉門院四條

信實朝臣

大納言師頼卿

權中納言

菱

萬十六 船はたをたよくのきくの池なる菱のうれをつむとや妹か御袖ぬれけん

君かためうきねの池に菱とるとわかそめしそてぬれにけるかな

すしやとうきねの池に袖ぬれでひしとりすさひくらす頭かな

船はたをたよくもさひし背の間にひしとる船や江にかへるらん

みさひ江の菱のうき葉にかくろへてかはつなくなり夕立のそら

みさひまする菱の浮つるとにかくにみたれて夏の池さひにけり

いかにして池のひしいるうきとははしめも果も思ひわくへき

よみ人しらす

讚人不知

後成卿

參議爲相卿

後京極攝政

信實朝臣

民部卿爲家

夏田

建仁二年和歌所にて田家夏月  
建長四年毎日一首中  
四季百首夏田  
建長八年百首歌合  
六帖題  
同

門田ふくほむけの風のよるくは月そいなはのあきをかりける  
みちのくのわさ田の鳴子けふみれば秋をかけてそ風も身にしむ  
やまさとの門田の稻葉みわたせはひとほいてたるなつのあさ露  
ゆふ日さす門田の稻葉あめすきておきしく露をあきかそみる  
新六ノ六  
今ははや秋ちからし小山田のわさほのかつらすすゑなひくまで  
えつのをかまける稻葉の五月雨に晴間をみてや田くさひくらん

前中納言定家卿  
民部卿 爲家  
從二位家隆卿  
藤原伊嗣朝臣  
衣笠内大臣  
正三位知家卿

夕立

六百番歌合  
同  
正治二年百首御歌  
最勝四天王院名所御障子  
千五百番歌合

ゆふ立のくものみをよりつたひきて軒端におつる瀧のしらたま  
風わたる軒のしたくさくちまをれすしくにはふ夕たちのそら  
いつのまに峯うつりして過ぬらんひとむら雨のゆふたちのくも  
富士の山おなし雪けの雲路よりすそ野をわけてゆふたちをそする  
更るまてはれすとみえしゆふたちの名残ともなきありあけの空

大藏 卿有家  
前中納言定家卿  
後鳥羽院御製  
同  
小侍 從

建仁元年老若五十首歌合  
永久二年四季百首  
建保五年百首  
毎日一首中  
六帖題  
建仁二年内裏歌合  
嘉元元年百首夕立  
家集夕立  
夏歌中  
六帖題  
同  
百首歌  
寶治二年百首夕立  
建長八年百首歌合  
同  
家集

山めぐりそれかと思ふした紅葉うち散くれのゆふたちのそら  
水もなきこさかをおつる夕立のたきつ瀬うくるもとのたにかは  
夕立のさくのまをれ葉はらふとて花まちとほにひとやあさける  
ほととぎすこゑみな月とおもへはや夕立くもにたちかへりなく  
新六ノ一  
かきくもる空のむらくも風まきておとにちかつくゆふたちの雨  
夕立の名こりにはのひとしめりすしくなれるあさ茅生の色  
はるかなるなかめもすしくなにはかた伊駒のみねのゆふ立の空  
新古夏  
おのつからすしくもあるか夏衣日もゆふたちの雨の名こりに  
新六ノ一  
かきくもりふりぬとみゆる夕立のけしきはかりに過にけるかな  
同  
夕立にみねのときは木音あれてことしくもすくるかせかな  
かきくらす山下かけとみるほとにふらても過るゆふたちのそら  
みればまたさも名残なく晴にけりこほしかけつるゆふたちの空  
雨の足とまりもあへすこの里にはしりすきぬるゆふたちのくも  
夕立の雲間のそらをみわたせは日かけにまじるあめのしらたま  
桑門  
なる神のおとはのたきやまさるらん關のこなたのゆふたちの空

前中納言定家卿  
同  
同  
民部卿 爲家  
同  
参議 爲経卿  
同  
清輔朝臣  
法印 定圓  
衣笠内大臣  
光俊朝臣  
信實朝臣  
同  
同  
光俊朝臣  
中務のみな



蟬

建保三年名所百首  
 同  
 家集蟬を  
 屋のつまにつくくぼう  
 しのなくなきいて  
 百首歌雨後蟬  
 永仁二年内裏當座歌合  
 御集雨後開蟬  
 蕭風雨雨天蟬聲暮歌々  
 家集  
 蟬去野風秋  
 寛平御時后宮歌合  
 康平四年三月内親王家歌  
 合に青山  
 長治元年六月匡房卿家歌  
 合  
 永久四年百首蟬

なみかせに秋をまつらの山の蟬そめぬ木すゑのつゆになくなり  
 わひはつる身をうつ蟬のおのれのみあはての森にねをや鳴らん  
 女郎花なまめきたてるすかたをやうつくしよしと蟬のなくらん  
 我宿のつまはねよくや思ふらんうつくしといふむしのなくなる  
 ゆふたちの空ふきはらふ山風にまはしすしきせみのこゑかな  
 木かくれてまはし涼しき風をたに秋にはなさぬせみのこゑかな  
 村雨の跡こそみえねやまのせみなけともいまたもみちせぬころ  
 くれはとりあやにくにふる夕立にぬれくはるせみの聲かな  
 山さとの脊面の岡のたかき木にすくろかましまきあきせみのこゑ  
 鳴蟬のこゑたかくのみきこゆるは野にふくかせの秋そまらるゝ  
 ことの音にひきかよへる松風にまらへなくなるせみの聲かな  
 いつとなくいろもかはらぬ青山はせみのこゑにそ夏をまららん  
 常磐山木末にすたくうつせみのこゑのうちにやなつは果つらん  
 袖かくるならの下枝になく蟬のこゑはたかくもきこゆるかな

俊成 痴女  
 藤原 康光  
 俊頼 朝臣  
 同  
 從二位家隆 卿  
 參議 爲相 卿  
 後京極 攝政  
 慈鎮 和尙  
 四行 上人  
 千  
 よみびとしらす  
 二條太皇太后宮 樂作  
 よみ人しらす  
 藤原 忠房

長元六年七月歌合蟬無動  
 寺  
 長治元年五月源廣綱朝臣  
 林門内蟬聲  
 長久二年五月庚申夜祐子内親王家名所歌合ゆるぎの森のせみ  
 同歌合いはせのしりのせ  
 風不<sub>レ</sub>知  
 永久四年百首蟬  
 久安百首  
 寛治五年有從二位藤原親  
 王家歌合蟬  
 家集蟬聲未<sub>レ</sub>遍  
 せみな  
 同  
 女集百首歌に寄風雨天蟬  
 聲  
 久安百首  
 御集蟬  
 建長八年百首歌合  
 同

やまかせに梢ひきてなくせみのこゑにや秋のいろをそむらん  
 夕かけのくもの林になくせみのこゑもともにそたかくきこゆる  
 なくせみそ聲ふりたつる夏の日にゆるさのもりはむら雨そする  
 思ふこといはせのもりにも鳴せみのこゑめつらしく人のきくらん  
 かつみつゝいはせの森にすむせみも時もまらすや鳴わたるらん  
 あつま路や今朝立くれはせみのこゑたかしの山にいまそ鳴なる  
 はるくとたかしの山に鳴せみのこゑは雲井のものにそ有ける  
 空せみのこゑのはるかに聞ゆるはたかをの山になけはなりけり  
 なつやまの椎の葉毎にとり付てみゝの間もなくゆるするせみかな  
 夏山歌苑抄のそらひくまでなくせみはこのはもゆるく心ちこそすれ  
 山ひこもこたへそあへぬ夕つく日さすや岡邊のせみのもろこゑ  
 小くらやまみねの梢になくせみもこゑまをぬるゆふたちの空  
 蟬のはしはかりこそは薄けれとこゑに暑さをもたるなりけり  
 ころも手のもりの梢やかからんはるかにせみのこゑを聞ゆる  
 ゆふされはまつかせすしかた岡の森のこゑに蟬はなげとも  
 くれかゝる空とよむまで夏山の木たちをまけみせみさわくなり

真意 法師  
 俊賢 法師  
 よみびとしらす  
 同  
 同  
 仲實 朝臣  
 左京大夫顯輔 卿  
 橋成 元  
 源仲 正  
 俊惠 法師  
 同  
 八條院 高倉  
 待賢門院 安藝  
 法性寺入道 關白  
 正三位 忠定 卿  
 前大納言 顯朝 卿

同  
六百番歌合蟬

空蟬のいかになくさむよるなれば暮ぬ間はかりねをもなくらん  
たかためと脱てかすらん空蟬の鳴く木のもとのおのか羽ころも  
ひまもなくまの田のもりに聞ゆなりちえにやきなく蟬のもろ聲

左近中将具氏卿  
後九條内大臣  
正三位季經卿

同  
土御門内大臣家十首歌合  
蟬聲夏深

雲井までひきやすらん夏山のみねよりたかきせみのもろこゑ  
あきかせもかよふはかりの梢より松をはらふやせみのもろこゑ  
松たてるみの、御山の木かけとともなきせみもひとりなく也

大藏卿有宗  
寂蓮法師  
後九條内大臣

同  
弘安元年百首  
百首歌馬上聞蟬

木つたひてこするのせみも鳴くらし青葉かさなるはらのをか山  
真柴わけはやむる駒におとろきて木たかくうつる蟬のもろこゑ

同  
寂蓮法師  
よみびとまらす

同  
寛治五年十一月從二位藤  
原親王家歌合蟬

石はしる瀧のよとみにうちそへて木ことに蟬のこゑをきこゆる  
やまかはのいは本とよむせみのこゑ梢もやかてひきあひけり

同  
源師光  
寂蓮法師

同  
千五百番歌合

せきとむる山下みつはすゑたえて風になかる、せみのむらこゑ  
雨そ、くみねの梢をなかわればむらくもかゝるせみのこゑ、

同  
寂蓮法師  
第三のひこ

同  
嘉元四年十一月當座百首  
海道宿次百首守山

宿になくこするのせみのむら聲は夕日のかげもところせきまで  
なくせみの涙えられても山のまげみにおつる木々のゆふつゆ

同  
從三位爲實卿  
參議爲相卿

同  
久永十一年毎日一首中  
千首歌

くものゐる遠山くらさあまたきあけ過てなくせみのこゑかな  
なつやまのこするもあゝ鳴せみの涙やまたにあきをそむらん

同  
民部卿爲家

文應元年毎日一首中

鳴つ、くせみのもろ聲ひまもなしならひのをかの夏のひくらし

同

同  
百首歌  
建保二年六月文字廿首

住の江の松のうれふく浪かせにこのころせみのこゑそうちそふ  
山さとはせみのもろこゑ秋かけてそと面の桐のまた葉おつなり

同  
前中納言定家卿

茅蜩

同  
だいしらす

夕されはひくらしきなく伊駒山こえてそあかくいもかめをほり

同  
よみ人まらす

同  
百首御歌

こひまけみなくさめかねて茅蜩のなく島かけにいほりするかも

同  
土御門院御製

同  
十題百首

まはつ山風吹すさふならのはにたえ、のこるひくらしのこゑ

同  
嘉多院入道二品のみこ

同  
建長八年毎日一首中  
文永四年毎日一首中  
建保三年名所百首

いと、しく物そかなしきをくら山夕日かくれの日くらしのこゑ  
小倉山やまかけいそくひくらしのなくやなみたとすくるむら雨

同  
民部卿爲家

同  
千五百番歌合

大江山われよりさきにゆくひとの宿やとふらんひくらしのこゑ  
ひくらしのなく音に風をふきそへて入日す、しき岡のへのまつ

同  
從三位  
藤原康光  
後京極攝政

同  
賀茂社百首御歌  
六帖題

ひささおふるおきの小島の浪の上拾玉にうら風さそふひくらしの聲  
秋拾玉ちかきこするにせみのなきすきて松風はやみひくらしのこゑ  
夏新六ノ六ふかき木するゑのせみのよわり聲ほていたゝやまもとのひくらしを鳴

從三位保季卿  
慈 鏡 和 尙  
信 實 朝 臣

納涼

建仁元年歌合松下晚涼

木するより夕風おくる松か根はあきまたあきのやとりなりけり

慈 鏡 和 尙

六百番歌合蟬

茂りあふあをき紅葉の下すゝみあつさはせみのこゑにゆつりぬ

同

南北百番歌合

まつのをか更行暗のかとすゝみこのもしからぬまとゐなりけり

同

住吉社百首

あつさをは松の嵐にをさめ置てあきをうかふるすみのえのなみ

同

家集

ひさきおひすゝめとなれる陰なれや浪うつきしに風わたりつる

四 行 上 人

同

なみたてる川原柳のあをみとりすゝしくわたるきしのゆふかせ

同

家集

草の葉もうこかぬ夏のとる日にも思ふなにはかせやふくらん

重 之

三百六十首中

うへそよく竹のはなみのかたよるを見るにつけてそ夏は涼しき

よ し た

五十首歌

夏の日をみちゆきつかれいなむしろなひくやなきにすゝむ川風

前中納言定家

建久七年百廿八首和歌  
後京極攝政家詩歌合水邊  
涼自秋

なつの夜は月をけちかき風すゝむせやの軒のまやのあまりに  
拾遺草下  
夏ころも秋たにたゝぬ神なつきわせきのなみのいそしくくれに

同

同

雪とのみおつるゑら淡に夏きて秋をもこゆるたきのいはなみ

同

同

たつたやまなつの木するゑの木からは川瀬の浪の底よりそふく

慈 鏡 和 尙

同

袖ひちてむすふゑら浪たちかへりこほるはかりの松のゆふかせ

從三位家隆卿

同

來ぬ秋のいつ暮はてゝうすこほり結ふはかりのやまの井のみつ

大藏卿有家

同

雪の上になひきてのほるふしのねのけふりすゝしき夏の空かな

慈 鏡 和 尙

同

夏山のあらしをぬきにおりなしてすゝしくおつる布ひきのたき

同

同

神かきのみたらし川のゆふすゝみ袖ふきかへすならのまたかせ

前中納言匡房卿

同

いつみかはすゝむこの夜は明ぬらし遠かたなみの岩こゆるみゆ

よみ人しらす

同

わかゆつるたましま川のやなきかけ夕風たちぬまはしかへらし

後 嘉 法 師

同

日をさふる松よりにしの朝すゝみこゝには暮そまたれさりける

後京極攝政

同

陰ふかき脊面のならのゆふすゝみひと木かもとにあき風そふく

同

同

野なかり松の木かけにせき入てぬるき清水のそこにすゝしき

同

同

はつせのやゆつきか下にかくろへてひとにまられぬ秋風そふく

同

同

すゝしさをたつねもとむる心たにもされはと山にすむ人もなし

同

同

松かねにけささらしゑを手にかけて思はぬほかのあきをまゑる哉

同

同

夏山のたにの小かはのみなかにたつねきたれば秋もすみけり

同

同

下くゝる水こそあらめいつみかは河邊のまつにかよふあきかせ

同

同

水邊納涼

權中納言定家卿

同

同心を

權中納言定家卿

同

水邊納涼

權中納言定家卿

同

水邊納涼

權中納言定家卿

仁永二年内裏五首水邊夏  
 野亭夏朝  
 嘉元元年廿首  
 嘉元元年式部卿親王家  
 千首山家夏  
 貞應三年百首夏川  
 あつさをさくるといへる  
 ことなよめる  
 夏歌中きのかげにかぞき  
 たるといふ事な  
 夏歌潤路甚清湛  
 だいしらす  
 安元二年閏九月歌合泉邊  
 永仁元年楚忽百首  
 嘉元四年十一月宮座百首  
 家集夏歌中  
 文治六年女御入内屏風  
 建保四年内裏十首歌合  
 喜多院入道二品親王家五  
 十首  
 正治二年百首

も、しきや砌にちかきみかは水なかる、こゑのふけてす、しき  
 朝風にさゆるくさ葉のすゑ遠みそことわかれぬ野邊のす、しき  
 目をさふるゆふ山松の木の下にしみつなかれてなつそすくなき  
 す、しきはいつくもとはし山さとの松よりおつる風のしたみつ  
 はつせ川まらゆふ浪のす、みしてかけたちならすふたもとの杉  
 水はよしあたりもまみよ吹すくる風さへさゆるやまの井のさと  
 ひさかりはあそひてゆかんかけもなしまの、萩原風たちにつり  
 山ふかみ谷をわけつ、ゆく人はふきいつる風をあらしなりける  
 旅人の葉山のすそにやすらへはあをみなつきもす、しかりけり  
 月やとる岩井のみつをむすふ手にす、しさまねく玉そこほれる  
 石の上に落たる瀧のかすく、にす、しさまねくたまとみえつ、  
 涼しさはならの下葉の夕まくれまのまくみねにおとりやはする  
 風かよふ野守のやとのさ、むしろ木陰ならねとゆふす、みせり  
 す、みにとわけいる道は夏ふかくすそのにつ、く森のしたくさ  
 夕す、みまさ木のかつらふく風に外やまをかけて秋やきぬらん  
 芝居するやま松かけのゆふす、み秋おもほゆる日くらしのこゑ  
 風わたるまつの木かけの夕す、みまたきおとなふ秋のひとこゑ

前中納言爲兼卿  
 同  
 同  
 参議爲相卿  
 民部卿爲家  
 俊頼朝臣  
 千  
 よみ人まらす  
 源仲綱  
 藤原爲顯  
 従三位爲實卿  
 信實朝臣  
 後京極攝政イ  
 僧正行意  
 野宮左大臣  
 第三親王

泉

同  
 千五百番歌合  
 悠紀方屏風歌玉陰井  
 五社百首泉  
 同  
 永久四年百首遊樂  
 堀川院御時百首  
 同  
 同  
 久安百首  
 喜多院入道二品親王家五  
 十首夏歌  
 百首歌泉  
 建長八年百首歌合

かせわたる夕草かけにす、みきてた、ひと時のあきそうれしき  
 松風のなつたけくまにす、しきはこすゑに秋やちかのしほかま  
 結ふ手のす、しきのみか岩そ、くたるみのおとも夏はまられす

岩間もるたまかけの井の涼しきはちとせの秋をまつかせそふく  
 ふりにけるおほろの清水結ひあけてむかしのひとの心をそくむ  
 眞清水のいはもる聲をよるきけはまくらの下のこ、ちこそすれ  
 大原やおほろのみつに雪ふれはなつはをちなるものにそ有ける  
 八重むくらまけみか下に結ふてふおほろのまみつ夏もまられす  
 結ふてに扇のかせもわすられておほろのまみつす、しかりけり  
 さらし井の木のしたかけに雪ふれは衣手さむしせみはなけとも  
 ましみつ扇も夏もわすられてや、はやきむしせみはなけとも  
 夕されは秋のすかたをうつしもて月をそむすふまつかせのみつ  
 月はさしいはもるみつは秋のこゑ夏のよそなるにはのうた、ね  
 草のはにい、はもるみつをくみかけて露おく秋のけしきをそみる

前大納言隆房卿  
 前大納言忠良卿  
 法橋顯昭  
 同  
 同  
 同  
 仲實朝臣  
 前中納言匡房卿  
 修理大夫顯季卿  
 俊頼朝臣  
 花園左大臣小大進  
 前中納言隆房イ  
 従二位家隆卿  
 信實朝臣

百首歌  
泉爲夏樹  
樹陰如秋

山かけのきよき松が根まくらにて岩もるしみつかたむすひせん  
ふるさとは岩もるみつに住かへてよもきや庭のあるしなるらん  
手に結ふしみつかうへの玉かしはそのかけいつか秋にことなる

寂蓮法師  
同  
源仲正

氷室

百首御歌

新羅古夏  
かきりあれはふしのみ雪のきゆる日もさゆる氷室の山の下まは

順徳院御製

同

ひむろとのいなはか末のゆふかせに夏と秋とをふきみたりぬる

慈鎮和尚

同  
嘉元々年仙洞卅首御歌

涼しさはほかにもとはずやままろの宇多のひむろのまきの下風

入道前太政大臣

同  
文治六年五社百首氷室

春日山ふるきひむろのあと見るも岩のけしきはなほそすしき

皇太后宮大夫俊成卿

同

岩かけや松かさきとのひむろ山いつれひさしきためしなるらん

同

同

冬とちし岩戸あけても氷むろもり夏はとほさぬせき路なりけり

同

同  
祇園百首

はるもすき夏たけぬれと氷室やまふゆを納めておけるなりけり

同

同  
正治二年百首

神のみなまもるめくみのをるしをはきえぬ氷むろの氷にそしる

同

同  
正治二年百首

神代より君をもかみとまもりおけは氷もなつものところなれ

同

同  
家集氷室を

かしこきはなにはのことも多かれとたかつの宮の氷室なりけり

源師光

同  
家集氷室を

すへらきのみことの末し消せねは今日も氷室のおものたつなり

俊頼朝臣

同  
細河院御時百首

夏の日もすしかりけり松かさきこれや氷室のわたりなるらん

修理大夫顯季卿

同

きみかへむ御代なか坂の氷室にはうつむこほりの解ぬなりけり

中納言國信卿

同

名にしおは、氷室の内にかにしてこそ氷のとけぬなるらん

權僧正水縁

同

つけの野に大山守かをさめつる氷むろそいまもたえせさりける

仲實朝臣

同  
文應元年七社百首氷室

みかりせし御幸にあへる氷室山とけぬためしをたればしめけん

民部卿爲家

同  
六帖願御歌

いにしへのつけの、み狩それよりや氷室のおものたて初めけん

中務親王

同  
貞應三年百首氷室

せきいれしあたりの水はぬるけれと冬のまゝなる氷室やまかな

民部卿爲家

同  
嘉元三年芝忽百首つるが

この里は氷室むすはぬ山なればふしのみゆきをためしにそとる

從三位爲美卿

同  
正治二年百首氷室

春秋のとめる御代にはむかしより氷室にふゆもとまるなりけり

正三位季經卿

同  
西洞隆土百首御歌

ほか夏あたりのみつは秋にしてうちは冬なる氷むろやまかな

後京極攝政

同  
百首歌氷室

大和路やみやこも遠きひむろ山またよひなからいはとあくなり

從二位家隆卿

同

すへらきの氷のおものうれしくぞ告去らすてふかすにいれける

從三位爲綱卿

此歌は爲綱卿三位に任じて悦申の日少將内侍のもとより氷を  
つかはしたりける返事によめると云々

同  
弘安二年若宮百首

すへらきの代々の氷のおものにてうるほすかひそ嬉しかりける

少將内侍

同  
同年檜桐宮百首

あはれなと氷室の氷つれなくてきえぬものからわれくたくらん

安嘉門院四條

同

都には日つきの氷室あしたゆくきみかためとてさそはこふらし

同

氷室  
六帖題

水無月のてるひもとかすさゝ浪やおほ山ふかくつめるこほりは  
新六十一  
さしもいま日影にうとき氷室山いはかきもみちりやおほひし

從二位行家卿  
信實朝臣

夏鹿

百首御歌晚夏

夏はつるやのゝかみ山たちまのひまたつまかくす鹿やなくらん

後九條内大臣

建長八年百首歌合

ほしみゆる夏けの鹿のかくろへて富士のすそ野にしけるたか草

同

弘安元年百首御歌

おきふしにまたこゑたてぬさは鹿のこゝろやゆきて秋のうは風

同

承安三年經正朝臣歌合夏  
草列者俊成卿

をしかふすとふ火の野邊のまの薄ほにいてん秋も近つきにけり

藤原爲眞

百首御歌

ゆふたちの夏野の草の露しけみこゑまつしかやぬれてゆくらん

藤原和尙

千五百番歌合

萩原やこゑもほに出ぬさをまかのふかく夏野にそよくなるかな

後京極攝政

爲家卿家百首

さをしかの秋に先たつ霧の中におのれなかくてやなつをまらん

家長朝臣

建保三年内大臣家百首

夏のゆくまかもかくすか大あらさやか人ななきもりのした草

大藏卿有家

夏蟲

千五百番歌合

ほととぎすこゑはたえにし垣根より忍ひねに鳴きりくすかな

從二位家隆卿

百首御歌

かへにおふるいつまで草のきりくす秋待かほの露やまのはん

順德院御製

同

山かつの垣ほのおとろ夏ふけてそれともまらぬむしのこゑく

後鳥羽院御製

五十首御歌中

秋ちかき賤士か垣根の草むらになにもまらぬむしのこゑく

同

家集夏蟲を

浅茅生に秋待ほとやしのふらんきもわかぬむしのこゑく

寂蓮法師

千首歌

夏ふかきあさちか庭のきりくす草のしたねになきはしむなり

民部卿爲家

同

いろみえぬ夏野のくさにかくろへて秋待かぬるむしのこゑかな

同

晚夏

三百六十首中

萩のはに風のそよめくなつしもそ秋ならねともあはれなりける

よした

家集六月十日秋のせちに

こよひより萩のはかせの音すなり秋のさかひにいりやたつらん

もとさ

家集

すゝみけるところをくみて岩清水夏越のころはすくさゝらん

よみ人しらす

夏のぼて

西へたに夏のゆきせはまたひつゝやかてこひしき秋はみてまし

よみ人しらす

同

こよひしも稻はに露のおきしくは秋のとなりになれはなりけり

寂念法師

百首歌夏

秋さぬといはぬはかりそつききよみしたもみちするまのゝ萩原

寂念法師

百首歌

夏深きはらみにけりなまのすゝき下はひまとふくすのおひして

股宮門院大輔

大神宮百首御歌

夏ふかみ庭も葉ひろの玉かしはまくれをならす夜はのむらさめ

後鳥羽院御製

建保三年名所百首御歌

夏山やまつらかおきのにしのうみそなたの風にあきはみえつゝ

順徳院御製

百首御歌

けふ暮ぬ秋は一夜とふくかせにまかのねならす小野のまのはら

後京極攝政

西洞隱士百首夏御歌

けふまては色にいてしのまのすゝまする葉に秋の露はおけとも

同

文治三年百首

夏ふかき野へをまかきにこめおきて霧間の露のいろをみるかな

前中納言定家卿

建仁三年歌合夏野秋近

露わけん秋のあさはけは遠からてみやこやいくかまのゝかやはら

同

文應元年毎日一首中

夏と秋と行あひの稻葉いつの間にそよとも風のおとろかすらん

民部卿為家

嘉祿二年百首

秋ちかくみたるゝ露のなつくさにまつほにいつる庭のかるかや

同

弘安三年百首

夏と秋のゆくもかへるもさ夜ふけて今やこゆらんあふさかの關

同

荒和歌

延喜十四年女四宮屏風

すみの江のあさみつ菰にみそきしてこひ忘くさつみてかへらん

實之

同十八年東宮御屏風六月

このかはにはらへて流す言の葉は浪のはなにそたくふへらなる

同

天慶二年二月賀之家歌合

むかしよりおもふこゝろはみな月のみそきの神を空にしるらん

よみ人しらす

六月  
屏風に川邊はらへする所あひききふ

みそきする川の淵瀬にひくあみをおほぬさなりと人やみるらん

能宣朝臣

康保三年屏風六月はらへする所  
細川院御時百首荒和歌

夏草にはらへかくればひとかたのあまつゝみとは露やおくらん  
八百萬神もなこしになひくらんけふすかぬきのみそきまつれば  
ちとせまで人なからめやみな月の三たひすかぬき祈るみそきに

順徳院御製

同

水な月の清きかはらにいくしたてはらふることを神はうくらん

隆源法師

同

古へのさはへなしける神たにもけふのみそきになひくとそきく

基仲朝臣

みそきを

ちはやふるたな上河のきよきせに千とせをいのる夏はらへしつ

宮内卿永範

千五百番歌合

みそきして秋のめくもみひろせ川幾千世までかすまんとすらん

隆信朝臣

布引百首御歌

布引の瀧もやけふのみそきしてみつのまらゆふいはにかくらん

法親王澄覺

文治六年五社百首夏歌

御祝するあさの立枝の青にきてさはへのかみもなひけとそ思ふ

皇太后宮大夫俊成卿

荒和歌祇園百首

六月やみそきもすゝし川やしろそてにたまちるゆふなみのまた

同

文治六年女御入内御屏風

君かためけふの御祝にいつみ河よつ代すめといのりつるかな

同

家集夏歌中

川やしう秋はあすそとおもへはやなみのまめゆふ風のすゝしさ

前中納言匡房卿

百首御歌

ゆくほたる秋風ふくとつけすともみそきすゝしき川やしうかな

土御門院御製

百首歌夏歌

みそきかはゆきかふ空や更ぬらん露なからをるあさのひとふさ

後鳥羽院御製

喜多院入道二品親王家五十首

思ふことなる川上にうちはへてなこしのかくらこゑすみぬなり

正二位忠定卿

正治二年百首

みそきするるしはなくて人心うきものとのみみこもりのかみ

法橋顯昭

三條入道左大臣

三條入道左大臣

文治六年女御入内御屏風

御祓するなきさにまつるあさのはにまた夕浪をかけてけるかな

同

建長八年百首歌合

けふは、やゆふとりして、夏麻のおふの川瀬にみそきしてけり

法印 實伊

柿本影供百首

けふはまたあさの露ちる玉くせのきよき河原にいさみそきせん

後九條内大臣

題不知

たまくせのきよき河原にみそきして祈るいのちも妹かためなり

よみ人まらす

題不知

君によりことのまげきを古郷のあすかのかはにみそきしにゆく

八代女 王

六帖題なしのほらへ

立田川きしのせはきにはらへつゝいはふころは君かためとそ

よみびとしらす

百首歌

蘆原やはたるか、やく神までもとひちるはかりはらへすつなり

権僧正 公朝

堀川院御時百首

松かけのとなせの水にみそきして千年のいのちのへてかへらん

前中納言 匡房卿

家集六月河原に祓したるに魚を取るをみて

川のせに釣する人のつみをさへ祓ひすてつるけふにもあるかな

和泉式部

四季百首歌

もろ人のちとせ延ふてふみそき河原すあさちのすゑもはるかに

前中納言 定家卿

寛喜元年女御入内御屏風

みそき河あさのゆふかせ吹なひきゆくせのなみに秋やたつらん

四國寺入道 太政大臣

同

神風やきよきはへにみそきしてちとせの秋のはしめをそまつ

常盤井入道 太政大臣

御集三首御歌 荒和歌

うきをはらふ大海の原にみそきして浪もあらふる神やみつらん

後鳥羽院御別製

文應元年七月百首

難波瀉けふ水無月の御祓をは八十しまかけてかみそうけゝる

民部卿 爲家

同

いそかはやいすゝの河の夏はらへた、おしなへて神やうくらん

同

文治六年五社百首

けふもたれいすゝの河にみそきして荒ふる神もなこしなからん

皇太后宮大夫 俊成卿

寶治二年百首

麻のはもみなかみかけていつみ川こま山ひとやみそきまつらん

後九條内大臣

同

みなつきの御祓川原のかへるさになこしのやまのくもそあけ行

從二位 賴氏卿

同

御祓することよひはなつのみなせ河あらふる神もすゝしかるらん

陸 祐 朝 臣

百首歌

御祓するけふのあさちのひたりなはあらふるかみも心とくらし

從二位 顯 氏 卿

久安百首

思ふことあさちのなはにときつけてきよき河せに夏はらへしつ

前中納言 隆季卿

同

玉のをやみしか、らまし御祓するあさのぬきをに祈りかけすは

同

文治六年女御入内御屏風

夏の日をかねて御祓にすつるかなあすこそ秋のはしめと思ふに

後京極 攝 政

同

萬代といはふみそきはますけよきそかの河原のゆふくれのそら

後徳大寺左大臣

物へ行人に衣をとらすと

御祓つゝわかるゝかたの川なみの立かへるてふことをこそ思へ

同

家集はらへしける女をみ

御祓せしなこしの夜より人まれすたのみわたると人にまらすや

元

天慶三年七月右衛門督家

みそきつゝ思ふ心はこのかはのそこのふかさにかよふへらなり

つ

屏風歌六月祓

六 家集 年中に我かなけきとなりぬれは世にみそくとも失しと思ふ

伊

家集みな月ばらへしける

くれすともはや夕かけてみそきせんけふは夏越と神もうくらん

民部卿 爲家

毎日一首中

みそき川なかつちのわのほともなく過る月日にめぐりあふかな

同

六帖題

いたつらにおふの麻のはとりまてゝことしもたけぬみな月の空

同

文治十一年毎日一首中

はしり井の河せに千たひみそきしてはやくそ祈る神はうけよと

同

同五年毎日一首中

つひによるあさせやいつら大井河けふはみそきとなかす大ぬさ

同





夫木和歌抄卷第十

秋部一

題 立秋 初秋 殘暑 七夕

立秋

建長三年九月十三夜十首  
 歌合初秋露  
 同 秋さぬと野なる草木もしりぬらんあまねくひろき露のめくみに  
 うちなひき秋きたりとや草むしる野もせの露のたまをしくらん  
 玉敷のつゆのうてなも時にあひて千代のはしめの秋はきにけり  
 いまやこれ秋おく露の新むすひときは來にけりたもとすししも  
 このねぬるあさけの風やはらふらん峯なる雲のそらにきえぬる  
 山さとは庭のくさむらうらかれて蟬のなくねもあきめきにけり  
 もつての浪路に秋やたちぬらんせとの鹽かせたもとすししも  
 新六一  
 白妙のころも手すしうちまやまあさかせふきて秋はきにけり  
 後九條内大臣  
 衣笠内大臣  
 民部卿為家  
 正三位知家卿  
 前大納言隆季卿  
 清輔朝臣  
 同  
 衣笠内大臣

貞應二年當座百首林蟬聲

三百六十首中

寒集

堀河院御時百首立秋

建保二年内裏十五番歌合

秋風

百首歌風音秋使

嘉祿三年百首早秋風

阿屋入道攝政家百首行路

立秋

題不知  
千五百番歌合

今朝の風この夕暮のくさのつゆかはれるいろにあきはきにけり  
 ときはなるはやしの蟬もさすかまた秋とやまらん聲かすかなり  
 ほたちする秋はきにけりおりそほち早苗つかねし袖もひなくに  
 みそきすとあさきり捨しほともなく今朝は夜さむに風立にけり  
 まちかねてかたしく袖のさむきかな我聞よりやあきはたつらん  
 夜やさむきころも手うすきかたしきのまたひとへなる秋の初風  
 秋さぬと風にのみやはおとろかんひろはぬ袖にたまもはかなし  
 ふきすくる風の香たにかはらすはけふもなつ野の萩のうは葉を  
 いつしかに朝けの風の身にしみてさやかにかはる秋はきにけり  
 たちそむるみちの秋かせこゝろせよかたみの衣またひとへなり  
 歌苑抄  
 葛の葉のうら吹かへす風の音もけふはすしなせみのはころも  
 風のおとに秋はけふより立田山夜はにやなつのひとりとこゆらん  
 風の音におとろくのみか萩のはのさやかにひく秋はきにけり  
 秋風の立田かはらのやなきかけはるのみとりもいろつきにけり  
 秋來ぬとひと夜をわくるかねの音に哀うちそふあかつきのそら  
 鹽路より秋やたつらんあけかたはこるかはるなり須磨のなみ風  
 秋風はひと夜はかりをむしのねのはたおるまでやゆふ暮のそら  
 前中納言為兼卿  
 民部卿為家  
 和泉式部  
 中納言國信卿  
 順徳院  
 僧正行意  
 寂蓮法師  
 民部卿為家  
 同  
 藤原道宗朝臣  
 後鳥羽院御製  
 慈鎮和尚  
 土御門内大臣  
 野宮左大臣  
 皇太后宮大夫俊成卿  
 寂蓮法師



題不知

建久元年一字百首

正治二年百首

千五百番歌合

初秋歌中

題不知

初秋歌

家集秋歌中

家集秋のはじめつかた煙のたつなみて

天慶二年貫之家歌合初秋

延喜五年十二月平定文家歌合初秋

左大臣家賀屏風七月女共舟にのりて池にあそぶとて

高代 身にしめとふきにけらしなたまもかるあさかのうらの秋の初風  
 秋風 おほしまのまつよくこゑにきこゆなりみちあるとき秋の初風  
 へたつらんいくへの雲のほかにして秋風ふくとかりのきくらん  
 なかむれば木葉うつろふ夕月夜やけしきたつあきのそらかな  
 よそにきくみねの嵐も萩のはにさとなれをむるゆふくれのそら  
 山ふかきまつに吹けりみやこにはまた入たぬあきのはつかせ  
 秋たちてはつゆふくれにふく風のやかてさひしき萩のおとかな  
 秋立ていくかもあらねとこのねぬるあさけの風はたもと涼しも  
 六 東路のいさねのさとは初あきのなかきよひとりあかすわれらそ  
 ゆるかりし風の音こそはけしけれいまはた秋になりぬと思へは  
 夏はて、秋まてくゆるかやり火はむかしいかなることか有けん  
 松もなくまげき木の葉は夏なからもみちのいろそ染はしめける  
 うすくこくそめはしめたる紅葉はにた我こひを思ひそめけん  
 六 時雨にも雨にもあらぬはつきりのふるにも空はさえくもりけり  
 はつ霧もたちそめにけり誰にかは人わたらんかさゝきのはし  
 六 木からしの秋のはつかせふきぬるになとか雲井に雁のこゑせぬ

伊成卿  
 前中納言經光卿  
 前中納言定家卿  
 式子内親王  
 寂蓮法師  
 俊成卿女  
 從二位家隆卿  
 安貴王  
 みつね  
 惠慶法師  
 爲頼朝臣  
 よみびとしらす  
 たみね  
 元輪  
 よみびとしらす

三百六十首歌の秋のはじめの長歌

爲家集家百首

百首御歌

建久七年百廿八首秋の初

御集秋のはじめの御歌

十五番歌合

文永十五年毎日一首中

三體和歌

千五百番歌合

家集初秋

寶治十首歌合初秋風

此歌は規子内親王家歌合にまさみち申木がらしとは冬の風を  
 こそいはめと申侍ければかゝる事はふるまことをためしにひ  
 かめと申ければひきける歌と云々  
 すゝみせし、夏の暮にし、夕より、野への草はを、かきわけて、  
 よもにふきくる、こからしの、やゝはたさむく、なるまてに、  
 と云々

老くれをば四方の山邊にいとふへきこや木がらしのあきの初風  
 さをしかの夏野の草をわけ捨てみやまのあきにうつるはつこゑ  
 八重むくら秋のわけける風の色をわれさきにとそ鹿はなくなる  
 いろかはる露のみ袖にちりやせんみねのあき風このはあをくは  
 出そむるまた三日月のほかにてさなから秋のいろをみすらん  
 三日月の光ほのかにみゆるよりこゝろをつくるあきのそらかな  
 夕まくれひと葉いろつく木の間にしこそ秋といつる三日月  
 よひのまの月のかつらのうすもみちてるとしもなき初秋のそら  
 夕暮は小野のまのはらまのはれぬ秋きにけりとうつらなくなり  
 秋はきぬもみちのみふねふなよそへたなはたつめの天の川をさ  
 天の川かは風すゝしとはつまのいつかたまちしあきやきぬらん

從二位家隆卿  
 悲鏡和尚  
 前中納言定家卿  
 後京極攝政  
 從三位保季卿  
 二條院殿  
 民部卿爲家  
 前中納言定家卿  
 從二位家隆卿  
 正三位知家卿

老若五十首歌合

秋たちてけふみかの原風さむしや、たなはたにころもかせやま

後鳥羽院御製

秋歌中

秋はきぬ七日はまたしたなはたのあき引いとふしやわふらん  
いまよりは秋つきぬらしあし引の山まつかけにひくらしなきぬ  
みなひとは蟬の羽ころもぬき捨ていまは秋なるひくらしのこゑ

慈一鏡 和尙  
よみ人しらす  
後京極攝政

十題百首御歌

した草に露おきそめて秋のくるけしきのもりにひくらしそなく

同

御歌立秋

は、そ原しくれぬほと秋なれやゆふ露す、しひくらしのこゑ

同

南北百首歌合

秋風のふきにし日よりかた岡のせみのなくねもいろかはるなり

従二位家隆卿

喜多院入道二品親王家五  
十首

や、さむき初秋風のいねかてにかよひすきぬるゆめのふるみち

民部卿雅有

家集初秋風

夜やさむき月やす、しきあけかたのおいのね覺に風そ身にしむ

民部卿為家

建長五年毎日一首初秋

殘暑

六百番歌合殘暑

うちよする浪より秋はたつた川さてもわすれぬやなきかけかな

後京極攝政

秋をあさみてる日を夏とおほめはくれゆく空の萩のうはかせ

中宮權大夫家房卿

秋きてもなほゆふ風をまつかねに夏をわすれぬかけそたちうき

中納言定家卿

秋かせの吹もつよらぬ真くつはら夏のけしきになほかへるかな

大藏卿有家

夏ころもまたぬきかへぬゆふくれは袖にまたる、萩のうはかせ

寂蓮法師

水久四年百首殘暑

水無月のてる日やかけを殘しけんけさふく風のあきにまらぬ

法橋顯昭

秋きては風ひやかなる暮も有にあつれまめらひむつかしのよや

俊賴朝臣

七夕

六百番歌合乞巧奠

ほしあひの空のひかりとなるものは雲井の庭にてらすともし火

後京極攝政

たなはたは雲の上より雲の上にくらうをわけてうれしかるらん

慈鏡和尚

くれたけにすくる秋風さよふけてまつるほとにやほしあひの空

前中納言兼宗卿

あきことにたえぬほしあひのさ夜更てひかりならふるにはの灯

前中納言定家卿

たれもまた今日七夕をまつりつ、いのるころは空にまららん

正三位經家卿

宿ことにかけてをうつせは七夕のあふせはまけしあまのかはなみ

正三位季經卿

さためおく星あひの空のまらしとて秋のまらへにことちたつ也

法橋顯昭

たなはたの逢夜の庭におくことあたりにひくはさ、かにの絲

寂蓮法師

見るまゝに庭のともし火かすかにて七夕まつる夜はふけにけり

信實朝臣

よもすから星合の空にたてまつるかうのけふりや雲となるらん

源仲正

たきものをくものころもに匂はせて七夕つめのくれをまつらん

三條入道左大臣

しらつゆの玉のをことの手向してにはかゝくる秋のともしひ

常樂非入道太政大臣



秋御歌中

七月七日人にたまはせけ

家集

延喜六年享子院明玉歌合

七日夜

家集七夕を

家集

家集秋歌中

寛和六年七月七日東三條

院御歌合

同すはまのなでしこに

けたる

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

かさゝきはしつくるより天の河みつもひなゝむかち渡りせん

天津風あふくともゆめ風たつなこはたなはたのおれるにしきそ

天の川はしうち渡すいもか家にたえすかよはんときまたすとも

ひこほしのつままつ舟の引つなのたえんと君に我おもはなくに

思ひやるこゝろの空に去くるれはたなはたつめの別れかなしな

七日ひははやくれなゝんひさかたのあまのかは霧立わたるへく

天の河けふの七日はななき夜のためしにもひきいみもまつへし

なかむらん空をたにみす七夕にあまるはかりのわか身と思へは

ひとひたにやすみやはする七夕にかしてもおなし戀こそはすれ

露くたす星あひの空をなかつゝいかてことしの秋をすくさむ

なてしこにけふは心をかよはしていかにかすらんひこほしの空

時の間にかすとおもへは七夕にかつをしまるゝなてしこのはな

此歌事書にいはいく左すはまぢひさきませゆひてなでしこ二は

んばかりうゑたるにゆひつけたると云々

七夕やわきてそむらんてしこの花のこなたはいろのまされる

ちきりけん心そなきたなはたのきてはうちふすとこなつの花

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

恒 徳 公

延 喜 御 製

人 丸

よみびとしらす

み つ ね

四 行 上 人

和 泉 式 部

藤 原 儀 季

兼 原 儀 盛

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

能 宜 朝 臣

家集七月七日

屏風七月七夕まつりたら

ひに水入てかげみる

寛治五年従二位藤原親王

家歌合

家集七夕を

七夕を

千五百番歌合

久安百首七夕の心を

水久四年百首七夕後朝

建長八年百首歌合

七夕歌

御集七夕

此歌詞云七夕ひこほし雲の上にあり又つり去たるかたなどあ

りすはまの洲崎に見えてにてと云々

天の戸はさしやまつらん彦星のちちふりたてゝかへるふなちに

あまのかは影をやとせるみつかみ七夕つめのあふせせせよ

あふことも馴すやあるらん七夕のまほにきたる天のはこころも

たなはたのたえぬ契を結び置てくものまたひもけふやとくらん

七夕のくもの機たておるころもうらめつらしくうちかさぬらん

七夕のわかるゝ今朝のたもとにはあきのまら露おきはしむらん

七夕のあかぬ名こりのそてよりやあきは露けきころとなるらん

さぬる夜の天のかはらのいそ枕そはたてあへすあけそしにける

またれつる月の中立いらぬ間にはやふな出せよあまのわたせに

たなはたの舟路はさしも遠かりしなとひととせに一わたりする

七夕のあまの川もりこゝろあらはかへさわたすなかさゝきの橋

あさ風に川なみさわけひと夜つま玉ゆらたにもたちとまるへく

天の川くらしかねたるともしつま渡りをいそぐぬさたむくなり

七夕の袖つく夜はあかつきはかはせのたつはなかつともよし

こひく〜て稀に逢夜は天のかは河せのたつはなかつともあらなん

平 祐 舉

藤 原 法 師

康 安 王 母

知 覺 法 師

藤 原 親 重

俊 藤 法 師

皇太后宮大夫俊成卿

前大納言隆季卿

前參議親隆卿

皇太后宮大夫俊成卿

花園左大臣家小大進

源 兼 昌

前中納言顯朝卿

湯 原 王

鎌 倉 右 大 臣

家集七夕をよめる

たなはたの別れを惜み天のかはやすのわたりにたつもなかなん

俊頼朝臣

永久四年百首七夕後朝

七夕はあめのおしてのやへ霧にみちふみまよひまたやかへると

同

九條大納言家にて七夕の歌七首當座にてよみける中

老若五十歌合

まをれきてこよひはかりや久かたのあまのは袖もほしあひの空

家長朝臣

賀茂社百首御歌

はらふらんまくらそみゆる夕まくれくものちりぬ星合のそら

嘉陽門院越前

伊呂波四十七首歌

をさめとのくるゝの妻戸おしあけてけふ七夕にかすものやなに

慈鎮和尙

久安百首

らのへうしひもの玉ゆらときかせは天のかはらに雲やまくらん

前中納言定家卿

正治二年百首

彦星のかへさの秋ををしむとやたなはたつめはあまのひれふる

實清朝臣

喜多院入道親王家百五十首

たなはたの雲のころもに風たちてうらめつらしきはりあひの空

前大納言忠良卿

正治二年百首

七夕にまをのにひいとひきかけてくる事たえぬほしあひのそら

源師光

三百六十百中七夕

彦星のもの忘れせぬあかつきはたなはたつめもかくやわふらん

祭主輪親

七月七日ひきたるおくに

此歌は七月六日ある人わづらひて侍るをつかふまつる所より

祭主輪親

七月七日ひきたるおくに

めしけるにうたよみてといひければよめると云々

祭主輪親

七月七日ひきたるおくに

空をとふをとめの衣ひとつよりあまのかはなみたちそざるちし

よしした

七月七日ひきたるおくに

さゝかにもろてにいそく七夕の雲のころもかせやたつらん

小大君

七月七日ひきたるおくに

彦星のくへき背とやさゝかにのくものいかきもまろくみゆらん

實方朝臣

正治二年百首

星合の空はこよひそあまのかはもろてにいそけつまむかへふね

前大納言隆房卿

家集七夕の心を

心してこよひの空はくもらん星あひのすかたまろくかもみん

太宰大貳兼家卿

家集七夕歌を

天の原ふりさけみればたなはたの星のやとりにきりたちわたる

大納言経信

御集

雲はるゝあまのさはしたえまかもとわたりくらし七夕つめは

朝

家集海路七夕

あまのかは月の御舟の溯りせにみかくひかりやわたるたまはし

中務のみこ

細川院御時百首

星合のかけをうつせはなこの海もあまの川せのこゝちこそすれ

大納言経信卿

家集七夕の歌中

わたしもりふなよとめすな七夕のとしに逢夜はたゝこよひのみ

仲實朝臣

光俊朝臣すゝめける百首

七夕のあまのたまゆかこよひさへ流れやすらんあかねなみに

俊頼朝臣

家集七夕歌中

彦星のみけしのあやをいそくとやはたおる虫のこよひしもなく

正三位知家卿

千五百番歌合

七夕の袖にひまなくつくすみはあふせに今日やあらひすつらん

四行上人

家集七夕心を

老ぬれば七夕つめにことよせてとりもわたらぬみつはをそくむ

宜秋門院丹後

細川院御時百首七夕

あまのかはとりもわたらぬ明ほのにおきて露ふむにはの草むら

俊頼朝臣

光俊朝臣すゝめける百首

いそきおきて庭の小草の露ふまんやさしきかすにひとや思ふと

同

家集七夕歌中

七夕のあはぬたえまとかそへしはこのよにみする月日なりけり

同

千五百番歌合

一夜にはいそあひみける七夕をまらてやひとのうらみそめけん

同

家集七夕心を

ひこほしのあまの岩ふね舟出してこよひやいそに磯まくらする

同

細川院御時百首七夕

ひこほしのあまの岩ふね舟出してこよひやいそに磯まくらする

同

夫木和歌抄卷第十

七夕

二百七十九

夫木和歌抄卷第十

七夕

二百七十九



光明峰寺入道攝政家百首  
挿頭花

久安百首

千五百番歌合

百首御歌

正治二年百首

家集七夕心

永延二年七月七日實資朝臣家歌合鈔虫  
喜多院入道二品親王家五十首

百首御歌

賴輔家歌合七夕

正治二年百首

七夕のあはぬわかれのなみたにや花のかつらもつゆけかるらん  
あまのかはみつかけ草のうちなひき玉のかつらも露こぼるらん  
彦星のかさしの花はつまこふとみたれにけらしこのかはのせに  
としをへてまれに逢夜のあけ行はみる人くるしたなはたのいと  
あひみてもなほゆくすゑのちきりをや結ひかさぬる七夕のいと  
七夕のくものたもとやぬれぬらんあけぬとつくるあき風のこと  
我いのるねかひのいととしをへてあはてまもやはあきの七夕  
七夕のまちこしあきは夜さむにて雲にかさぬるあまのはころも  
彦星の行あふかけをうつしつゝたらひのみつやあまのかはなみ  
七夕にけふやかすらん野へことにみたれおるなる蟲のころもは  
聞かはやなふたつの星の物かたりたらひの水にうつらましかは  
聲のあやは音はかりしてはたおりの露のきぬをや星にかすらん  
七夕にかしやまつらんすゝむしの雲非はるかに音さきこゆなる  
待かぬるこゝろにさよや更ぬらん月かたふきぬほしあひのそら  
さをしかのつれなきつまもあるものをまつをうらみの星合の空  
七夕のたえぬちきりをそへんとやはねをならふるかさゝきの橋  
あまのかはたえぬちきりのわたりとやはねをかはせる鵲のはし

權中納言時卿  
前中納言定家卿  
よみ人まらす  
待賢門院あき  
後久我太政大臣  
後鳥羽院御製  
土御門院御製  
後京極攝政  
民部卿範知元  
建禮門院左京大夫  
よみ人まらす  
法橋親顯昭  
順德院御製  
皇太后宮大夫俊成卿  
源光

嘉元二年百首七夕

弘安元年宵根にたてまつる百首

建保四年百首

同三年内裏七夕御會

千首歌

建長三年毎日一首歌

正治三年毎日一首中

文應元年毎日一首中

文永四年毎日一首中

六帖題

弘安三年稻荷社百首

古集百首中鶴朝悲願織女一婦

秋歌中

柿本影供百首

家集七夕

弘安元年百首

かきつくるかちのなはの思ふことなほあまりあるあきの夕暮  
ゆみはりの月も入なはあまの川やそのなみちにふねやまよはん  
あまのかはふるさわたりもうつろひて月のかつらそ色にいて行  
七夕の手たまもゆらにおるはたををしもならふむしの聲かな  
あまのかは秋風さむみたなはたの雲のころもやけふかさぬらん  
天の河手たまもゆらにおるいとのかき契りのあきはかはらし  
たなはたのあくる別れにふきそめて人おとろかすあき風のこと  
七夕のいのる手向やうけつらんあけてそかへるかちのことは  
君すめはちよもかきらしかめのをの河せにうつすほし合のかけ  
夕立に水まさるらんあまのかははるかにわたせかさゝきのはし  
けふきてや立かさぬらんあまのかははるかにわたせかさゝきのはし  
たなはたのいははたころもきぬゝに天の川浪たちわかるらし  
名残をやなれもまららん七夕のわかれをおくるかさゝきのころ  
天の川あきはあさせの浪の上にもみちのをふねはやこかるなり  
七夕もおなし河原にたつたひめいそけもみちのあきのうきはし  
今はとてひとはおくとも七夕のあきのあふきの名をはわすれし  
天の川雲そみたるゝたなはたにたれかまのふのころもかすらん

入道前太政大臣  
安嘉門院四條  
前中納言定家卿  
同  
民部卿爲家  
同  
同  
同  
同  
同  
安嘉門院四條  
參議爲相卿  
正三位知家卿  
後九條内大臣  
從二位家隆卿  
後九條内大臣

家五十首

建保三年内裏七夕七首

御集

弘安元年百首七夕

六帖題

一字百首

七夕にこゝろをかしてあぢきなくあかぬわかれのよそに苦しき  
 天の川あくる岩戸もなさけしれあきのなぬかのとしのひと夜を  
 七夕のよとのすかた立かくすきりのはりにあきかせそふく  
 鵲のかはかせたちぬたなはたのもみちのとはりなみやかくらん  
 明かたのふしのけふりや星合のそらのわかれのおもひなるらん  
新六 わかれをはかたへのあきやつけつらん七夕つめのあかほしの影  
 長月のありあけのつきのあなたまでこゝろはふくるほし合の空

喜多院入道二品親王  
 前中納言定家卿  
 衣笠内大臣  
 後九條内大臣  
 信實朝臣  
 前中納言定家卿

### 夫木和歌抄卷第十終

### 夫木和歌抄卷第十一

#### 秋部二

萩 女郎花 薄 刈萱 萩 蘭  
 草香 秋花 槿花 秋野

#### 萩

題不知

光明寺入道攝政家御會  
野徑早秋

題不知

戀歌中人家

爲家卿家百首

秋風歌

萬八 わかをかにかさをまかきなく初萩のはなつま戀にきなくさをしか  
 萬十 てもすまにうゑしもまろくいて、みれば宿の初萩咲にけるかも  
 萬八 はつ萩のひとはなすりのたひころも露おきそむるみやきの、原  
 萬八 いもかめを見そめのさきのあき萩はこの月ころは散すなゆめ  
 ほのかにも見そめのさきの萩の色にうつす心をまらせてしかな  
 露なからあたにはをらしわきもこか見そめのさきの萩萩のはな  
 萬十 萩の花さきたるのへにひくらしのなくなるともに秋かせそふく

本寺卿大伴直人卿  
 中納言家持卿  
 よみひとまらす  
 従二位家隆卿  
 坂上耶女  
 民部卿爲家  
 従二位家隆卿  
 人丸

正治二年百首

秋花歌

百首歌

大寶二年太上天皇幸于三川國之時歌

千首歌

寛喜元年女御入内屏風

秋花歌

題不知

建永元年仙洞歌合朝草花

文永二年白川殿七百首

題不知

題不知

秋花歌

堀川院御時百首

正治二年百首

題不知

堀川院御時百首

こはきさく山の夕かけあめすきてなごりの露に日くらしそなく

まくす原なひく秋かせふくことにあたの大野の萩のはなちるし

かたみこそあたの大野の萩のつゆうつろふ色はいふかひもなし

ひくま野にはほふ萩原入みたれころもにははせたひの志るしに

ひくま野に匂ふはき原露ながらぬれてうつさんかたみはかりに

もろ人のころもするらしあつさ弓ひくまの野邊のあき萩のはな

さぬかたの野への秋萩時しあれば今さかりなりをりてかさむ

あすか川ゆきゝのをかのあき萩はけふふるあめに散かすきなむ

わか袖はけさもほしあへすあすか川ゆきゝのをかのあき萩の白露

旅人のゆきゝのをかのこはきはらうつればかはる袖のいろかな

たかまとの野邊のあき萩この比のあかつき露にさきにけむかも

みや人の袖つきころもあき萩にはひよろしきたかまとのみや

秋風は日ごとにふきぬたかまとの野邊のあき萩ちらまくをしも

たかまとの野をすきゆけは秋はきの花すりころもきぬ人そなき

たかまとの野邊のあきはき分行けはおきなさひにも似たる袖哉

いさやこらやまとへ早くをらすけのまのゝはき原たをりて行ん

ふたはより朝たつまかはまからめとまのゝはき原花さきにけり

後京極攝政

よみびとまらす

前中納言定家卿

長尾

民部卿爲家

前中納言定家卿

よみびとまらす

丹比國入

從二位家隆卿

正三位知家卿

中納言家持卿

よみびとまらす

前齊宮河内

源卿光

高市縣人

大納言師頼卿

久安百首御歌

題不知

文治八年五社百首

題不知

文應元年七社百首

題不知

家集秋歌中

住吉社百首御歌

文應元年七社

題不知

道もせにたかをり去けるにしきそもえそまらすけのまのゝ萩原

すみよしのとほさとをのゝまはきもてすれる衣のさかり過ゆく

はるといひし人に見せはや津の國のとほさとをのゝ秋はきの花

露しけきみやきか原のはきさかりにしきのうへに玉そちりける

かすかのゝはきしちりなは朝こちの風にたくひてこゝに散こね

かすかのゝ忍ふもちすりあき萩の花のみたれもかきりまらす

すみのえのきしのゝ萩ににははせと匂はぬ我はにはひてをらん

住よしのきしのこはきにうちをへて波のはなさへめつるけふ哉

すみよしの濱のむらはき露もろしまはしなふきそ松のうらかせ

袖よりもこゝろそうつる住よしのあさしはをのゝあきはきの花

あきつのををはなかりそへ秋はきのはなをふかさねきみか假庵

おくれゐて我はや戀いなみのゝ秋はき見つゝいなん子ゆるに

をとめらに行あひのわせをかる時になりにつらしも萩の花さく

さしすきのくるすのをのゝ萩の花ちらん時にしゆきてたむけん

くれに逢て朝かほはつるかくれのゝ萩は散にきもみちはやつけ

から衣たつ田のやまの萩よりもいもをそきみはめつらしとみん

つまこひにまかなく山のあきはきは露霜さむみさかりすきゆく

崇徳院御製

よみびとまらす

皇太后宮大夫俊成卿

よみびとまらす

民部卿爲家

よみびとまらす

顯仲朝臣

慈鎮和尚

民部卿爲家

人丸

よみ人しらす

同

同

同

同

同

石川廣成

家集

三十首歌人々によませ給し時草花露喜多院入道二品親王家御會野秋

千五百番歌合

家集

題不知雲集

延長二年左大臣家屏風まがのいあき

題不知

本院左大臣家前裁歌合萩

承安二年法輪寺歌合草花

家集

秋歌中

大尊會主基方御屏風并後

正治二年百首御歌

千五百番歌合

秋萩をちらすなかめのふる比はひとり起めてこふる夜そおほき

かすく月に月のひかりもうつりけりありあけの庭の露のたま萩

立田姫すそ野のはきのからにしきまつおりそむる秋はきにけり

立田山木するはなほもみとりにてすその萩にあきをみるかな

たまはこの君か使のたをりたるなこの秋はきみれとあかぬかも

さひしくもなりにけるかな秋萩のふるえの花はちりすきにけり

手毎にそ人はをりけるきみかためゆくすゑ遠きあきの野のはき

このゆふへ秋風ふきぬまら露にあらそふはきのあすさかんむ

秋風ははやふきにけりはきはなちまををしみきほひくくに

秋萩の花のなかるかはのせにまからみかくるしかのねもせず

こ萩さくさか野はゆかし秋萩のうき世のなかにこゝろとめけり

さをしかもつまこひときになりけりさか野の萩も下紅葉して

思ひいて戀しくもあるか粟津のこ萩かもとにわれ行まかり

きりはれぬ花のこはきさきにけり行かふひとの袖にはふまて

ふたむらの山の麓のあきはきににしきをまける野へかとそみる

よせかへる波の花摺みたれつゝまとろにうつるまのうらははき

きりくす啼てよすかにあかすなりまのうらははき色かはる比

人 入道前大政大臣

從二位家隆卿

宜秋門院丹後

人 光孝天皇御製

其 之

よみひとしらす

同

同

快 立 法 師

伊 勢

修理大夫顯季卿

前中納言匡房卿

式子内親王

四圓寺太政大臣

久安百首

常盤井會道郷萩

家集水邊萩

家集

草花露深

嘉祿二年百首萩

大治元年八月攝政左大臣家歌合戀

天永二年七月内大臣家歌合草花

建長二年八月十五夜三首歌合

秋はき

承久二年太神宮禰宜歌合萩

家歌戀歌中

秋の心を萩によす

後法性寺入道關白家百首

家集萩

風ふけはまのいと萩よることにつらぬく玉のつゆそとまらぬ

行てみむ駒のくつかけいしはらやとほちのさとに萩さきぬめり

しら浪はよはに立きてみきはなるはきのまつえの花やぬすまん

風ふけは萩のはひえに浪こえてえもいはぬまのみきはをそみる

あたしのはきのするこす秋風にこほるつゆやたま川のみつ

人心あたしの野へのまはきはらうつるふいろもほとはありけり

あたしの萩の末はの露よりもあやしくもろきわかなみたかな

としをへてふるのをのにはへともなほめつらしき萩の初花

たかよにかうゑはしめけんいそのかみふるのにさける秋萩の花

たひ人のたちのはらのからにしきおりはへさらす秋はきの花

露かけてをらはをしけん神なひのあさ笹はらのあきはきはな

ゆふたすき心にかけてし神なひのみむろのはきはきにけるかな

みそのふのませの秋はきなくたくりたくるにつけておそき君哉

秋はきを心にかけてをかさきのおほみあしちをなつみてそくる

あたらしや露けきのへにたつしかのうはけにうつる萩か花すり

みるまゝにあたら物をとおほゆるはまかなくのへの萩か花かな

かせをいたみまた葉のうへになりしよりうらみて物を思ふ秋萩

待賢門院安藝

源 仲 正

同

俊 頼 朝 臣

同

民部卿為家

源 雅 光

同

後嵯峨院御歌

冷泉太政大臣

衣笠内大臣

よみ人じらす

俊 頼 朝 臣

同

皇太后宮大夫俊成卿

和 泉 式 部

御集

むさしのかみなりし人まできて萩のまきけるをみ侍しに

あらしと思ひしやとを花により萩のはらともなしてみるかな  
むさしの、萩かうへこすあき風に去た葉の露やかすまざるらん  
順徳院御製

天延元年内裏御屏風歌ひ

武藏野のむかしの萩をうつしうゑて君かためとそこの萩はまつ

ろさばの池

廣澤のいけのみきはあき萩はなみのそこなるにしきなりけり

家集草花移池

はらの池のたまもに花ささきにけるみきは萩の影をやとひて

天徳三年九月十三夜庚申  
中宮女房歌合

高砂のをのへの萩ををりつればまかのたちとやうすらさぬらん

原

すかはらの里の萩はら萩の雨にうつるふことををしきはきはら

規子内親王家歌合萩

さをしかのすたくふもとの下萩は露おくことのかたくも有かな

秋歌中

わかやとのまへのあきはき風ふけはをる人なしにぬきみたる糸

天喜二年兼房朝臣

秋くれはいとよりかくる萩のうへはむらこに花を咲みたれける

家集萩歌中

みやきのゝえたを分てもまら露はおもきやなひくはきのまら糸

家集鹿鳴草

錦にもおりつへらなりわかやとの糸よりかくるあきはきなれば

秋歌中

あきの野のはきの露ともまらさうつちくさのいとにぬける白玉

貞元二年八月三條左大臣  
家歌合岸邊萩草

むらさきの雲とそみゆる月かけに水のおもてらすきしの萩はき

寛治五年内裏歌合萩

秋の野にたわゝにさける萩みればうらうへもなきにしき也けり

家集萩を

こむらさきたか袖かれしころもそとみゆるは萩の野萩なりけり

能宣朝臣  
元仲正  
よみ人しらす  
中納言家持卿  
よみびとしらす  
能因法師  
前大納言公任卿  
兼盛  
源盛  
惠度法師

秋歌中

家集井かといふ所を行

おもふ人こそせまほしきところかなみかきか原の萩のさかりは

爲家卿家百首

思ふことなればぬれぬわか袖をうたゝあるのへの萩か露かな

紙園百首

ことわりやはらにその名たからん雲の上にも萩の戸のはき

貞應二年百首野邊夕萩

あきはきのはなのとさしの色に出て夕くれまきへの露かな

大神宮百首御歌

花をのみなかねれにしみよしのゝふるさと遠き萩はきのはな

北野社百首御歌

つゆまけき萩のはすりのかり衣はさてやたひのかたみにもせん

寛治二年百首萩露

わきもこかそてのつますり色こにみたれてうつる萩のあき露

御集

人はこぬくさはの露のこの上にかたしきねたるはきか花つま

文應元年五社百首

むらさめにちりかすきなん山しろのうちのみやこの萩はきの花

五十首

みやひとのはなすりころもいそかなんつゆに咲そふあの、萩原

天水三年正月歌合萩

たかそてにまつうつるらんたかまやうち野のはらの萩萩の花

百首歌名所萩

かりころもみたれてそてにうつりゆくかたの、はらの萩萩の花

五十首

たれにかはほさても見せんたちなれしかたの、衣はきか花すり

百首歌名所萩

夜もすからこはさか花をなかめつ、萩はかたのに旅ねをそする

五十首

つゆなから秋待えたるはきはらのふる枝のはなに風なふれそも

百首歌名所萩

くる、野のふるえの萩の花みればことしはかりの萩としもなし

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

百首歌名所萩

同

洞院攝政家百首早秋

建保秋十五首歌合

文永五年九月十六日内裏歌合

文治六年五社百首鹿

寛元四年十禪師歌合野徑萩露

寛喜元年五十首戀歌

喜多院入道二品親王家五十首

建長七年顯知卿家千首萩萩

正治二年百首

建長七年三十首

升臣御歌合

嘉元四年十月當座百首萩千首歌

文永五年每日一首中

おきそむる露の白玉えたなからみかきかはらのはきはつはな

咲にはふうたのおほのこはき原つまよふまかも今やなくらん

あかなくに旅ねをそする夕つくひいるのほきはきの花のわたりに

武士のいるの原とまちなからはきさきぬれはまかのなくらん

あつさ弓いる野のこはき打なひきすゑもたわに露そこほる

はしたかのかりちのをのあさつゆに今そうつろふ秋はきはきの花

ちきりおきし末のはらの萩の露うつろふ色にきえかへりつ

うつらなくすゑのはらのほきはかえに秋の色あるゆふつくひ哉

白露をとらはけぬへしいさや此の露にきそひて萩のあそひせん

うろおきて盛になれりいさこともにはし出てはきあそひせん

時きぬとかりやなくらん野へみればほころひにけり萩のはつ花

白露にたえぬ秋はきをれふしてまはかるをのこみちたにもなし

花さかは行てやみましいそのかみふるからをのものとあらの萩

露おもる小萩かすゑはなひきふしてふきかへす風に花そ色そふ

また葉こそはなよりさきにおちにけれうつるまはきの風の夕暮

さきそむるいはせのをの小萩原まはしも風にいかをらまし

老の身に見ても聞てもかなしきはきはきさくやとの日くらしの聲

從三位範宗卿

僧正行意

徳大寺左大臣

皇太后宮大夫俊成卿

右兵衛督爲教

後九條内大臣家大夫

衣笠内大臣

禪性法師

よみ人しらす

源仲遠

源師光

大納言經信卿

權僧正公朝

前中納言爲兼

爲實卿

民部卿爲家

同

同七年毎日一首中

毎日一首中

千五百番歌合

元永二年七月内大臣家歌合草花判者修理大夫

千五百番歌合

建保三年名所百首

同四年内裏歌合

百首御歌

百首野宮五首中

布引百首御歌

野外萩人家

をくらやまふもとのやとの秋はきを鹿のねながら思ひやるかな

小倉山すその萩はちりにけりいまやをのへのまかはなくらん

雲のよりかりのなみたやをくらやまふもとの野への萩の上の露

まら露のおりたつはきのからにしきまかのよりきる衣なりけり

なみあらふからにしきとも見ゆるかなのしまかさきの秋萩の花

小萩さくのしまかさきに風こえてゆふてるなみにのこる月かけ

旅人のみのしうころもをさをあらみまとはにうつる萩か花すり

まつのめかあさの衣の花すりはきはきのなをりのものにそ有ける

秋萩のさき散るころやかち人のむらさきのゆくそてのはなすり

かけうつすをへのまはきさきしより花すりすらし布引のたき

まらつゆもうつりにけりなむらさきのねはふよこの萩萩の花

同

同

前大納言忠真卿

基俊

皇太后宮大夫俊成卿

正三位知家卿

同

同

慈鎮和尚

藤原爲顯

法親王澄覺

藤原行實

女郎花

家集秋歌中

家集秋歌中

家集

てにとれは袖さへ匂ふをみなへし木のまはた露にちらまくをし

ことさらに衣はすらしをみなへしさかの花ににほひてをみん

やをとめの袖かともゆるをみなへし君を祝ひてなてはしめけり

人丸イ

中納言家持卿

伊勢

昌泰元年平于院歌合女郎花

あらかねの土の下にて秋まちてけふのうらてにあふをみなへし  
ふみびとしらす

同三年五條朝白前歌合女郎花

秋の野の女郎花とるさゝわけにぬれにしそてやはなとみゆらん  
同

延喜十九年八月鹽女御歌合女郎花

ななき夜にたれたのめけん女郎花人まつむしのえたことになく  
同

家集山家女郎花

女郎花をりとることにつむしのやとはかれぬとなくか悲しさ  
同

文永四年百首夕立

うつろへる所ありともをみなへしのへのふるさと忘れさらなん  
同

久安百首

白露のわきてそめおくをみなへし色ことなりときみにみえなん  
元

家集

風ふくみ山さとなるをみなへしうしろめたくてかへるけふかな  
仲實朝臣

露隔女郎花

夕立やたらちねならん夕かほもなほなつかしきをみなへしかな  
花園左大臣家小大進

永久四年七月忠隆家歌合

忍ひかねつみまらするを女郎花たよせにをるとおもひうとむな  
俊頼朝臣

保延四年權中納言經定卿家歌合

をみなへし朝おく露をおひにして結ふたもとやまをれまぬらん  
同

女那花

あかさりし伏見のさとの女郎花ねながらやとにうつしてそみる  
藤原國親

文治六年五社百首

ひとりのみふしみのさとのをみなへしつゆけさまさる秋の夕暮  
藤原光忠

堀川院御時百首

女郎花はなの下ひもうちとけてたれとふしみの野へにさくらん  
藤原道經

永仁二年大神宮願宜歌合女郎花

すかはらやふしみの野への女郎花たれになれてか今朝は露けき  
皇太后宮大夫俊成卿

秋御歌中

夕されは伏見の里のをみなへしをらてすくへきこちこそせね  
中納言國信卿

院北面御會故郷女郎花

心からあたの大野におひたちてかせにたはるゝをみなへしかな  
中納言師時卿

大伴會悠紀方御屏風

秋きりにかくれのをのゝをみなへし我たもとには匂へとそ思ふ  
修理大夫顯季卿

大治三年八月廣田社歌合女郎花

みよしのゝかたちのをのゝをみなへしたはれて露に心おかるな  
俊頼朝臣

親子内親王家野宮

たくひなきかたちの野への女郎花こゝろとゝめぬ人はあらしな  
藤原忠兼

同歌合判者

此判者云かたちの野へ何に侍所にあらん女郎花栖にてはあら  
まほしき所にては侍とまたよめる歌もき侍らすと云々

家集

露むすふかたちの野へのをみなへし玉をかされるあさほらけ哉  
中務のみこ鎌倉

秋御歌中

古郷のみかきか原のをみなへしひかりつゆけきのへにふすかな  
如願法師

永久四年七月歌合女郎花判者仲實朝臣

かまふのゝまめのゝ原のをみなへし野守にみすな妹かそてふる  
前中納言匡房卿

逢ことをいなみのにさく女郎花折らぬものゆゑそてそつゆけき  
大 夫 典 侍

順家集  
くらふ山ふもとの野へのをみなへし露の下よりうつりつるかな  
藤原有忠朝臣

霜かれのおきな草とはなのれともをみなへしには猶なひきけり  
順

いなみのゝ秋のをはなはまねけともをみなへしにそ心つけつる  
中納言家持卿

新深窓  
をらてゆく人はかたのゝをみなへしうへこそ花のあた名立けれ  
後三條内大臣

歌林  
名とり川をちのみきはのをみなへし浪にたはれてぬれ衣やきる  
岡崎大進

白川のかはへにたてるをみなへし今日の雨にや身をはざるらん  
前大納言公任卿

歌林  
さる澤の池なのそきををみなへしむかしもさてそ身をは捨ける  
源 仲 綱

きゝすたつ交野のをのゝ女郎花かりそめにたになひかざるらん  
源經兼朝臣

家集

女郎花露のおきかほ見せしとやすそのまきりのたちつくすらん

藤原道經

此歌判者左風なくてなびくとよめることわりなし右山なくて  
すそのいかいとみれどふるくよめる心をかして勝と云々

藤原長能

山かけの田くちなたてるをみなへしわれ獨のみ見るそかなしき  
此歌はくりこまのみやけといふ所に秋こたかりしにまかり

小大君

けるにあこたにのくちに女郎花のたてるをみてよめると云々  
雲のたつうりふの山のをみなへしくちなし色をこひそわつらふ

伊勢大輔

家集

長き夜をいかにあかしてをみなへし朝かほみれば露けかるらん  
いそのかみふるからをのをみなへし名はいにしへの姿成けり

前參議親隆卿

久安百首女郎花

さらたに色めきたりといはれの風をれふすをみなへし哉  
あたなりといはれのに咲女郎花つゆのぬれきぬまれにや有らん

待賢門院安藝

同

無名のみいはれの野への女郎花つゆのぬれきぬきはあらしな  
あさからすいはれのにさくをみなへしきめゆふ露も心しておけ

上西門院兵衛

同

むさしのにわきて匂へはをみなへしなへての草の中にむつまし  
とらせたりければよめると云々

從三位頼政卿

建保三年名所百首

秋歌中

久安百首

元永二年七月内大臣家歌

合草花

永久四年七月忠隆家歌合

女郎花

建長二年八月十五夜三首

合草花

仁安二年八月經盛卿家歌

合草花

家集女郎花を

紙園百首女郎花

百首

かくし願歌かなうへの

三島本納神樂を和する歌

に篠波

家集池邊女郎花と云事を

女郎花を

武藏野のさりのまよひの女郎花いまもこもれるけふりとそみる  
あらしの心もまらぬ秋かせにあはれかたよるをみなへしかな

從三位行能卿

をみなへし露の衣をかさねきてなにあたしのにたはれふすらん  
あらしの萩の錦やとこならんつゆおきあかすをみなへしかな

大炊御門右大臣

あたしの名こそつらけれ女郎花見すてえこそ歸らまじけれ  
あたし野の名こそつらけれ女郎花露に去をれぬひましなければ

後鳥羽院下野

我やとにうつしてもみる女郎花あらしの野へのうしろめたさに  
聲たてゝ鳴むしよりもをみなへしいはぬ色こそ身にはまみけれ

法橋顯昭

此歌判者清輔朝臣云いはぬ色とはいかなる色にかくちなし色と  
思ひなされたるにや心えがたくと云々

寂廬法師

わきもこか花のすかたのをみなへしたまの衣やあきのゆふつゆ  
はつ秋はあさちのわこそうれしけれ女郎花にもかけていのらん

權中納言長房卿

住よしのあさをはをのをみなへしたれまつ風に露こほらん  
みくまのうららふく風をみなへしまたは上の物とこそなれ

皇太后宮大夫俊成卿

から崎の松ふく風をみなへしなひくをみればみしねつくかも  
池の面にかけをさやかにうつしもて水かゝみみるをみなへし哉

權僧正公朝

大方の野への露にはまをるれとわかなみたなきをみなへしかな  
同

四行上人



月前女郎花

女郎花

加茂社百首

文治六年五社百首

家集秋歌中

千五百番歌合

文應元年七社百首

女郎花

百首

保延四年經定卿家歌合女郎花

女郎花

百首

不知

不知

不知

月の色をはなにかさねて女郎花うはものえたにつゆをかけたる

をみなへしいろめく野邊にふればへん袂に露やこほれかゝると

尾上よりさわきを渡るをみなへしをはなかよふか風のまねくか

をみなへし露をは玉のかつらにてきりのまかきに立かくすらん

あはれなりよもきか宿のをみなへし思ひまをれて露けかるらん

久かたの天の河原のをみなへし今日のひとよやつゆはらふらん

旅ひとのいるのをはなたまくらにむすひかはせる女郎花かな

女郎花なひきもはてぬ秋かせにこゝろよわきはつゆのまたおひ

おのかすむかすかの野邊の女郎花去らてや妻をまかもこふらん

をとこ山裾野の原のをみなへしうたてあたる名もたてれとや

をとこやまよそにみつゝの女郎花たれゆゑ花のひもはとくらん

うきなからさてもある世を女郎花なひとさきに露こほるらん

我ならぬ人にをらるゝをみなへしに故まめしのへならなくに

日くらしの鳴ぬる時はをみなへし咲たるのへをゆきつゝ見えし

高まとのみやのすそまのぬへかたにいまさけるらん女郎花かも

女郎花さくさはにおふる花かつみ宮こもまらすこひもするかも

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

千首歌

文永三年毎日一首中

永久三年太神宮禰宜歌合

女郎花

同四年七月雪居寺歌合女郎花

女郎花

不知

不知

不知

原草花古來歌合

千首歌

たなかみの山さにて女郎花おもしろく見えければ

千首中

永久二年太神宮禰宜百首

歌合女郎花

御集

御集

花かつみおふるさはへのをみなへし都もまらぬあきやへぬらん

明わたるあしたの原のをみなへしおきゐる露のいかにぬるらん

あつまの露をかけきや女郎花おちけるまゝのひとの名たてに

露おもみあしたの原のをみなへしたわむにつけてなつかしき哉

秋くれは妻まめしのゝをみなへし朝つゆにぬれてみつらん

秋の田の畔におひたるをみなへしほもる人やたねをまきけん

女郎花咲野におふるまらすけのまらぬこともていはれしはせよ

女郎花おふるさはへのますけはらいつかはうみて我ころもきん

かみなひの淺笹はらのをみなへしおもへるきみか聲のまるけく

つゆまけきあさ笹はらのをみなへしいかななるふしに契おきけん

あきはまた淺さゝ原のをみなへしいくよるゝを露のおくらん

さしこしてすゝきはほかにまねけ共女郎花をそたをりにもくる

秋くれはなへてにほへと女郎花よのはたれもすみうかりけり

かゝみ山むかひの野へのをみなへし而かけさらすみつるけふ哉

いたつらにたのめし人やまつら山秋をわすれぬをみなへしかな

箱根やまふもとの野邊のをみなへしたかまく粟の色にさくらん

民部卿爲家

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

六帖題御歌  
門抄社歌合女郎花戀

たまたれのこすの大野のをみなへし白露かけてさきにけらしな  
身をつめはあはれとそみる女郎花人もこすのつゆにをるゝ

同  
上四門院兵衛

薄

題不知

寄露忍戀

千首歌

弘長元年百首簿

六帖題

隔一夜

堀川院御時百首

永久四年百首

建長八年百首歌合

弘安元年百首簿

柿本影供百首

性吉社歌合薄戀

萬十  
さをしかのいるのすき初尾花いつしか妹かたまくらにせん  
かれねたはつほのすき手枕にむすはつゆの散もこそすれ  
かり人のいるのすきうちなひきとたちあらはに秋風そふく  
初をはなそての中にやあき風のいるのすきひとまねくらん  
新六五  
かつみても猶そめかれぬまのすきはつほに結ふ妹かたまくら  
六五  
なよ竹に枝さしかはすまのすきよませに見えん君はたのまし  
秋かせにはらむ薄のあるのへはうつしのはなやいろにまとへる  
みこもりにほにはいてねとまの薄風にはえこそすまはさりけれ  
咲そむるはつ花すきつゆかけてまたてならさぬよはの下ひも  
あきはきはつほのすきあきな花のまひもにむすふ白露  
山もとの野原にましろはつせめのまらゆふ尾花あきかせそふく  
いかにせんまのゝ入江にまほみちてなみたにまつむまのゝ小薄

人 丸  
民部卿為家  
同  
信實朝臣  
正三位知家卿  
よみ人まらす  
權大納言公實卿  
神祇伯顯仲卿  
後九條内大臣  
同  
同  
神祇伯顯仲卿

御集社御歌中

承安三年七月左大臣家歌

合野風

喜多院入道二品親王五十首

南北百首歌合

文治六年五社百首

御集秋十首中

題不知

家集野薄

御集

嘉元々年百首

久應元年七社百首

承安元年七月右大臣家歌

合野風

貞應二年名所百首

六帖題御歌秋野

新撰古歌上

うちなひく入江の尾花ほのみえて夕やみまよふまのうらかせ  
粟津野のをはなかうれを風ふけはよせて歸らぬなみかとそみる  
山おろしや絶す吹らん粟津のをはなかくすゑのかたなひきなる  
粟津のをはなかく下にふきとめてそてになみこす山おろしの風  
露むすふあたの大野のまのすきなまねくらん袖ぬらせとや  
いかにせんいはたのをのまの薄ほにもいてすや秋もくれなん  
はりまかたいなみの野へのむら薄むらくよする浪かとそみる  
花すきまたにかよひしさをしかも薄ほにいたすいなみの原  
はなすきまほのくあくる遠かたのあしたのはらに秋風そふく  
たのむそよ北野の秋の花すきまねくとならほあらしあらせよ  
あすか川ゆき來のをかの花すきまねくたもとに露そこほるゝ  
岡の邊やすきかたよる秋かせに春のやなきのおもかけそたつ  
ほに出てまねくすきのあすか風そて吹かへすあきのゆふくれ  
風吹は淺さは小野のはなすきひとつにつくおきつまらなみ  
おきつ風つものうらなふきこせはとほさとをの尾花波よる  
まらつゆやくさの袂にをくらやまふもとのすき朽はつるまで  
をはなちるふきあけの小野を見渡せばよせてかへらぬ秋の浦浪

後京極攝政  
法性寺入道關白家丹後  
野宮左大臣  
慈鎮和尙  
同  
同  
土御門院御製  
藤原經平朝臣  
權僧正公朝  
中務卿の  
參議為相卿  
民部卿為家  
源仲綱  
民部卿為家  
中務卿の

保安三年九月内大臣家歌

合野風

永久四年七月雲居寺歌合

薄

家集草花隨風

永久二年太神宮禰宜歌合

薄

同四年七月忠隆家歌合

百首歌

永久四年七月忠隆家歌合

薄

元永二年七月内大臣家歌

合草花

永久二年太神宮禰宜歌合

薄

住吉社歌合判歌

かせさむみうへのをはなおきふすを須磨の浦波立かとそみる

たえくくに島わのをはな招くめり朝みつしほに見えかくれして

花薄なみよる野邊をきてみればさよみかせきにあきかせそふく

ほに出てまねくとならは花すきなにかまのひのをかに立らん

ゆふくれはまのひの岡の花すきたえすも誰をまねくなるらん

みし人をしのふのをかの花すきなひくはまねく心ちこそすれ

いつしかとまのたのりのまのすきひもとく秋に成にける哉

たむけにとむすひて行かんかさこしの裾のを花ほに出にけり

つのおむとみしまの野へのまの薄ほにいつる秋になりける哉

おもふこと大野にたてるまのすきまのふ心のありかたきかな

ほころひて招く袂と見えしかはまとけなきとてわれをむすひし

此歌は延喜御前にすきむすばれたりけるをこれはたがま

たるらんと仰られければよめると云々

家集八月ばかりにしのびたる人にあひてあしたに薄につけて

家集秋歌中

三十六人歌合

はなすきほのむすひつるたもとゆる露も心もとけす見えつる

いと薄ぬはれてまかのふすのへにはころひやすきふちはかま哉

はなすきなひくけしきもまるきかなかせふきかはる秋の夕暮

堀河院中宮上總  
三宮相模

源有仲

源經兼朝臣

登蓮法師

藤原國親

藤原顯仲朝臣

よみびとしらす

神祇伯顯仲卿

源公忠朝臣

藤原義孝

四行上人

平忠度朝臣

家集

うゑおきしわれやは見へき花薄あしのほにたにいたさすもかな

此歌は津國難波わたりに薄を植置て京にきたるにかの國より

おいにたりといひたるかへりごとにて云々

過行をまねくをはなまなかりけりあはれなりしは花のをりかな

此歌はこそその春石山にまうでたりしに山中にとまりてやすみ

などせしを又のとしの秋まへをわたるにさぞかしとおもふに

あはれにてとはすれば人なしすきぞなきけなげにすくみて

たてるにかきてむすびつくと云々

くるものもちきはかなきあきかせにいなつま招くはな薄かな

たちわかれ今朝やこやの、花薄まねくけしきもかなしかるらん

吉野川ひととたてるといはずきつりする人のそてかとそみる

さよひめの袖かともれはまつら山すそ野にまねく尾花なりけり

みまくさにはらの、薄かりにきてまかのふしとをみおさつる哉

おしなへてなひくをはなのほなりけり月のいてつるみねの白雲

まのふ山すその、薄いかはかりあきのさかりをおもひわふらん

みやこよりたつねいく野の花すきほのかにてらす三日月の空

たかまの尾花吹こすあき風にひもとまあへなたくならずとも

和泉式部

同

從二位家隆卿

同

聖信法師

同

四行上人

前中納言定家卿

同

大伴宿禰池主

文治二年百首

五行歌十五首四といふ事

高圓野にて作歌

建保三年名所百首

百首歌

家集ある法師にかはりて

家集秋歌心

久安百首

承安五年三月重家卿歌合

門妙社歌合薄戀

千五百番歌合列御歌

百首御歌

稻荷社歌合雨中草花

秋御歌中秋風

千五百番歌合

百首歌岡湯

建保三年名所百首

保安三年九月十三日關白家歌合庭露判者俊頼基俊

高圓の花を花あきかせたちにけりむら／＼まろきくもそふきしく

打なひき秋はきにけりはなす／＼きほさかの駒もいまやひくらん

はなす／＼きほさかのこまにあらね共人おちやすきをみなへし哉

みかりする片野のす／＼きまねけとも空とふ鷹はたかへりもせず

たちかへる人はかたの／＼花す／＼きなにとほに出て招くなるらん

花薄まねかさりせはくるひとのこゝろかた野のうらみせましや

あふことはさこそかた野にたてるとも忍ひてなひけしの／＼を薄

をかのへやなひく片野のしのす／＼きほむけの露も時をまちけり

す／＼きちる秋の野風のいかならんよるなくむしの聲をさむけき

薄の／＼みとりかす糸のはつを花なひくにつけてよるかたもなし

過て行人はつらしなはなす／＼きまねくまそてにあめはふりきて

秋篠のとやまのす／＼きほの／＼とあくる露よりおろすやまかせ

誰故に野となりはて／＼ふか草のさとのをはなにうつらなくらん

とまらしなねてのあさけの花薄をかのやかたにひとまねくとも

むさしのや月かけなからまくれけりを花かうへの露のまたまち

なみのよる野しまか崎のいとす／＼きみたれにけりなぬける白玉

從二位家隆卿

衣笠内大臣

前中納言匡房卿

同

上四門院兵衛

同

後鳥羽院御製

土御門院御製

同

建禮門院右京大夫

常辨井入道太政大臣

正三位季經卿

民部卿爲家

從三位範兼卿

同

にはもせに玉ときちらす白露のみたれてぬけるいとす／＼きかな

此歌出入後頼云いとす／＼きとよめる證歌を可進云々

あたしの／＼露ふきみたすあきかせにまねきもあへぬはな薄かな

あたしの／＼風にみたる／＼糸す／＼きくる人なきになにまねくらん

聞おきし名をあたしの／＼志の薄いつなれそめてまねくけしきそ

あらしふくたけのまかきのかれす／＼きそよ／＼さひし有明の月

うくつらきあきのさかの／＼花薄くさのたもともつゆやかはかぬ

たれかこんうきはさか野の花薄あきのさかりとひとまねくとも

あき萩のはなの／＼薄おのれのみほにいてすともいろは見えなん

あきはきはな野にまじる村薄くさのたまとそいろにいてゆく

秋はきはな野の／＼す／＼きほにはいてすわか戀わたるかくれ妻はも

風ふけは花野のす／＼きほにいて／＼露うちはらふそてかとそみる

やまとほきすゑの／＼はらの篠す／＼きほに出やらぬいさよひの月

かせわたるをはなかうれば布引の瀧よりあまるなみかとそみる

東路のなこそおのせきにおひなかなほひとまねく花す／＼きかな

いはしろの野なかにたてる村す／＼き松ふく風にむすほ／＼れつ／＼

夕くれは吹もさためぬ秋かせにまねくす／＼きのそてかへるみゆ

よみびとしらす

權大納言公實卿

前中納言定家卿

小侍

衣笠内大臣

民部卿爲家

同

同

同

よみ人しらす

修理大夫顯季卿

正三位知家

法親王澄覺

よみ人しらす

順徳院御製

信實朝臣

同

建保四年百首古來歌合

六帖題

北野社百首

秋歌中古來歌合

寄花歌

薄

野薄人家

家集題不知

天慶八年中宮七十賀御屏風

御集新除密

永久四年七月皇陸家歌合

薄

家集薄を

堀河院御時百首

花薄はむけのいとのかたよりにくるれば野へにあきかせそふく

從二位家隆卿

あきかせに露はみたれぬ花すゝきはむけの糸のぬきあへぬまで

衣笠内大臣

花すゝきはむけの糸をふくかせに玉の緒とけてつゆそこほる

同

わきもこあふさかやまのまの薄ほには出すもこひわたるかな

権中納言經平卿

あふさかの關のうへの花すゝきまねくや人をとむるなるらん

よみ人しらす

むらさきのひととすゝき萬代にむさし野にこそ思ふへらなれ

藤原教嗣朝臣

わたつうみのなききの岡の花薄まねきそよするおきつしらなみ

中納言兼輔卿

かせふけはなききのをかの花薄なひくやなみのよするなるらん

源信明朝臣

風吹はくるすのをの糸すゝきたよりにのみとなひくなりけり

後法性寺入道關白

すかるふすくるすの小野の糸薄まそほのいろにつゆやそむらん

意尊法師

花すゝきまそほの糸をくりかけてたえすも人をまねきつるかな

權中納言長方卿

口をへつゝいとゝますほの花薄たもとゆたけにひとまねくらし

俊頼朝臣

まろたへのますほのいとをくりさらしまかきにさほす花の薄

鳴長明

秋ふかき霜よりのちのきくの色をかねてますほの尾花にそみる

同

此三首歌伊勢記云ゆきつきつきてみれば(かしこを二見のうら云

云)さるほとなる板屋のをかしげにすみなせるにいろくの

せんさいともさかり過たれとよしある人のあたりと見えたり  
時雨なといふはかりにはあらてはれまなかりければいたつら  
にこもりわたるなくさめかてらせんさいなる花色くひとふ  
さつゝとりならへてみるつめてに三種のすゝきといふこと人  
の語りしをおもひいて心みによめると云々

建長八年百首歌合  
家集八年月前薄  
御集  
百首歌秋  
保安二年九月内大臣家歌  
野風

はなすゝきすそこのいとをよりかけてたまをまけぬく秋の白露  
はな薄月のひかりにまかはましふかきまそほのいろにそめすは  
夜もすからたかそよめくと思ひしはなひく尾花の音にそ有ける  
此歌秋の夜風の吹けるに御前なる薄のなるを聞召てと云々  
花薄すゝ葉をしまみふくかせにまたくさかろきつゆそちりける  
秋かせの尾花ふきまく夕されはのへにはゆきのふるかとそみる

此歌判者基俊云右歌をはなふきまくといへるふるき歌にもか  
くよみたらんをはなの歌また見侍らす下句に野へには雪のふ  
るとそみるといへるも春の花の風にもちるをこそ雪とそ見るな  
とよみ侍めれ秋のをはなのゆきとよみたるふるきうたこそえ  
見いて侍らねあしの花をそからの歌には雪によそへてつくり

衣笠内大臣  
四行上人  
花山院御製  
順徳院御製  
藤原爲眞

て侍りしと云々

建永元年和歌所三首歌合  
に朝草花

横雲のたなひく山のをかへなるすきも老ろくふくあらしかな

後鳥羽院御製

文應元年七社百首賀茂

河岸のつゝみになひくはなすきゆきしの袖にまかへてそみる

民部卿為家

千首歌種

秋の野のくさのたもともうつもれて招くもまらぬあさきりの空

同

三十首歌閑庭薄

まねくとて草の袂のかひもなしとはれぬさとのふるさまかきに

前中納言定家卿

或抄中

うちまめりすききのうれはおもりつゝ西ふく風になひくむら雨

同

文永五年九月十三夜歌合

たひ人の身にしむ野への秋かせにもとあらの薄つゆこほれつゝ

大納言資季卿

野草露繁

はなすきひとともこすのゝ名をまらてたれまねくらん秋の夕暮

大炊御門右大臣

久安百首薄

あはれなり門もなきいはのませのうちにこぬ人まねく薄ひと本

崇徳和尙

日吉社法樂御歌

一むらのこす系を宿のまへにてをばなわけゆく道のはるけき

光憲院入道二品のみこ

秋の心を大峰にて

うしとのみ人の心はいはれ野にまねくすきをなにしたのまむ

大僧正行尊

大治三年八月廣田社歌合

花すきあれにし物をなかをかの里をはかれすなまねくらん

民部卿為家

嘉祿三年百首故郷薄

うしとのみそよいはれのゝ花薄たもとのつゆはかはくまもなし

同

貞應三年百首述懐

露すかる草のたもとのあきのほをまのにおしなみわたる夕かせ

同

千首歌

まら鳥のとは山あらし吹なへにをはなかするはなみのまもなし

同

家集山中秋花

つくはねの嶺吹くたる秋かせにまつくのたわはをはなちるなり

光俊朝臣

家集薄を

筑波ねに、登りてみれば、尾花散、雫の露に、雁金も、寒く來鳴ぬ、

よみ人しらす

長歌

刈萱

文治十八年五社百首刈萱

はつ鷹のはつとやたしの秋風にまたきまをれぬのちのかるかや

皇太后宮大夫俊成卿

述懐百首

萩原やまけみにまじるかるかやのまたはか下にまをればはてぬる

同

文治二年百首

たつぬれば庭のかるかやあともなく人やふりにし荒はてにけり

前中納言定家卿

千五百番歌合

秋せかにおもひみたれてくやしきは君をならしの岡のかるかや

嘉陽門院越前

文永四年毎日一首中

みたれにしふるのゝ道のかるかやのなに故にかは人にとはれん

民部卿為家

家集秋歌中

秋風にほするなみよるかるかやのした葉にむしの聲みたるなり

四行上人

家集

をれかへる下のみたれに埋れてほにかすかなる野へのかるかや

信實朝臣

本院左大臣家前歌合刈萱

刈萱のほに出てものを言はねともあゆく草葉にあはれと思ふ

藤原成忠

百首歌かるかやまかきに

白露にいろかはりゆくかるかやのほに出て秋をあはれとそみる

藤原成忠

みたる

風ふけはまら葉計りそかるかやのまかきのうちの物と見えける

藤原成忠

家集

をの山や野風にまたゝかるかやのまとろにのみも亂れちるかな

前中納言匡房卿

思刈萱古來歌合

かち人のゆきゝの岡のかるかやはをれふすかたや道となるらん

藤原頼家

題不知

秋風に思ひみたれてくやしきはきみとならしのをかのかるかや

よみひとしらす

萩

家集ひくらしを  
 秋御歌  
 冷泉院少の宮と申ける時百首歌よつて奉りける中に  
 玉皇四  
 萩の葉に吹あき風をわすれつゝこひしきひとのくるかと思ふ  
 あさまたきなかはは露にかたふきてひとかたそよ風のまた萩  
 聞置しいく田のもりのあきかせも萩の葉よりや身にはまみけん  
 えにひたすなかはの月にこゑすみて萩ふく風のあきそかなしき  
 垣はなる萩のはつほのあき風はいてそよさら身にそまみける  
 みればかつうは葉にあまるまらつゆのちるをもむすふ軒の下萩  
 おきつなみあはれはいかにすみよしのまつ梢と萩のうはかせ  
 あきはそらさとはふしみのゆふまくれくもよりおろす萩の上風  
 ふるさとは風のすみかとなりはてゝひとやは拂ふ庭のをきはら  
 萩風の露ふさむすふあきの夜はひとりねさめのとこそさひしき  
 萩三  
 まらすけのまのゝはき原ゆくさくさ君こそみらめまのゝをき原  
 元  
 法性寺入道關白  
 重  
 參議爲家卿  
 皇太后宮大夫俊成卿  
 民部卿爲家  
 同  
 參議爲相卿  
 慈鎮和尙  
 同  
 後京極攝政  
 和泉式部  
 丸大夫

家集伊呂波四十七首  
 文治二年百首歌  
 後京極攝政家歌合宮城野  
 大治三年八月廣田社歌合  
 萩三  
 久安五年六月家成卿家歌  
 合戀  
 家集題を  
 水久二年太神宮禰宜歌合  
 萩  
 大享元年八月頼家朝臣越  
 中國名所歌合三島野  
 長承三年常盤井五番歌合  
 野草始  
 寶治二年百首歌萩風  
 六帖題  
 建保三年内大臣家百首夕  
 萩  
 光孝院入道二品親王家五  
 十首萩風  
 寶治二年百首歌萩風  
 千五百番歌合

むすふ露をき吹風のいうことにこゝろみたるゝまのゝはきはら  
 こほれぬるつゆをはそてにやとしおきて萩の葉むすふ秋の夕風  
 あきさぬるをきふく風のそよ更にまはしもためぬみやきのゝ露  
 あふことはかたのにまける萩のはの音をばたゆな秋は果つとも  
 篠すゝき忍ひかねてはいはれのゝをきの上葉のみたれあへかし  
 さをしかの聲そかなしき露むすふいはたのをのゝ萩のまたふし  
 秋きぬといはたのをのゝいはねともまぐるも萩のそよくなる哉  
 なにことをとふひの野へのあき風に萩の上葉のそよといふらん  
 みしまのゝ萩の上葉にふく風そあきのはしめのまるしなりける  
 いなみのをあさふみわたるかり人のかさのうはゝになひく萩原  
 夕くれの風にあらそふ萩の葉のすゑもとゝろにこゑをきこゆる  
 新六ノ六  
 ふきすくる葉風はさても萩はらやなほともすりの音のさひしさ  
 新拾遺雜上  
 のきちかきやまの下萩こゑたてゝゆふ日かくれにあき風そふく  
 壬二中  
 草も木もさそならし山かせにひとりまをれぬ萩のおとかな  
 つくゝとあきの日ななき山里にをきの葉すくる峯の木からし  
 けふもまた萩のすゑ葉をそらにみて露わけくらすむさしのゝ原  
 あさくらやきのまるとのたかとはあきをも名のる萩の上風  
 前中納言定家卿  
 同  
 同  
 法性寺入道關白家堀川  
 刑部卿頼輔  
 權中納言長方卿  
 よみひとしらす  
 同  
 同  
 藤原範綱  
 正三位知家卿  
 信實朝臣  
 從二位家隆卿  
 同  
 後九條内大臣  
 參議雅經卿  
 同

建保三年名所百首

正治二年百首

後九條内大臣家二十首月  
前秋

文治六年女御入内御屏風

家集秋風

都芳門院後香歌合

秋をよめる歌苑抄

顯不知歌苑抄

弘長元年百首秋

建長七年顯朝卿家續千首  
法蓮秋

家集

同野風

萩はらすもたわにおく露のかすまさりゆくたまかはの里  
 むらくものたえまのつきにかりなきてをきのはそよく有明の空  
 萩の葉も心つくしのこゑたてつあきはきにけるつきのまるへに  
 をきの葉もをれふしにけるまらつゆにやとりよわらぬ有明の月  
 まつ風をすその萩のつたへきてちとせの秋とやとにつくなる  
 あしかきはそこともまらすあはれてまぢかき萩に秋風そふく  
 萩の葉の風になみよるおときけはまくれし冬にたる夜半かな  
 わか袖はをきのうはの何なれやそよめくたひに露のこほる  
 おともせてまねくすゝきを哀なるなにそは萩のとはすかたりは  
 蘆邊なるをきの葉さやき秋風のふきくるなへにかりなきわたる  
 音そよくあしへの萩のそれとなく吹まかへたるわかのうちかせ  
 いかさまにきかもわかむなにはかたあしの中なる萩のうは風  
 つゆおつるあしたのはらのをきの葉も夕の風そ身にはまみける  
 すゑたわに野ちのまのはらなひけともなほこゑまるき萩の上風

藤原康光  
 源師光  
 前中納言定家卿  
 從二位家隆卿  
 皇太后宮大夫俊成卿  
 從二位家隆卿  
 右衛門督家通卿  
 皇太后宮大夫俊成卿  
 恩覺法師  
 よみひとしらす  
 從二位行家卿  
 光俊朝臣  
 右衛門督教定  
 隆祐朝臣

蘭

大尊會經紀方御屏風

堀川院御時百首

天德二年八月右大將家にて秋花露を思てちらすといふを

堀川院御時百首

天永二年七月内大臣家歌  
合草花

家集蘭を

長寛二年白河殿歌合草花

千五百番歌合

かまふの若むらさきのふちはかま千世の秋まで匂へとそ思ふ  
 秋ことにたれきて見よとふちはかまきぬかさ岡に匂ふなるらん  
 ほころひて花咲にけりふちはかまにはひをむすふ露にまかせて  
 そめかけてまかきにさほすふち袴またきも鳥のふみちらすかな  
 たつ田山麓にはほふふちはかまたかきてなれしうつりかそこは  
 たつ田山すそのに匂ふ藤はかまたまぬきかくるつゆやおくらん  
 きてみればおほえの山のあなたまでいくのともなき藤はかま哉  
 むさしの草のゆかりにふち袴わかむらさきにそめてにはへる  
 藤袴ねさめのとこにかをりけりゆめちはかりとおもひしものを  
 此歌判者俊成卿云すかたことはいひしりてきこゆ但是は本文  
 にやあらんそのかみ左傳と申ふみをうかひ侍りしにこそ鄭  
 文公之妾燕姬夢に蘭をえたることはみ侍しかされは眞韓詩に  
 も夢斷燕姬曉枕薰とつくれりこれらの心にやあらんと云々  
 ふち袴ゆめちはさこそかよひけれあふとみる夜のうつりかも哉  
 此歌判者云鄭文公之家にいやしき妻女有けり其の名を燕姬と  
 いふ夢に天使きたりて蘭をあたへていはく是を汝か子とせよ

前中納言匡房卿  
 權中納言師時卿  
 元輔  
 俊賴朝臣  
 大皇太后宮肥後  
 藤原宗國  
 源有仲  
 元景  
 登進法師  
 野宮左大臣



文治六年五社百首

といへり夢さめて後うめる子をふちはかまと名つくといへり  
此事をよまれたるにこそと云々願昭判之

皇太后宮大夫俊成卿

文應元年七社百首

ふちはかま草のまくらにむすふよは夢にもやかて匂ふなりけり  
ふちはかま咲ぬるときはむさしの若むらさきの色も見えけり

同

大治三年八月廣田社歌合  
關戀  
長治元年五月季廣朝臣歌合  
天仁二年十一月願季卿歌合

ふち袴にほふうてなもよそなりきあやなくふれしこけの袖には  
かすかの若むらさきのふちはかま草のゆかりも露そくたくる  
あふことはかたの野へのふち袴たれきてみよと露けかるらん  
みやき野やたつねて來つるふち袴志るくもにほふ夕まくれかな

民部卿爲家

百首歌

ふちはかまきる人あらは片岡のもすそたちえのはしのかりきぬ  
秋の霜にうつろひひけは藤はかまきてみる人もかれくにして

源仲房

文集前頭更有藤條物老菊  
衰蘭兩三歌

ふち袴はたおる蟲のをりたえてをみなへしにはきするなりけり  
ふちはかまきる人あらは片岡のもすそたちえのはしのかりきぬ

同

老菊衰蘭兩三歌  
家集

ふちはかま風のくたくむらさきに又まらさくのいろやならはん  
ふち袴はころひ渡るのへにこそぬはれてふせるうつらなくなれ

六條院寛旨

貞應三年百首關黨枕  
千五百番歌合  
三百首御歌

たひ人のいるのいはらのふち袴たかたまくらにまたにほふらん  
たれとたにいはたのをのふち袴おほめくからにほふ袖かな  
ふる郷のみかきかはらのふち袴たかぬきかけしかたみなるらん

同

中務のみな鎌倉

草香

承久四年百首草香

春よりはもえいてしかとくさのかうかはあき風にはほふ也けり  
秋の野の花わけ行はくさくの香うつりぬらんわかころもてに  
我袖にくさのかうつる秋の野のたひねのとはなつかしきかな  
ふちはかまにほふあたりはおひ出る草のかうのみめつらしき哉  
まら露のいかにそむれば草のかうおくだひことに色のさすらん

藤原忠房

源兼昌

二條太皇太后宮肥後

六條院大造

元真

家集草のかう

秋花

建長五年毎日一首中秋花

みれはかつあきかせさむく身にしみて花になり行庭のくさむら  
あき風のためくをしくみゆるかな庭のこくさの花のにしきは  
心せよちくさの花にあらしやまのわきにならほをれもそする  
はちすさく池のゆふかせなつあれとよし一花のあきのなてしこ  
秋の野の花のさかりはすきかてにみ草かりふくやとやからまし  
あさ露のたましく葛にかせすきてうらみそめたるあたしの原

民部卿爲家

同

同

前中納言定家卿

從一位良教卿

正三位季能卿

建長八年百首歌合  
建久元年和歌所三首歌合  
朝草花

正治三年百首

秋野花

わかかねしおなしみとりの夏草を花にあらはすあきのゆふくれ  
なつ野をおなしみとりに分しかとあきそおりつるな草の花  
あきの野にさきたる花を手を折てかきかそふれはな草のはな  
をとめらかたまもすそひく此庭にあきかせふきて花はちりつゝ

小侍 従

前大納言 隆房卿

山上 憶 真

よみびと しらす

實 顯 法師

前中納言 定家卿

信 實 朝 臣

正三位 知家卿

慈 鎮 和 尙

よみひと しらす

同

能 宣 朝 臣

同

後 頼 朝 臣

同

同

同

家集

家集

題不知

御集

六帖題

承安三年法輪寺歌合草花  
建保三年内裏十五首歌合  
秋花

いろ／＼の花にたはれてみちとほみいくの原に日をくらす哉  
たひころもひもとく花のいろ／＼もとほ里をのゝあたしあき霧  
野邊みれはくさのはつ花かた咲てち／＼にはあきの色そまたしき  
やちくさに心をとめてふるさとのたかうゑおきしあきの花をも  
むかしみしひとのなみたやつゆならん身をうち山のあきの夕暮  
かくれにはこひてまぬともみそのふのつきくさの花色に出めや  
秋附けはみ草の花のあへぬるに思ふと知すた／＼にあはすあれば  
秋の花さま／＼そむるたつた姫いろのあはひをいかてまけけん  
此歌は九月はかりに人々あまたまうてきてさけなとたうふる  
ついでにあはびを題にてよめると云々

山さとはすとかたけかきさきはやすはき女郎花こきませせてけり

此歌は隆源法師の大はらに人々まかりて遊ひけるにをみなへ  
しおもしろかりけるをみてよめると云々

法性寺入道白家百首草花

家集秋歌中

つゆくさのさきたりけるに風の吹たるをみてよめる

萩はらやするこす風のほに出てきたつゆよりもまのひかねける  
まけき野と成行庭のかやかしたにおのれみたる、虫のこゑ／＼  
すきねとやあなこゝし花もりのわかまかきにも秋は有らん

後京極 攝政

同

從二位 家 隆 卿

同

後 頼 朝 臣

四 行 上 人

常磐井入道 太政大臣

隆 源 法師

登 蓮 法師

同

題不知

寛喜元年女御入内御屏風  
野花盛開人尋之

堀川院御時百首

仁安二年八月經盛家歌合  
草

いかはかりあたにちるらんあき風のはけしき野への露くさの花  
うつりゆくことをはまらすことのはの名さへあたる露草の花  
かすか野やゆかりの草のたねまきて花さく秋をけふみつるかな  
ともかくも人にはての野へにきてちくさの花をひとりみる哉  
あきの野の花に心をそめしよりくさかやひめもあはれと思ふ

此歌判者清輔云右くさかやひめは日本紀に侍ことにや此紀に  
はいさなきのみこといさなみのみことみとのまきはひまて先  
國土出きてやまをうむ次諸國山川海をうむ草木をうむと侍る  
木のおやく／＼のちくさのおやかやのひめ也歌の心はたかはね  
とくさかやひめとつゝきたるおほつかなしかゝる事日本紀竟  
宴歌にも「としこと春やむかしのかやのひめ」とこそよめれ  
た、しかやうのことはたしかにみるところ有てこそよまれた  
るらんと云々

槿花

堀河院御時百首

山さとのまのゝあさとのひまをあらみあけてそみつる朝顔の花  
あさかほのはかなき花をいかにしてかしこき人の園にうゑけん

中納言國信卿  
陸源法師

文治六年五社百首槿花

浦風になみやおるらんよもすからおもひあかしのあさかほの花  
朝かほの露もやちよをへぬへきと山ちのぎくにうゑそへましを

修理大夫顯季卿  
皇太后宮大夫俊成卿  
土御門院御製

百首歌

色かへぬ竹のまかきのあさかほもおのれはあたの花にそ有ける  
朝かほの暮をまたぬもおなしことちとせの松にはてしなけれは

清輔朝臣  
僧部源信

久安百首無常歌

新抄遺哀傷  
榎のあたにはかなきいのちをはつとめてのみそまはしたもたん  
立まかふきりのまかきにむすほれまた露ほさぬあさかほの花

光明峰寺入道攝政  
入道前太政大臣  
民部卿爲家

百首歌

我やとにことしの秋もそめてけりみたひ花さくあさかほのはな  
あくる夜の空さきくもるむら雨にさかりひさしきあさかほの花

從二位家隆卿  
寂蓮法師

百首歌槿花

片岡の日かけまぐるゝまはの戸にまはしかゝれるあさかほの花  
有明の月はのこれる日かけにもまつかたふくはあさかほのはな

右近中將經家卿  
前大納言顯朝卿

建長八年百首歌合

此歌判者古歌彼槿花一日自成一榮なと云白居易の心をうつせ

山井

六二 山の井のそこあさかほの花なれば影をみしまにうつろひにけり  
六三 六帖丁 八家持伊勢集  
あさかほの野への朝かほおもかけにみえつゝ妹は忘れかねつも

よみ人まらす  
野恒他本伊勢歌

題不知

六二 六三  
こひしくはあしたのはらをいてゝみん又あさかほの花は咲やと  
明玉家  
まけけなきねくれたれ髪を見せしとやはたかくれたるけさの朝顔

源養父  
小野小町

六五  
ねくれたれのあさかほの花あさ霧におもかくれしてみせぬ君かな

よみひとしらす

秋野

久安百首

なにことも思ひすつれと秋は猶へのけしきのねたくもある哉  
うつつしうゑしみやこにも見しのへなれと朝立鹿の聲はなかりき

皇太后宮大夫俊成卿  
陸信朝臣

題不知

雁かねを聞つるなへにたかまとの野かみのくさそ色つきにける  
あきはきの、ちらへる野への、はつ尾花、かりほにふきて、く

よみ人しらす

同長歌

もはなれ、とほさくにへの、つゆまもの、さむき山へに、やと  
りをるらん、

同

建保三年名所百首

かり人の草わけころもほしもあへすあきのさかのゝよもの白露

順徳院御製

嘉元三年秋野百首

六帖題

あはれなと野原をかへるつはくらの秋のちくさを思ひすくらん  
野へにいへみれともあかす萩か花をはなくす花いまさかり也  
よしの山ふもとの野への秋のいろにわすれやまなん春の明ほの  
庭ふかさまかきの野へのむしのねを月とかせとのまたに聞かな

爲 實 卿  
光 俊 朝 臣  
後 京 極 攝 政  
同

夫木和歌抄卷第十一終

夫木和歌抄卷第十二

秋部三

題 鹿

雁

秋山

稻妻

稻負鳥

鹿

題不知

夕萬八されはをくらの山になく鹿のこよひはなかくすいねにけらしも  
ふ萬八なはりのあかひの山にふすしかの妻よふ聲をきくかともしき  
を萬廿みなへしあき萩しのきさをしかの露わけなかん高まとののそ  
此萬八の朝けにきけはあしひきの山をとよましさをしかなくも  
さ萬十をしかの心あひおもふ秋はきの時雨のふるにちらまくおしも  
山萬十とほき都にしあはさをしかの妻とふこゑはともしくあるかも  
秋萬一なれはいまもみることつまこひに鹿なく山そたかの原のうへ  
さ萬十四を鹿のふすや草むら見えすともころか金戸よ行かくしえしも

岳 本 天 王 御 製  
坂 上 耶 女  
中 納 言 家 持 卿  
同  
人  
丸  
よ み ひ と し ら す  
同  
同

家集をしきのおしてに  
あし引の山のとかけになくしかのこゑきつやも山田もらすこ

百首歌鹿

冬歌中

貫之家歌合

文治六年女御入内御屏風

天徳三年八月女房前親合歌まの山こゑ紅葉のかけに鹿なく

堀川院御時百首鹿

雁はきぬ萩は散ぬとさをしかのなくなるこゑもうらふれにけり  
あし引の山のとかけになくしかのこゑきつやも山田もらすこ  
六帖 萬八  
うたの野のあき萩まのきなく鹿も妻にこふらくわれにまさらし  
萬十二  
たかやまの峯ゆく鹿のともおほみ袖ふりこむをわすると思ふな  
萬代をかけていのれはさおしかのをおほの山におとのきこゆる  
まかのねのおとはの山におとせぬは妻にこよひやあふさかの關  
この葉よく風そいまはおとは山みねたちならずまかのねはうし  
御かりするくりこま山のまかよりも獨ぬる夜はかなしかりけり  
ねきことを神やうけひくかすか山あかきのおくのさをしかの聲  
春日山松のあらしにこゑそへてまかもちとせのあきとつくなり  
まかの山もみちのかけになくまかのこゑはふかくも成にける哉  
そまかたにみちやまとへるさを鹿の妻よふ聲のまけくもある哉  
ふた葉より朝たつまかはまからめとまのゝむらはき花咲にけり  
かこ山のはゝそか下にうちとけてかたぬくまかそ妻こひなせそ  
よもすからまつくの山にうらふれて妻を忍ふるさをしかのこゑ  
あしひきのみゝなし山になくしかはつき戀すれときく人はなし

同  
同  
人  
元  
寂  
參  
よ  
後  
後  
元  
樞  
大  
前  
修  
樞

久安百首

文治六年一社百首歌

承安三年七月左大臣家歌

建長二年八月鳥羽殿御會

當座二首御歌晚鹿

家集山

光養院入道二品親王家五

十首晚鹿

家集鹿を

門妙社歌合晚鹿

爲忠朝臣三川國名所歌合

保延元年八月家成補歌合

光養院入道二品親王家五

十首晚鹿

最勝四天王院名所御障子

四季百首御歌

百首御歌

よもすからまぢかね山になく鹿はおほろけにやは聲をたつらん  
さをしかのつまに今宵やははさらんまぢかね山のかひに啼なり  
たのめおきて妻やこさらんさを鹿のまぢかね山のおかつきの聲  
妻こひにあはてこの夜はあけぬとやまぢかね山に鹿のなくらん  
有明のそらたのめなるつまこふとまつちの山にをしかなくらん  
見えもせぬつまをこふとやあき霧のかくれの山に鹿のなくらん  
夜もすから月のひかりのもる山はふしとあらはに鹿そなくなる  
おのかつまもつれなくみゆるかきりとや有明の山にさを鹿の聲  
かへる山みねのあさえに風かけてをちのすそ野にすかる鳴なり  
衣手のやまのふもとにたつまかのうらさひしきはあかつきの聲  
いろ／＼のにしきとそみる萩の山まからむまかや秋はたつらん  
なにことを思ひみたれていかやま心ほそけにをしかなくらん  
ゆふつくよあかみやみのくらふ山木の下たとりしかやなくらん  
たつた山みねにはけしき木からしにたちまふ鹿のこゑの夕くれ  
あきのいろは木の葉のみかは立田山袖にまぐるゝさをしかの聲  
さをしかの立田のやまの紅葉やおのかなみたのいろとなるらん  
立田山みねのもみちは散はてあらしにのこゑさをしかのこゑ

俊  
實  
正  
後  
從  
三  
西  
如  
神  
藤  
高  
前  
後  
慈  
同  
同

御集紅葉

仁安二年八月經盛卿歌合

鹿

たつた山もみちのかけになくまかのこゑもまぐれて秋風そふく  
妻こふる秋にしなればさをしかのこの山とてうちもふされし

中務卿のみこ  
源右房朝臣

夜もすからいかなる鹿の妻こひてとこの山邊にいねすなくらん

中納言家成卿

此歌判者基頼云其妖艶不異荆幸入夢之人姿就中このまかのと  
この山にいねすなくらんも心詞ともにたくみにてきゝ所ある

心ちして侍ると云々

ゆめくらさまらぬ外山のしかの聲さむるまくらの雨にたくひて

前中納言定家卿

或抄中

家集たなかみと云所にて山田の方に鹿おとるかすなきて

鹿のこゑはるかに聞えり

さよふけて山田のひたの聲きけは鹿ならぬ身もおとろかれけり

後頼朝臣

おなじ所にて九月十三夜

妻こふる鹿のこゑにおとろけはかすかにも身のなりにける哉

同

四條皇太后宮歌合

いかにせんこよひの月につまこふる鹿のねをさへそへてきく哉

同

保延元年八月家成卿家歌合

この比はみふねの山に立まかの聲をほにあげて鳴かぬ日そなき

同

祇園社三百六十首

はゝきゝに妻や籠れるさをしかのそのはらになく聲そたえせぬ

爲忠朝臣

清輔朝臣家歌合扶桑

そのはらにありとはみゆるはゝきゝのあはぬ妻ゆる鹿や鳴らん

前參議雅有卿

經信卿家歌合

さをしかの聲しきるなりみよしのゝいさかた山に妻やこもれる

登壇法師

家集

うかれけん妻のゆかりにせの山の名をたつねてや鹿もなくらん

よみひとしらす

いはと山あくるもまらすなく鹿のをへのきりに妻やまとへる

源雅光朝臣

建長八年百首歌合

寶治二年百首

きよみかたなみによるなき月影のいる山のはもをしかなくなり  
あき風になみまはの野のよるゝに思ひそふとや鹿のなくらん

清定  
衣笠内大臣

家集

そのはらや伏屋に忍ぶさをしかもはゝきゝをさへ見えすとや鳴

後頼朝臣

障子繪にまふしといふこ

あさましやなみまはの野にたつ鹿のつめのわれのみぬる、袖哉

同

となしてししふえふく所

まふしさをさつをの笛の聲そともまらてや鹿のなきかはすらん

同

家集鹿

さをしかは命を妻にかへんとやさつをかふえになくゝもよる

源仲正

林鹿歌中

山へにはさつをのねらひおそろしとをしか鳴なり妻のめをほり

よみひとしらす

久安百首

まらすけやまの、かや原いちまるとあさたつ鹿の踏ならすらん

前大納言陸季卿

きてみればきぬかさ岡にたつしかのよをかかねても戀るつま哉

待賢門院安藝

あらし山はとふく秋のおとすれば聲をあはせてをしかなくなり

花園左大臣小大進

さらぬたに夕さひしき山さとのきりのまかきにをしかなくなり

待賢門院堀川

あらしふきまかきのはきにまかなきてさひしからぬは秋の山里

皇太后宮俊成卿

紅葉ふくあらしにつけてきこゆなりはやし奥のさをしかの聲

後京極攝政

露ふかきまかきの野へをかき分て我にやとふさをしかのこゑ

元

うりふ山もみちのかけになくしかの聲はふかくもきこえくる哉

萬

うりふ山あさたつまかのかりこもに露けきめをもみつるけさ哉

萬

とは山のをにたつまかの聲きゝてもてはなれてもぬる、袖かな

同

家集

或所にうりをやるとて

夫木和歌抄卷第十二 鹿

寛喜元年女御入内御屏風  
小野鹿立行客過く

家集秋歌中

御集秋關鹿

永久四年百首秋山

人を尋てみのにまかりた  
りけるに鹿の鳴ければ

堀河院御時百首

崇徳院御時御供花時御會  
鹿聲何方

文治六年五社百首

爲家百首

建仁元年老若五十首歌合

家集夜浦關鹿

三十首歌海邊鹿

同

建長三年毎日一首中

家集鹿を

后宮歌合

もみちはのこそめの山のくれなるにふり出にけりさをしかの聲

ひくまのに匂ふはき原いりみたれなくやをしかのあきの白つゆ

なにこともいはての關とまりなから思ひかねてや鹿はなくらん

をの山にあさたつまかも聲たて、秋のあはれはまのはさりけり

まかのねをきくにつけてもすむ人の心まらるゝをのゝやまさと

妻こふとこの山なるさをしかのひとりねをなく聲そきこゆる

なくしかは峯かふもとかとこの山たひのまくらに聲おくるなり

あきの野の鹿のまけみにふすまかのふかくも人にまのふ比かな

つねよりも袖こそぬるれすゑの松なみのまたにや鹿のなくらん

おのかつま浪こしつとやうらむらんすゑの松山をしかなくなり

よさのうみのうきねに通ふ鹿のねは浪よりけにそ袖はぬれける

やよいかにもしあけの松の風に又はるかにまかの聲おくるなり

秋の鹿の我身こすなみたちかへりつまをみぬめのうらみてそ鳴

うら風にさそはれいつる月かけをむかひの山のをしかなくなり

こよひわれあしやおきおきの月をみてまかのねさそふ風をそきく

鹿のねはをはな波浪になかれば袖しのうらのたまもとそなる

高砂のをのへのまかをゆくふねのうらかなしくや過かてにきく

從二位家隆卿

同

後九條内大臣

六條院大進

四行上人

中納言國信卿

皇太后宮大夫俊成

同

同

從二位家隆卿

嘉陽門院越前

皇太后宮大夫俊成卿

前中納言定家卿

隆信朝臣

民部卿爲家

源有仲

權大納言長家卿

永久四年七月雲居寺歌合

最勝四天王院名所御障子

仁安二年奈瓦歌合鹿判者  
俊成卿

和歌所影供歌合海邊夕原

文應元年七社百首

ひえの山へ上りて後寂蓮法師のものとつかはしける十首中

返し

五十首歌秋十五首中

千五百番歌合判御歌

十禪師社百首寺邊鹿

まかのねをおくるなから山風ないなはにきくやまかのさと人

まかのねをいなはの風につたへてもよをうらみたるまかの里人

いろかはるなからの山の山おろしにまかのねよする秋のさゝ波

まかのうらやきつゝもよほす山風にさひしくもあるか鹿の初聲

ゆきめぐりわかたつそまとなく鹿の人めはなれぬたにのした風

晴西上人

從二位家隆卿

參議雅經卿

覺稱法師

尊玄法師

勝覺法師

如願法師

後鳥羽院御製

民部卿爲家

慈鎮和尚

寂蓮法師

從二位家隆卿

後鳥羽院御製

隆祐朝臣

舟中聞鹿といふことを  
百首歌

おしてるやみつのほり江に船とめてつけの鹿のこゑをきく哉

淨 忍 法 師  
左近中將公衛卿

後九條内大臣家歌合

みなど川外山のきりになくしかの聲するかたにとまりさためん

樂 清 朝 臣

喜多院入道二品親王家五  
十首

月かけをおく霜かと思ふらんつけのまかのこゑのうらむる

源 師 光

保延元年八月家成卿歌合

おのか身にもおく夢や見えつらん心ほそけにまかのなくなる

源 忠 季

此歌判者神祇伯願仲卿云右まもおく夢こそ見ところ侍めれつけ

のまかのいめのあはせのまくなるは其ときの人ことわさに

なん申しけるをそれをまされたらは心ほそけに鳴んことわり

にそされともあまりみ、遠き事はいか侍へるらんと云々

秋くれはまめちか原にさきそむる萩のはつえにすかるなくなり

あふ事をいなひ野に住鹿こそはかりの人にはあはしといふなれ

雨そくいはれの野へのはきかえにひまなく露のすかるなく也

よをへついなみ野に立さをしかは何をかひよと鳴あかすらん

聲たてぬ背しなればはみしまえにふすさをしかの敷をきりぬる

山しな山のをのへにふすしかのあさふしかねて人にまらるゝ

心からあたしの野へにたつしかは妻さたまらぬねをやなくらん

いかなれば妹春の山にすむしかの又かさねてはつまをこふらん

後 頼 朝 臣  
體 人 不 知  
前大納言陸季卿  
藤 原 爲 眞  
よみ人しらす  
同  
源 雅 光 朝 臣  
清 輔 朝 臣

家集深山聞鹿

秋歌中

題不知

越中國名所合三島

天喜元年八月相家朝延家

合鹿

保延元年八月家成卿歌合

雜野

原上鹿といふことを

正治二年百首

秋歌中

家集深山聞鹿

弘長元年中務卿親王家百  
首

同家歌合鹿

文應元年七社百首

正治百首

安元二年歌合鹿判者俊成  
卿

曉鹿といふことを

家集白川にて鹿をきいて

家集秋歌中

家集いなりによつて、御まへなるほとにしかのなけは

家集秋歌中

秋歌中原鹿

大治二年八月廣田社歌合

家集鹿歌中

名所歌高瀬山秋

はきこえていろなる波にさをしかのまからみかくる野路の玉河  
春日野のとふひかくれにあきはきの花踏ちらしまかはなくなり  
かすかなるとふひの野邊に立鹿も今いくよとかつまをこふらん  
更ゆけはまかにひとよのやとかりて月をかたしくをの草ふし  
むら雨やふるから小野のものとかしは秋風さわきをしかなくなり  
夜を残すねさめに聞そあはれなる夢のまかもかくやなくらん  
憂世には山の彼方もゆかしきにまかのねなからいやはねらるゝ  
新拾雜上  
人まれすをきのまたなるさをしかもほに出る秋やねには立らん  
思ふこと鹿たになくはいとしく高きみ山のかひよとおもはん  
いなり山すきの庵のあけほのにまよりかよふさをしかのこゑ  
をしほ山こまつか原になくしかはちよに一夜の身をやかふらん  
雲かゝるたかしの山のあけくれにつまよとはせるをしか鳴なり  
たかし山松のこすゑにふくかせの身にしむ時そまもなくなる  
たかし山ゆふ波むかふ壙かせにかはりてきたるさをしかのこゑ  
たかせ山すそのまはしは片よりにまかのねこゆるみねのあき風  
さとほみさく人なしにさをしかの聲はたかしの山のあきかせ

權 僧 正 公 朝  
同  
民 部 卿 爲 家  
喜多院入道二品のみこ  
智 海 法 師  
四 行 上 人  
實 方 朝 臣  
中  
和 泉 式 部  
從 二 位 家 隆 卿  
同  
源 仲 正  
增 基 法 師  
參 議 爲 相 卿  
從 三 位 爲 實 卿  
藤 原 爲 顯



布引百首御歌

家集

千五百番歌合

建保四年前内大臣家名所  
秋歌

文永七年十首歌合道鹿

建保三年名所百首

なきわひてさそふ水とやぬの引の瀧におちそふさをしかのこる  
つまこひやわりなかるらん聲たてゝ忍ひのをかにをしかなく也  
あきくればまのふの山になくしかも人にまらぬ妻やとふらん  
おもひあまる心の程もきこゆなりまのふのやまのさをしかの聲  
初瀬山ゆつきかもとになくしかのつまもかくさすてらす月かけ  
まかのねそふしみのくれにかよふなる嵐ふくらしをはつせの山  
はつせ山この葉いろつく秋風にまついねかてのさをしかのこる  
いらかへぬときはの森のまた露にぬれて秋しるさをしかのこる  
まかのねもいかてときはの杜の露いろに出へきかせのおとかは  
あきはさそ吹ないふきの山風になれすかほにもまかのわふらん  
夕されはあきのさかのまかのねに山もとふかく露そこほるゝ  
をしかなくこの山さとのさかなればかなしかりける秋の夕くれ  
いにしへのみゆきの跡を尋ねきてさか野のはらにまかそ鳴なる  
ときは山あきをまのひてひとり行袖のいろよりまかやなくらん  
つたへみる山はあらしの吾宿となれてもあかぬさをしかのこる  
嵐山あらしにつけてきこゆなりならひのをかのさをしかのこる  
夜もすからならひの岡になくしかはかつ見る妻をかくや戀らん

法親王澄覺  
刑部卿範兼  
平政村朝臣  
寂蓮法師  
從二位家隆卿  
中務卿のみこ  
正三位知家卿  
兵衛内侍  
藤原康光  
從三位行能卿  
從三位範定卿  
藤原基俊  
岡屋入道前攝政  
後鳥羽院御製  
龜山院御製  
後嵯峨院御製  
從二位行家卿

嵯峨にまかりて鹿を開て  
歌苑抄  
建長六年龜山殿五十首歌  
野鹿  
元久元年詩歌合山路秋行  
喜元二年百首御歌鹿  
文永七年七月白川夏七百  
首遙聞鹿  
柿本影供百首

弘長元年百首鹿  
承安三年七月右大臣家歌  
合鹿  
保安三年八月家成卿家歌  
合鹿

白露をならしのをかのさねかつら分けくるまかやなみたそふ覽  
あけくれにきりふの岡に立しかはつまの行へも見えずとやなく  
み狩するをむらの嶽にすむしかは打とけかたきねをやなくらん  
此歌判者神祇伯頭仲卿云左をむらのたけきにくゝこそほかに  
ても侍ぬへけれとこの山につねにかりをするとしのたゆる事  
なきによりうちとけかたきかみかりするとはかたのゝみのゝ  
かりはのをのゝなとたかゝりにきゝなすたる侍れともくりこ  
ま山のまかよりもといふことにつきてよめるにやと云々  
秋もはやすゑのはら野になくしかの聲きく時そたひはかなしき  
尾花葺いほりに露やまけからしうちのみやこにさをしかのなく  
みかの原くにのみやこの山こえてむかしやとほきをしかの聲  
みよしのゝみかきかはらの秋風にふるさとさひしさをしかの聲  
里ふりて秋の野らともなるならはみかきか原にまかやなくらん  
すみよしのまきつのうらの夕されはまかのねわたすむこの山風  
ふるさとの庭のあるしと成にけりのこりしのへのさをかのの聲  
宮木ひくいつみの袖になくしかはやむ時もなくつまやこふらん  
かみなひのもりによをへてなくしかは過行あきを惜みとめなん

後九條内大臣  
清輔朝臣  
神祇伯頭仲卿  
鎌倉右大臣  
光明峰寺入道攝政  
前中納言定家卿  
大藏卿有家  
慈鎮和尚  
右近中将具氏卿  
よみひとしらす

家集神なひ山のほとりに  
建保三年内裏十五首歌合  
秋鹿

われならぬ神なひ山の正木もてつましくまかもねこそなきけれ  
みむろ山またくさかけてなくしかの聲よりまげきあかつきの露

増基法師  
順徳院御製

中務卿親王家五十首歌合  
三十六人歌

まのひわひ思ひやかくる神なひのみむろの山にまかそなくなる  
むかしみしむわのひはらや秋くれて峰にをしかの聲おくるなり

從二位家隆卿  
大納言通具卿

家集曉鹿の心を  
願仲卿すめける住吉社  
歌合鹿鹿

三輪の山杉間も秋のまるしにてまかもかくれぬつまやこふらん  
三輪の山すきの青葉はときはにてあきのまるしにまかそ鳴なる

覺盛法師  
源有仲

後鳥羽院熊野詣けるに  
六百番歌合

白露のおきわてきけはさほ山はあかつきかけてをしかなくなり  
人はこす秋はいなほの山かせにけふもくれぬとまかそなくなる

源規房  
大納言通具卿

久安百首  
文治六年女御入内御屏風  
坂勝四天王院名所御障子

紅葉ちることやわひしきみくまの山のあらしに鹿そなくなる  
雨ふれはかさとり山のまかのねはなかくよはの袖ぬらしけり

慈銀和尚  
正三位季經卿

さをしかも獨ふしみのさにては物さひしとやなきあかすらん  
さをしかの萩か花妻まからみてふしみの野へをよかれさりけり

大炊御門左大臣  
正三位季經卿

ふしみ山つまとふしかのなみたをやかりほのいほの萩の上の露  
をしかなくとこの月かけゆめたえてひとりふしみの秋のやま風

前中納言定家卿  
如願法師

ひとよふす伏見の里の岡へなるわさ田もかりにまかそなくなる  
まかのねにねさめをあきの松の風ふしみのさにと露やちさりし

後久我太政大臣  
如願法師

建仁元年老若五十首歌合  
建長二年内裏詩歌合水痴  
秋な

みやき野のうつろふ萩にあし引の山たちならしまかそなくなる  
さとはあれてまかそなくなるすか原やふしみの野への秋の夕暮

如願法師  
從二位家隆卿

建長四年天王院名所御障子  
ふちのなの社歌合  
建長二年仙洞詩歌合山中  
秋別

みなせ川この葉さやけさまつ風にまかの音めらふきりのした水  
秋のよをふかくさ山にすむしかは露にのみこそぬれわたるらめ

慈銀和尚  
後久我太政大臣

あらしをのいるさの山にたつまかは忍ひこるにやつまを戀らん  
明玉

深草やふりにし里のあれしよりいまはのに出てまかそなくなる  
まらまゆみいるさの山の夕きりに立かくれてやまかのなくらん

少將内侍  
土御門院小宰相

秋霧の上ゆくまかのこゝにのみうきてやふしのねをはなくらん  
妻こひはおのれもならぬ思ひとやふしのすそ野にまかの鳴らん

ふしのねのすそをかけてなく鹿のこゑもあらしにうき嶋か原  
せきのとのゆふつけ鳥はつれなくてまかのねあくる足からの山

光俊朝臣  
後九條内大臣

建長八年百首歌合  
名所歌中

あしからの山路のあらしよをさむみまかのねもろきたけの下露  
つゆはらふつたのまたふしゆめ絶てまかのねちかきうつの山風

同  
同

鹿のねもいろそふばかりうつつをやまたもみちこきつたの中道 爲 實

みちのくにいくたりけるとさやの中山にとまりて待けるに鹿の鳴けれは

明玉 風秋上

たひねするさよの中山さよなかにまかも鳴なりつまやこひしき

名所歌中

おなしくはまかなくかたにみちも説あきしもこゆるさよの中山

月ふけてなくやをしかのこゑすなりたれもねさめのさよの中山

やたの、や露まもさむくなるなへにあさち色つきをしかなく也

かり人のやたの、原になくしかもあさち色つくあきやかなしき

やたの、のあさちいろつく秋かせをわか身にまめて鹿も鳴なり

萬元年年三十首

あさかりのみち見すおおくひまをなみと山のはらに鹿も鳴なる

秋歌中桑門

むさしの、よはのくさふしあけぬれと歸る山なきさをしかの聲

光明峰寺入道攝政家三首

武藏の、まの、をふ、き寒きよにつまもこもらぬ牡鹿なくなり

建保三年内大臣家百首

むさしのやまからむくさの葉末よりまかのねちかく出る月かけ

百首歌中

あきはきはなの、露の有明にあたらよとてやまかのなくらん

御集野鹿

つま、つとをしかなくなりあふことのかたの、みの、秋の夕暮

光明峰寺入道攝政家七首

秋風のためにし日よりも、ふのやそうちやまにまかも鳴なり

秋歌中

秋ことにきけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

文應元年七社百首

すみわたるよをうち山の朝ほらけなほ思ひいるまかそなくなる

内裏御會秋十首歌

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

實治二年八月四條宮歌合

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

光孝院入道二品親王家五

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

十首鹿

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

文安百首

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

後鳥羽院名所歌首

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

百首

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

最勝四天王院名所御障子

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

阿立原

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

家集歌中

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

百首歌

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

鹿聲何方といふことを

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

嘉禎十首歌合夜鹿

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

柿本影供百首

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

實治二年百首夜鹿

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

弘長四年毎二一首中

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

題をさくりによみける歌

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

山鹿

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

建長七年顯朝卿家十首歌

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

杜鹿

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

家集杜鹿

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

最勝四天王院名所御障子

秋こときけともあかぬうちやまのをへのしかのよはの一聲

あたち野の尾花隠にはのみゆるまらけやまかのまるしなるらん  
安達の、秋風そよくむらす、きうきものとしてやまかのなくらん  
をしかなくあたちの原は紅葉して色もかはらぬたけくまのまつ  
かり人のあたちのまゆみ末たわによるやをしかの秋のみみちは  
時雨行空こそあらめさをしかのかつけのほしもかつくもりつ、  
あらしふくならの葉分につたひきて袖にまぐる、さをしかの聲  
山里は秋のねさめそあはれなるそこともまらぬまかのひとこゑ  
久かたのかつらのかけになく鹿はひかりをかけて聲そさやけき  
おのかすむ峰のこからしさむき夜は鹿も紅葉のころもきるらし  
うらもなき紅葉の衣たつたやまよるなくまかはゆめやみさらん  
さ夜すからこひのつまとふさを鹿の野はらの風に聲まよふなり  
をくら山みねのもみちはなくしかのなみたにそめて色に出らし  
一つれはすそのに出てをくら山みねにもこのるさをしかのこゑ  
我爲にあはての杜のまつくかはつまとふまかのたちぬれてなく  
おく露や涙なるらんさをしかのつまとふよはのころもてのもり  
秋にふく生田のもりのまた風にたれすむとかはまかのとふらん  
秋ふかき心のいろもまくれつ、いくたのもりのさをしかのこゑ

前参議親房卿 如願法師 寂蓮法師 従二位家隆卿 同 同 後白河院御製 後鳥羽院御製 後九條内大臣 俊成卿女 民部卿爲家 参議爲相卿 土御門小宰相 同 大藏卿有家 具親朝臣

百首御歌

たつねつゝ生田のもりにやとへはまかのねなからあき風ぞ吹

從二位家隆卿  
土御門院御製

應徳三年通宗朝臣家歌合  
永久四年七月忠隆家歌合  
女郎花

水くきのをかのむらばきうちなひきまかのねなからあき風ぞ吹  
みやまたにあかつきかけてなくしかの聲する方に月をかたふく  
まくつはふあたのおほのになくしかもひとつうらみの秋の夕暮  
すかるなくあたの大野をきてみればいまそ萩原にしきおりける  
をしかなくあたのおほのに女郎花うたても今宵つゆふしにけり  
風わたるあたのおほのゝ葛かつら長きうらみにまかそなくなる  
草も木もなみたにそめてつまかくすやのゝ神山まかそなくなる  
つまかくすやのゝ神山たちまよひゆふへの霧にまかそなくなる  
月みてもなくさめかねてなくしかのこゑすみのほるおは捨の山  
さらしなや月ふくあらし夢にたにまたみぬ山にまかそなくなる  
時雨の雨間なくしふればすかるなくまつはた山もにしき也けり  
つくはねのそかひに立るさをしかの妻ふく風にこゑもおよはす  
さをしかのつのみ初しあしほ山ほにいてなく秋はききにけり  
つくは山みねたちかくす秋霧のまたにかよひてまかやなくらん  
ゆふつくひ暮行まゝになきまざるあきのをしかのつまこひの山  
つまこひにまかはなくならからころもすそまのやまの秋の夕暮

千首歌

水無瀬御會秋歌中

從二位家隆卿  
後嵯峨院御製

月前鹿

最勝四天王院名所御障子

如願法師  
權大納言公實卿

秋歌中

百首御歌

從二位家隆卿  
中務卿のみこ鎌倉

爲家卿家百首

三百首御歌中

衣笠内大臣  
權大納言經平卿

建保三年九月十三夜十首  
歌合群山鹿

秋ふかく山のまつくのゆふこりに鳴やをしかのいかまつけき  
日くるれば行人見えぬまからきのとやまにいつるさをしかの聲  
夕霧にまかきの山やこれならんつまをへたてまかそなくなる  
ゆふきりにまかきの山に妻こめて猶たちとまるさをしかのこゑ  
月くさのはなたのおひのゆふは山絶ぬるつまをまかやこふらん  
ゆふは山けふこゑくればたひころもすそまの風にをしか鳴なり

正三位知家卿  
陸祐朝臣  
從一位良教卿  
參議爲相卿  
中務卿のみこ鎌倉  
入道前大政大臣

暮山閑鹿といふことを

仙洞三十首御歌

慈鎮和尚  
寂蓮法師

文治のころひえの山より寂蓮法師のもとつかはしける十首中

返し

さく袖の露のふかさもある物をねやまのすそそのさをしかのこゑ  
をしかなく同じねやまの裾なれときわく袖をつゆもおきそふ  
秋の野をねやまのすそに分なして袖にかたしくさをしかのこゑ  
いかなればあふ坂山にふすまかのなほつまこひのねをや鳴らん  
あふさかのすさまの紅葉いろ見えてうつろふ秋にまかそなくなる  
明玉  
奈良山を夕越くればふるさとのとふひのへにまかそなくなる  
幾秋かつれなきつまをうねのへにあふみちをらてまかの鳴らん  
石問  
あき風や身にさむからしから衣たつたのやまにまかそなくなる  
日のくれに岩田のをのゆきしかはさを鹿なきつ妻をこふらん  
石問  
柞はらいろつきぬらし山しろのいわたのをのにまかそなくなる

同  
よみひとしらす  
法印慈忠  
法印尊海  
從三位忠兼卿  
藤原基廣  
從二位行家卿  
惟宗忠景

家集鹿

永承八年五月中納言基兼  
卿三井寺歌合鹿

從三位忠兼卿  
藤原基廣

前大僧正源基隆千拾相  
坂秋

野徑鹿古來歌合

從三位忠兼卿  
藤原基廣

秋歌

弘長元年百首鹿

從三位忠兼卿  
藤原基廣

題不知

題不知

從三位忠兼卿  
藤原基廣

五十首御歌  
七百首歌鹿

はつ霜のふるのわたの刈もあへす胸わけにゆくさをしかの聲  
石上ふるのやま田になくしかはおのれほにいて、妻をこふらし

光明峰寺入道攝政  
權僧正公朝

北野社百首御歌

さをしかのふえふく峰の追風に去のふもみちすり露をみたる、  
あはれとやねらふさつをもおもふらんをしかつまとふ秋の夕暮

後鳥羽院御製  
實清朝臣

建長八年百首歌合

ふりまさる谷のかけみち苦たえて通ふをしかのあとあれにけり  
あさみちのふる道わけてなくしかはたちわかれにし人や戀しき

右近中将經家卿  
よみひとしらす

保延元年八月家成卿家歌合

ゆふきりにたてるそほつや見えさらん山田のそひにをしか鳴也  
いかはかりくまなき秋の月なればふたけのまかの星もみゆらん

源仲正  
觀意法師

承安二年七月有大臣家歌合

身をつめはあはれとそきく夜もすからたすむしかの曉のこゑ  
山風にまをる、野邊の草むらのねやさむしとやまかのなくらん

源行頼  
源師光

百首歌

さをしかのゆめにもつまに逢んとやまからみかへす秋の下ふし  
まかのねをかきねにこめてきくのみか月もすみけり秋のやま里

寂蓮法師  
西行上人

正治二年百首

草かくれ庭になれくるまかのねに人めまれなるほとをまるかな  
月かけのさえゆくまにおく霜を思ひもあへすまかやなくらん

喜多院入道二品のみこ  
登蓮法師

仁安二年八月經盛家歌合

此歌判者清輔朝臣云右聖山の鐘の心にやそれは霜降時自鳴と  
かや申めりされは秋月似夜霜云詩にも欲和聖嶺鐘聲否と

そつくられたるこれはわか月光をまもとみてかねはまもに和  
してこそなれ心なき物なれば霜を見てなかむとちふにはあ  
らしと云々

鴈

秋雁

おし<sup>萬十</sup>てるや難波堀江のあしへにはかりねたるかも霜のふれるに  
けさのあさけかりかねなきつ春山もみちにけらし我心いたし

よみひとしらす

待雁といふを

うねひ山みねのこすゑも色つきてまてとおとせぬかりかねの聲  
久方のあまくもおかす雲かくれなきそゆくなるわさ田かりかね

大宰大貳高遠卿  
中納言家持卿

千五百番歌合

かせふけは雲はのこらぬ山のはにつききをよこさるはつかりの聲  
この秋のにひ玉章のことつてもいまこそあれとかりはきにけり

從二位保季卿  
信實朝臣

寶治二年百首初雁

はつ雁のとはたのくれのあき風におのれとうすきやまのはの雲  
をしねほすふしみのくるにゐる雁の遠さかりゆくあけほの空

後鳥羽院御製  
同

最勝四天王院名所御障子

松風の秋にはいとたえく<sup>萬代</sup>にふしみのゆめのきゆるかりかね  
たひ衣ひもゆふかけてあしからはこ根とひこえ雁そなくなる

俊成卿女  
光明峰寺入道攝政

貞應二年名所百首

たちかへりいまやいなはのやま風もまつにおとする初かりの聲

民部卿為家



御歌中

千五百番歌合

正治二年百首

仙洞宮座御會月前雁

百首御歌

和歌所影供歌合江月間雁

百首歌

後京極攝政家歌合須磨關

秋 建保三年名所百首歌めし

けるとき

大江山すそわの小田にゐるかりのはたれの霜のあとそきえゆく

はつかりはこし路の雪を分すきてみやこのさりにいまそ鳴なる

とこよいてしたひの衣や初かりのつはさにかゝるみねのしら雲

雁かねもくもの衣をいとひけりおのかはかせにすめる夜のつき

露は野へわか夕くれの袖をまたかりのなみたのそめてすきぬる

月にふくまのうら風さむからし入江におつるころもかりかね

ほとゝきすこゑも絶にし雲路よりあはれにしくる秋のかりかね

波にゐるくもにはつかりおとつれてすまの關屋にあきかせそ吹

たよりあらはみやこへつけよかりかねにけふそ越つる白川の關

すまの浦蟹のとわたるかりかねもこゑすみのほるいさよひの月

かきつらねとふかりかねの涙とやいろまさりゆく水くきのをか

みつくきのをかこのすゑになくかりの涙まかへてむら雨そふる

かりかねの聲は雲むにたかまとの野邊のこはきになみた散けり

涙にもいろこそみえねはつかりのいこまの山はきりかくれつゝ

新後拾秋上 たか方によるなくかりのねにたてゝ涙うつろふむさしのはら

武藏のに旅ねする夜のさひしきにたのむのかりの聲そうれしき

かりかねのかきつらねたるたまつさは淺緑なるそらのいろかみ

四國寺入道太政大臣

第三のきこ惟

後京極攝政

同

悲 録 和 尙

同

如 願 法 師

從二位家隆卿

同

順德院御製

同

從二位家隆卿

正三位知家卿

兵衛内侍

藤原康光

前中納言定家卿

源 定 信

三條入道左大臣

家集雁をきいて

大井川行幸に旅雁雲にま

かひてたまつさとみゆ

家集

文應元年七社百首

百首歌雪間初雁

文治六年五社百首雁

文應元年七社百首石清水

春日

百首歌鳥五十首中

建長八年百首歌合

弘長元年百首

建保四年内裏歌合

最勝四天王院名所御障子

めつらしや朝霧かくれきこゆ也そとものをたのはつかりのこゑ

さ夜ふけてうらにからろの音す也天のと渡るかりにやあるらん

大そらにうちむれてとふかりかねは緑のかみのふみかそみる

とふかとそ緑の紙にひまもなくかきつらねたるかりかねをきく

かけてとふたかたまつさと去らすらんかりの翅の雲のうはかき

はつかりのかく玉つさをまきよせてほのかにみするむら雲の空

もろこしのなみちや過しあきの雁雲むにきてもからうおすなり

はつかりはみとりの紙のたまつさをかきつらねたる秋の空かな

みゆきするとき近からし神山ははつかりなきていろつきにけり

いろかはるこの葉をみればさは山の朝霧かくれかりはきにけり

ものふのやたのあさち風さわき雲にみたる、秋のかりかね

大井川くたすいかたしこゝろせよ群ゐるかりもたちさわくなり

つくはねや秋かせさむみたひ衣すそわのたゐにかりそなくなる

峯こえの山のこなたにくるかりはこしはなれたる聲そきこゆる

ふりくると思ふにつけてさひしきは雁のなみたのあきのむら雨

こしちより秋を急かぬかりかねは初もみち葉のをりにあふらし

はつかりも雲むにいまそなきたるはまなのはしの秋きりの空

源 師 光

前中納言通房卿

花山院御製

和 泉 式 部

民部卿爲家

家 蓮 法 師

皇太后宮大夫俊成卿

同

民部卿爲家

同

藤 原 爲 顯

右近中將經家卿

前大納言顯朝卿

信 實 朝 臣

同

參 議 雅 經 卿

俊 成 卿 女

雲葉

貞應百首御歌

貞應元年八月三日歌合

五十首御歌

建保三年秋十五首歌合秋

土御門内大臣家二十首

元久比仙洞にて當座歌合

將多院入道二品親王家五

十五番歌合

秋歌中初雁

文治六年五社百首

六帖題

百首御歌

君臣御歌合

六帖題はた

式部卿親王家和歌所歌

海路雁といふを

秋歌中

建長七年顯朝卿家續千首

雁過海

千首

六帖題

百首歌

七首歌雁

住吉社歌合旅題

文應二年毎日一首中

正嘉三年毎日一首中

文應元年毎日一首中

永仁二年内裏歌合

はつせにまうてけるとき

三輪山のほとりにて

はつ雁の聲のゆくへもまらなみのはまなのはしのきりの明ほの  
 かりかねも雲のとたえやうらむらんはまなのはしのあきの夕暮  
 月かけにあまとふかりのかすみえて斜にたてるさのふなはし  
 かすみゆるかりのはたれの霜のうへに月さえわたる天のはし立  
 ゆくかりの霜のふりはに月さえて渡しかはせるかさゝきのはし  
 この比のかりのなみたのはつしほにいろわきそむるみねの松風  
 雁かねの空ゆくはねにおくしものさむき夜ころに時雨さへふる  
 去はしくもる有明の月のむら雨に山とふかりもともうらむなり  
 あき風やまらへなるらんかりかねのことちをたてゝ鳴わたる哉  
 たまつさのかきあわせたるまらへかな雁のことちにみねの松風  
 いかにせんふしみのさとの有明にたのむのかりの月になくなる  
 玉葉秋  
 あはれなるみやまのいほのねさめかないなほの風に初かりの聲  
 をしねほす田面に來居て旅のかりおのかとこよの物かたりせよ  
 新六六  
 背面なるをたにおりゐるかりかねの羽音きこえていまそ立なる  
 山本のはつたかりかねきなくなりいほもる賤もなみたおつらし  
 玉葉秋  
 また葉ちる柳の木すゑうちなひきあきかせたかしはつかりの聲  
 夕日うつる柳かすゑの秋かせにそなたのかりのこゑもさひしき

參議 雅經 經 卿  
 具一親 朝 臣  
 光明峰寺入道攝政  
 同  
 同  
 前中納言定家卿  
 同  
 從二位家隆卿  
 源 師 光  
 慈 鎮 和 尙  
 後京極攝政  
 二條院攝政  
 皇太后宮大夫俊成卿  
 衣笠内大臣  
 後光明峰寺攝政  
 中務卿のみこ  
 前中納言爲兼卿

くれはとりあやに畏しこくおる機越路の雁のつらをしける  
 かりかねのとほよるつはさ雲きえてむらさめこゆる秋の山もと  
 ひさかたやあまの苦屋にさぬるよは浦かせさむみ雁なきわたる  
 かりかねも友まとはせりまからきの松のそま山きりたてららし  
 水くきのをかの港にとふかりをよみはたらかすふみかそそみる  
 天の川とわたるかりのなみたとやもみちのはしも色にいつらん  
 新六六  
 ひさかたの雲のかりの越路より始めてくるやはつきなるらん  
 いつみかは柞もいまたもみちぬにこま山こえてかりはきにけり  
 こしの海やまなのゝはまの秋風に木曾のあさきぬかりそ鳴なる  
 たまたれのこすのおほの秋風にうかれ出てやかりのなくらん  
 もの思ふ身をはつかりのそらにのみなきてふけぬるさよの中山  
 ひろさはやあさけさむけき池水に霧たちこめてかりそなくなる  
 あさはらけたまものところをたちわかれ雁そなくなる廣さはの池  
 なきわたる雲の雁のをとこ山いまや木すゑのいろかはるらん  
 夕つくよいらぬさきとやかりかねの小倉の山のかけになくなる  
 月まつむ山のはかけをゆくかりのつはさにうすきあかつきの空  
 新六六  
 をしねほす三輪の山田にかりなきてゆふ日まくるゝすきの村立

權僧正公朝  
 參議爲相卿  
 源 季 廣  
 藤倉右大臣  
 信實朝臣  
 民部卿爲家  
 同  
 光 俊 朝 臣  
 同  
 權僧正公朝  
 從三位行能卿  
 民部卿爲家  
 同  
 同  
 參議爲相卿  
 前大僧正道慶



細川院御歌百首

あまのとのあくるほととぎすはまたぬ哉急きやすらん旅のかりかね  
雲かゝるあらしの山をかりかねの霧にまとはていかに来つらん  
雁かねもはねををらん眞菅生るいなさ細江にあまつみせよ  
秋の田の北斗もかりのみゆるかなたれ大そらにかきちらすらん  
いくかにか初かりかねの渡るらんはね打たみやすむよもなく  
雲のよりくるはつ雁のいつの間にかたの浦にならひるらん  
打むれてとわたるがりの羽風にはあまの川なみさわくらめかも  
くるかりのよはのはおとに驚きて野への玉とおきぬぬるかな  
くもりなきおほ海原をとふかりのかけさへまるとれる月かけ  
まかまつにかりのこゑこそ聞ゆなれいほの隣につるやなくらん

三百六十首中

宋集

連歌まかまつにてかりな  
聞て

秋田

建長五年毎日一首中  
文永十一年毎日一首中  
建保四年内裏十首歌合

風わたる野田の初穂のうちなひきそよくにつけて秋そまらるゝ  
昨日こそ神田の早苗いそきしか今朝にひものゝみとひらくなり  
たなはたの行あひの早稲田雁鳴ておのかはつきになりぬへき哉  
おのか秋に行あひのわさを雁かねの鳴なるなへに露そこほるゝ

民部卿爲家  
同  
同  
光明峰寺入道攝政

文治六年五社百首  
正治二年百首しらふのた  
め

宋集海邊秋風を

宋集

百首中

豚風に田のほとりにかり  
する人あり  
田のうへの月

寶治二年百首秋田

御集秋御歌中

日吉社五十首御歌

御集十首御歌中

家集秋田

家集田家月

御集

家集

秋歌中

いな葉ふくかせもことにそ身にさむきいくたのさとの秋の夕暮  
やまさとは秋を松風ことしらふ野田かるまつは千代うたふなり  
夕されはあしやのおきに風すきていくたの小田もほなみ立けり  
あをけなるおくての稻をまもるまにはきの盛はすきやまにけん  
山まろのおとはのわたり打すきていなはの風におもひこそやれ  
早苗とりおのか作らぬ秋の田をかりにきぬとや田ぬしとかめん  
夕露のたましく小田のいなむしろかへすほす系に月そやとれる  
ななきよにいくたひつゆのふきたてたのもの草にかへる秋風  
露おつる草田のほささうちなひきあさふくかせは袖そさむけき  
やま田もる木竹のふせ屋のとまこしに又袖ぬらす秋のむらさめ  
あしひきの山田のいほのとまをあらみこの下露や袖にもるらん  
山田もりいやねさるらんかりかねの秋の夜深くなきわたるなり  
うちとけてまともみにけり山田もる庵にあひすむ月にもらせて  
いはや守山田は月にまかせてよくまのあらはやいかまけもこん  
秋の田をふきくる風のかうはしみこや袖のこるにほひなるらん  
さ夜衣たちのひたにみえなれて袖のこなたにすかるなくなり  
みやま田のおくての稻をかりつみてまもる假庵に幾よへぬらん

皇太后宮大夫俊成卿  
同  
權大納言實家卿  
好  
重  
重  
西行上人  
從二位賴氏卿  
衣笠内大臣  
同  
後鳥羽院御製  
花山院御製  
小  
源仲正  
花山院御製  
如覺法師  
野  
恒

最勝四天王院名所御障子

建保三年名所百首

千五百番歌合

題不知

秋歌中古來歌合

洞院攝政家百首題望

題不知

家集雜歌中

三百六十首中

實治二年百首

七首百歌秋田

家集

さとまむるとはたのいなはほのくときりかくれ行よとの川舟  
 秋かせのとはたのおもをふくなへにほなみにつくよとの川水  
 霧はるゝとはたのおもを見わたせは行すゑとほきあきの山さと  
 かりのなくとはたのおもにつゆおちて月かけとめぬあきの山風  
 ほにいつるふしみの小田を見渡せばいなはにつくうちの川浪  
 ふしみ山たのものですゑをふく風にはなみをわたるうちの川ふね  
 我門にもる田をみればさほのうちのあき秋すゝきおもほゆる哉  
 秋田刈かりいはの宿り匂ふまでさける秋はきみれとあかぬかも  
 秋田刈かりいはもいまたこはたねは雁かね寒し霜もおきぬかに  
 衣手にみしふつく造うゑし田をひたをわれはへまもれるくるし  
 さはかの水をせきあけて植し田をかるわさいひは獨なるへし  
 たちはなのもりへの庵の門田わせかる時すきぬうしとやすらん  
 山田守たもりのひたのこゝろにて戀するまかのこゑそとめつる  
 わかまもるなかての稻ものきはうちて村々穂先いてにけらしも  
 とほ山田むらゝほさき出にけり今やみかりのいほりさすらん  
 みしふつきうゑしわさ田の走穂にいてや程なきよとこそはみれ  
 秋の田のかりほのいなほのひつち原なかくもあらぬよをなけく哉

慈 鎮 和 尙  
 僧 正 行 意  
 從 二 位 家 隆 卿  
 他 阿 上 人  
 冷 泉 太 政 大 臣  
 光 俊 朝 臣  
 よ み 人 し ら す  
 同  
 同  
 同  
 中 納 言 家 持 卿  
 よ み 人 し ら す  
 同  
 好  
 光 俊 朝 臣  
 僧 正 公 朝  
 太 宰 大 貳 高 遠 卿

三百六十首中

西行上人おくりける歌返

事中に

六帖題

三百六十首中

建治元年老若五十首歌合

たなかにてむかひの山

田かるをみて

六帖題山田

正治二年七月當座三首歌

合門前稻花

家百首秋歌

實治二年百首秋田

寛喜元年女御入内御屏風

秋田

車

正治二年七月當座三百首

歌合

きりはるゝかと田の上のいなはたのあらはれわたる秋の夕かせ  
 ねたる間に露やおきつゝ志をるらんひた打はへてまもる山田を  
 なにとなく露そこほるゝあきの田にひたひきならず大原のさと  
 足引の山田にかくるひたふるにあなものさひしあきのゆふくれ  
 あしひきの山田にかゝるひたのをたゝひとすちに人を戀しき  
 とほ山田いなほの風はほのかにて庵もるひたのさよふかきこゑ  
 うき身には山田のをしね押こめて世をひたすらにうらみつる哉  
 小山田の稻葉をこむるくえ垣の荒れまくみればしかりにけり  
 やまさとの門田のいなはかせこえてひといろならぬ波を立ける  
 たささわくほなみつゝきにすゑ遠き山のすそ田をくたるあき風  
 賤の男かこゑ打そふるをやまたのひたのひきそ夜たゝ淋しき  
 たみのとの天つ空なる秋の日にほすやをしねのかすもかきらす  
 いなむしろまぐや門田のあきかせに民のみつきをいそく比かな  
 秋の田をみればよろつのこの車いくそのいなををつみわたすらん  
 ゆふくれはみ山おろしにわか宿のかと田のいなほの花をなみよる  
 いろゝにかと田のいなほ吹みたる風におとろくむらすゝめ哉  
 いつしかとそもの鳴子いそきひき小田の稻穂のかをる也けり

大 納 言 經 信 卿  
 好  
 寂 蓮 法 師  
 衣 笠 内 大 臣  
 同  
 參 議 雅 經 卿  
 俊 賴 朝 臣  
 光 俊 朝 臣  
 後 鳥 羽 院 御 製  
 民 部 卿 爲 家  
 信 實 朝 臣  
 前 中 納 言 定 家 卿  
 中 原 師 光 朝 臣  
 前 中 納 言  
 後 久 我 太 政 大 臣  
 民 部 卿 範 光  
 大 納 言 通 具 卿

寛元三年結縁經百首

秋田

永久四年九月雲居寺後番歌合秋田

そほつ

大治元年八月攝政左大臣家歌合旅宿版

あつまの、岡生の稻穂いてされは何をたのみとすくるわかよそ  
秋風にあたるいな葉のくたけつゝもの思ふころのまけき比かな  
秋風のふけはかたよるいねのはのくたけて物をおもふころかな  
をしねたつ山田はいほそ荒にけりよはのまくれもともにもる哉  
そほつたつ山田のいけはいまもなほ心ふかしなうき世はあれと  
いなふきの山田のいほにたひねしてもるよは雁の聲のみそきく  
此歌判者後頼朝臣云所歌五文字のひか事なりまもらんいね専ら  
いほにふくへからす又たひの心すくなしいほにいて、田まも  
らんはたひとやは申へきと云々

民部卿爲家  
よみ人しらす  
同 西上人  
よみ人しらす  
西住法師

天喜二年四月藏人所歌合秋田

大治元年八月攝政左大臣家歌合

あきの田にかやりひたつる賤のをかそほつとみゆる衣さほすか  
秋の田のかるほ共なくかへされて忍ひもあへぬねにそほつる  
此歌判者後頼朝臣云田はあきかへすかなと人に申ま、尤まかる  
へし證歌を申へけれ共覺へ侍らす但涅槃經の名字功德品に譬  
如耕田秋耕西勝此經如是諸經に勝といへる文をおもへはなと  
かあきかへすとよまさらむと云々

よみひとしらす  
俊頼朝臣

堀河院御時百首  
家集雜歌中

みたやもり鳴子の綱にてかくなり晴まもおかぬきりのみななみ  
あしひきの山田の稻はひてす共つなをはやはへもるとまらなん

仲實朝臣  
中納言家持卿

秋歌中

洞履かりいほ

永久四年九月雲居寺後番歌合秋田

千五百番歌合

題不知古來歌合

六百番歌合秋田

建長七年顯朝卿家歌合田家

千五百番歌合

建久二年文字なく廿首

千五百番歌合

建治四年内裏歌合

寶治二年百首

六拾題

つなはへてもりわたりつる我宿のわさたかりかねいままも鳴なる  
うちはへてもる綱をのみひく時はいな葉に露そたまらさもける  
てもすまにひたのかけなは打はへてまもるあきに成にける哉  
いそのかみふるのわさ田につなかへてひく人あらは物は思はし  
風わたるいなはかたより引つなななかいよか秋田もるらん  
山田もるすこかなるこに風ふれてたゆむねふりをとおろかす哉  
をしかなく山田をみればすこかもるとまてうこかし秋風そふく  
いねかてにいほもるたこのかり枕よはにおくての露そひまなき  
わか、とのわさ田かりねの草のいほに夢路うつろふ神なひの杜  
あきの色のまなこにみてるすまひ哉門田のなるこ外山のみみち  
なるこひくとしたの面の夕まくれいろくこ風も見えけれ  
秋風を田のかりほのかたよりになひくすゑはの露もいろつく  
此歌判云かたよりにすゑはなひく事かりほのすかたにはかな  
はすや云々

露をひるさわたのほくみ打解てかりほのとこにいやはねらるゝ  
新秋にあへる山田のほたちふくかせになとて心のかたなひきなる  
秋の田のかりほのほくみ徒然につみあまるまてにきはひにけり

正三位知家卿  
民部卿爲家  
信實朝臣

秋田  
仁安三年奈其歌合判者俊  
成嗣  
正治二年百首  
三百六十首中  
永久四年百首治田

新六二  
浦風にはまたのをしねうちなひきはや蒔しほになりそまにける  
現在六  
うら風のかよふいなはに露おちて秋田さひしきすみよしのきし  
初かりのいねのほのかになくしかをあはれとそきく秋のを山田  
はつかりのをしねとりほしいまはくや家おする程になれる山里  
わか宿の門田のわせのひつちほをみるにつけてそ親はこひしき  
十代田のわさ田かはてのひつちほのほさらく秋とみゆらん  
谷ふかみそしろの田おにぬもりして稀にそたてるひつちほの稻

光 俊 朝 臣  
後 九 條 内 大 臣  
實 教 法 師  
源 師 光  
好 忠  
仲 實 朝 臣  
神 祇 伯 願 仲 卿

六百番歌合稻妻

ゆふつくよかけろふよひの雲間より光をかへてらすいなつま  
はかなしやあれたる宿のうたねにいなつま通ふたまくら露  
うはたまのかみをあらはすいな妻も光のほかははかなかりけり  
すたきこしさはの螢はかけきてたえく宿るよひのいなつま  
此歌判者云右歌も優には見え侍を螢を夏題なりとてあきはか  
けきゆとよみきらん事やいか彼潘安仁か秋興賦にも熠燿の  
ほたる階廻しけり蟋蟀のきりくす軒屏になくといへり朗詠

中宮權大夫家房卿  
後京極攝政  
隆 信 朝 臣  
寂 遠 法 師

稻妻

百首歌中  
永久四年百首稻妻  
六帖題

集の詩にも萬點水螢は秋草中とよみて侍なりと云々  
山田もるすこかいほりのうたねにいなつまわたる秋の夕くれ  
かつらきやこかけにひかるいな妻を山伏のうつひかところみれ  
新六一  
たとり行みちのあしみのみゆ計りさすかに照すよひのいなつま  
新六一  
むら雨のそらうちなひく秋の田の雲のはつれにのこるいなつま  
同  
とほ山のみねたちのほる雲間よりほのかにめくる秋のいなつま  
くもりなき月よにみえしいなつまはけさふる雨のさるし也けり

同  
源 兼 昌  
衣 笠 内 大 臣  
信 實 朝 臣  
民 部 卿 爲 家  
同

稻負鳥

屏風に  
千葉をまらけるにこまり  
ければ  
百首中  
六帖題

家  
里とはみ暮なは野へにとまるへしいなおほせ鳥に宿やからまし  
萬代 大和物語  
さよふけていなおほせとりの鳴けるを君かたくと思ひける哉  
秋の田のいなおほせ鳥のこかれはもこの葉もよほす露や染らん  
新六一  
露けさもおのか涙か秋の田のいなおほせとりはなかくも有なん  
この夕へいなおほせとりもこゑたてく秋うらかなし浅ちふの庭  
新六一  
はやはこへかり田の面のこまのあしいなおほせ鳥の聲いそく也  
同  
なにそこはいな負鳥の名のみして菊りはず民そあしたゆくゝる

順  
俊 子  
從 二 位 家 隆 卿  
民 部 卿 爲 家  
前 中 納 言 爲 兼 卿  
信 實 朝 臣  
光 俊 朝 臣

九十九番菊歌中  
建長八年百首歌合

垣ほなる菊の茂みにかくろへていなおほせとりの聲のけちかき 爲 實 卿  
わか門につくる山田のほにつきていなおほせとりの聲すたく也 從二位行家卿  
判者知家卿云ほにつきてと侍詞いらなくすへもなしいなおほ  
せとりを雀といふ事の侍とかやたしかならぬ下説なりと云々

夫木和歌抄卷第十二終

夫木和歌抄卷第十三

秋部四

題	月	駒迎	霧	秋風	野分	秋雨
露	秋夕	秋夜	秋雜			

月

題不知  
御集月を  
秋歌中  
久安百首  
元永二年内大臣家歌合月  
判者修理大夫

<sup>萬八</sup>わたつうみのとよはた雲に入日さし今夜の月よすみあかくこそ  
入日さすとよはた雲のけしきにてこよひの月はそらに去りにき  
待わひぬたつねてゆかん秋のよの月のひかりのあふところまで  
去らま弓はりてかけたる三か月はほとなくみゆるたかまとの山  
夕されやあまつ空なる去らま弓とみゆれば月のやまのはにいる  
判者云去らま弓とよめれば月はきこえたるにとみゆとよめる  
如何この心にては月とも去らざりけるにやと云々

初秋月歌二首中

秋月歌中

家集

家集初秋月

六帖題秋月新

千五百番歌合

六帖題

伊ふづくよ

千五百番歌合

延久七年内大臣家歌合未出山月

嘉祿二年百首

嘉元々年百首月

羅月式部卿親王家々千首

月歌中

天の原ふりさけみればをらま月はりてかけたるよみちはよけん

玉たれのこすの間通りひとりめてみるるしなき夕つくよかな

夕つくよあかつきやみのほのかにもみし人ゆゑに戀わたるかも

ゆふつくよあかつきやみの朝あけに我身はなりぬ君を思ひかね

秋たつとおもふに空もたゝならてわれてひかりをばけむ三日月

あかさりし人のまゆねによそへても名残ををしき三か月のかけ

ゆふつくよかたふく空はよひなから雲のいつくにあけの月

空はれていさよふ影をいそげともまたいてかての山のはのつき

くもきりのたなひき消る秋かせにいさよひのほる山のはのつき

雲うすき空かとみればゆふつくよはれても影をおほるなりける

空さえてすむへき月を山のはにほしのひかりのかねてみすらん

秋のそら月はこよひとはらふなるひかりさきたつみねのまつ風

いてぬなりまたくれやらぬ白雲におなしいろなる山のはのつき

くれぬよりつきのすかたはあらはれて光はかりそ空にまたるゝ

よひのまのひかりにも似ぬあはれかな人さたまりてむかふ月影

めくるともすそ野に道をふみかへて月にはゆかしまきの下かけ

月になる秋のこゝろのいつくより我さへをらぬなみたおつらん

中納言家持卿

よみ人しらす

人丸

同

四行上人

正三位知家卿

前大納言忠良卿

信實朝臣

光俊朝臣

信實朝臣

寂蓮法師

前中納言定家卿

爲家卿

參議爲相卿

同

同

前中納言爲相卿

六帖題

花月百首歌

治承二年右大臣家百首御歌合

最勝四天王院名所御障子

家集

家集月前松

圓不知古來歌合

嘉祿二年百首山月

曆應三年期秋百首望山

幽月猶疑影

題しらす

秋月歌

殘月照山明

月宮有路無内入

月照何心一點珠

九月十三夜月不輝處

百首歌合古來歌合

みきを下おもてをにしとさためすは其方にむきてつきを待まし

かそふれば秋きてのちの月の色におほめかしくもまほる袖かな

爪木とるとほ山ひとはかへるなりさとまておくれあきの三日月

あきかせにこのまの月はもりそめてひかりをむすふ袖のしら玉

さらしなや峯吹きおろす秋風のきりにををれていつるつきかけ

あまの河やそのうらわに雲消えてそらすみわたる月をみるかな

たつた山つきはこのまにいてそめて松の葉くゝるあまの川なみ

ふなはりのなつみの上の山をいて、西をさしけるつきの影みゆ

いてぬるか松かけえらむゆふくれの山よりおくの山のはのつき

山の端はいつるけしきに匂へともまた影かくすあきの夜のつき

おほとものみつとはいはし赤根さしてれる月夜にたゝあへり共

山のはのさゝらえをとこ天の原とわたるひかり見えてしよしも

ふたつとも見えぬを月の山のはにてりわたりつゝあくる空かな

てる月のみやこに道はありといへとたつねて行ん方そまられぬ

てる月は波のこゝろにてらされてひとつ玉と見えわたりける

ひさかたの空にかゝれるあきの月いつれの里もかゝみとそみる

秋の空に高くかゝれるよるの月このよの物と見えすもあるかな

光俊朝臣

定家卿

順徳院御製

後京極攝政

後久我太政大臣

俊惠法師

土御門院小宰相

中納言家持卿

爲家卿

同

賀茂女王

坂上耶女

千

同

同

大納言經信卿

樞大納言教家卿

建保四年百首

西へ行月なみて

月歌十首そのかみことに

三十六人歌合

久安百首

同

花月百首御歌

同

同

御集月御歌中

同

家持歌合山月

八月十五夜月前松風

建長八年百首歌

正治六年一首御歌

資治二年百首

つゆ分は袖こそぬれめひさかたのつき影きよしさかはらより  
横拾遺釋歌  
うらやましいかななるそらのつきなれば心のまゝに西へゆくらん

家長朝臣  
備部源信

夜もすからななめそあかす月かけを秋はところも忘るはかりに  
玉葉雜五  
思ふことなくてななめしむかしたに月にこゝろの残りやはせし

備大納言實家卿  
後徳大寺左大臣  
實清朝臣

くれの秋月は今夜のせきなればこゝろとめてたれか見さらん  
あまの戸をのとかにわたれ月の舟こよひは雲のなみなかりけり

同  
後京極攝政

浮世とはいつもさこそは思へともこゝろのたけを月にまりぬる  
さとよむ音もまつかになりはて小夜ふけ方にすめる月かけ

同  
同

春夏のそらにあはれをのこしける月をあきにてこよひみるかな  
横古秋上  
かきくもる心いとふな夜半のつきなにゆるおつる秋のなみたそ

同  
同

あわ雪を春のひかりにみしよりも雲間のつきのにはのむらさきえ  
あしひきの山のたかねは久かたの月のみやこのふもととなりけり

同  
同

あきの夜のひかりも聲もひとつにて月のかつらにまつ風そふく  
みればまつなみたきりたつ秋の夜に我こそやつせ山のはのつき  
横後秋下  
からさきやにほてる沖に雲なきて月のこほりにあきかせそふく

同  
衣笠内大臣  
後京極攝政  
後九條内大臣

にはてる名におふうらの秋なれば月になきたるをちのさゝ波  
遠さかるみきはも見えずにほてるや月のこほりか秋のうらなみ

同  
同

さゝ波やこほりにけりな秋の夜のつきのにはてるまかのうら風  
夜舟こくせとのまほひをよそにみて月にそこゆるさやかたの山

同  
同

つり舟のうかふなみ路につきおちて人と秋とのわかれをそ思ふ  
あらし吹く月のあるしはわれひとり花こそやと人もたつぬれ

同  
同

いさゝらはたつねのほりて關すゑんたこの上ぞ月のいるみね  
はしめなき月のゆくへに身をかへてさらは心のはてをまらはや

同  
同

いく里か雲にこゝろのまとふらんうかるとかこつ月をなかめて  
星もなしくも間にしらぬ雨の夜になほまたるは山のはのつき

同  
同

なかく月に月のくまなき秋のよはなかめにうかふ五月雨のそら  
山の端はあまのかはらのしまなれや月の御舟もこきかくれつ

同  
同

くもの波あとなきかたの月のふねかつらか蔭にこきわたるみゆ  
かつらをの月の舟漕くあまの海を秋はあかしのうらといはなん

同  
同

はちす葉も紅葉もまける池の面はそこまてみよとてらす月かけ  
久かたの月かけみればなにはかた鹽もたかくそなりぬへらなる

同  
同

なにはかた鹽さしくれば山のはにいつる月さへみちにけるかな  
新六一  
あまの原そらゆく月のもちまほのみにけらしな難波江のうら

同  
同

新六一  
あまの原そらゆく月のもちまほのみにけらしな難波江のうら  
我たのむ西のあるしにちきりける今日のこよひそ月のさやけき

同  
同

光俊朝臣

衣笠内大臣

御集

光俊朝臣

貞永元年八月十五夜名所  
歌合  
親歌中古來歌合

文永二年歌合

家集百首

家集秋歌中

五行歌中

家集月蝕を題にて歌よみけるに

千五百番歌合

承久元年詩歌合山河秋月

深山觀月

月三十番歌合

花月百首

光善院入道二品親王家五  
十番野徑月  
東へ下けるに在明の月さ  
へ笠きたりといふ所にて  
喜多院入道二品親王家五  
十首

過かほるよひあかつきのかたわれをひとつにすめる月のかけ哉  
をとこやま秋のなかはの法の庭つきはこの夜のひかりのみかは  
をとこ山秋のなかはのみゆきをや雲にもまりてつきはさやけし  
名にたかき秋のなかはの一夜かほことわりまるとすめる月かけ  
くもりなきこよひは秋のなとり川月にや見えんせのうもれ木  
もろこしもあきのなかはになりぬとてこよひや月に衣うつらん  
名にたかきふたよの外も秋はたいつもみかける月のいろかな  
秋の夜の影かたふきぬもち月のとまりはうらのもなかなりけり  
いむといひて影にあたらぬ今夜しもわれて月みる名や立ぬらん  
なくさまぬこゝろに月のめくりきて昔にかへるをはすてのやま  
まるへせよ吉野のおくの秋のつきたればこゝを又たつぬへき  
花をのみをしみなれたるみよしのこすゑにおつる有あけの月  
なかもこしこゝろは花のなこりにて月に春あるみよしのやま  
月かけはあきよりおくの霜おきて木ふかくみゆる山のときは木  
むさしのは露おくほととの遠ければ月をころもにきぬひとそなき  
たひ人のおなしみちにやいてぬらん笠うちきたるあり明のつき  
あれまもる月にまかせてすむ宿はねやのうちより明るまのめ

信實朝臣  
有長朝臣  
法師行清  
衣笠内大臣  
前大納言資季卿  
從二位家隆卿  
建禮門院右京大夫  
定家卿  
四行上人  
嘉陽門院越前  
後久我太政大臣  
大藏卿有家  
慈鎮和尚  
定家卿  
同  
安嘉門院四條  
前大納言隆房卿

百首歌

花月百首

文治六年女御入内屏風

嘉元三年遊忍百首

御集月あかさ

家集

題不知

海上月歌花抄

保延元年家成卿家歌合

家集月歌中

千五百番歌合

六百番歌合廣澤池晴望

正治二年百首

つくくとなかむる月にうき雲のさわたるほとに夜は成にけり  
とこのうへのひかりに月のむすひきてやかたさえゆく秋の手枕  
池みつにくも井の空をうつしもて手にとるはかり月をみるかな  
ふげにけりひとりねまの月いてむなしきやまのみねの松風  
我やとの軒のうらいたかす見えてくまなくてらす秋のよのつき  
小倉山したくさまでねをとめてさやかにみゆる秋のよのつき  
六五  
君こふるまへうらふれ我がをればあき風ふきて月かたふきぬ  
萬十一  
窓こしに月は照らしてあしひきのあらし吹く夜は君をしと思ふ  
新六  
今夜こそつきもみちれまほの山さしてのいそに雲もまかはす  
新六  
ありあけの月の出しほのあまつかせ海山かけて吹きはしむなり  
月影にまほみちぬれはなにはえをうたひて出るあまのつりふね  
波のうへにいねのあまあけぬとておとろくはかりすめる月影  
玉秋下  
月さゆる明石のせとに風ふけはこほりのうへにたむえらなみ  
池にすむ月にかれるうき雲ははらひのこせるみさひなりけり  
わたつ海の秋なき波のはなには霜おくものは夜半のつきかけ  
心にはみぬむかしこそうかひけれ月になかむるひろさはのいけ  
またやみん明石のせとのうきまくら波間の月のあけかたのかけ

股宮門院大輔  
定家卿  
正三位  
爲實卿  
花山院御製  
太宰大貳高遠卿  
人丸  
よみひとしらす  
衣笠内大臣  
信實朝臣  
登蓮法師  
爲忠朝臣  
四行上人  
同  
慈鎮和尚  
後京極攝政  
前大納言忠實卿



月歌中

家集

御集

屈不知

家集

北野社百首歌

建永三年和歌所歌合海邊

百首歌

文治六年五社百首

家集

建保三年名所百首

百首御歌中

建長四年毎日一首中高濱

秋はこよひ浦は明石の波のうへにかゝる月をはいつかなかめし  
 吹きはらふあなしの風に雲はれてなこのとわたるありあけの月  
 明かたはまほひもさひしあまのすむいほのみなどの秋のよの月  
 明るとやたつもなくらんいもかしまかたみの空にのこる月かけ  
 照月にみほのえるしのあらはれてやすらひもせぬわたのいり舟  
 とさしあれば西ふくかせに雲はれて月をむかふるあはちま山  
 白妙のなみもてゆへるこのまより月をかさせるあはちまやま  
 月やとるもしほの袖を人とは、かけをこたへよすまのうらなみ  
 月かけを袖にかけてもみつるかなすまのうきねのありあけの浪  
 たとふへき方こそなけれ玉津しまてらしかはせるすみの江の月  
 磯にいて、あさりする火の消ぬればふけぬのうらを行かな  
 小町集  
 あまつかせ雲ふきはらへ久かたの月のかくる、みちまよふへく  
 新勅神賦  
 櫛とりかけしみむろのますかゝみそのやまのはと月もくもらす  
 なかめやるなみの千里のくも井まで月にふける秋のうらかせ  
 きよみかたなみの千里に雲消えていはしく袖によするつきかけ  
 いくとせの雪とかいはんしろたへに名も高はまのあきの夜の月  
 山家集上  
 くまもなき月のおもてにとふ鷹のかけを雲かとおもひけるかな

参議雅經卿  
 俊成卿  
 後鳥羽院御製  
 西園寺入道太政大臣  
 源師光  
 從二位家隆卿  
 後鳥羽院  
 後久我太政大臣  
 慈鎮和尚  
 俊成卿  
 伊勢  
 同  
 家隆卿  
 正三位家衡卿  
 後京極攝政  
 民部卿爲家  
 四行上人

願仲  
 家集朝中朝臣家十首歌月  
 月歌中  
 貞元三年八月三條右大臣  
 家歌合水上秋月  
 長永三年九月顯輔卿家歌  
 合月  
 老後月をみて  
 法性寺入道前關白家歌合  
 嘉應二年住吉社歌合社頭  
 月  
 久安五年七月山路歌合月

なにはかた月のひかりに浦さえて波のおもてにこほりをそしく  
 玉秋下  
 つきすめは谷にそ雲はまつみけるみねふきはらふ風にまかれて  
 山家集下  
 ひかりをば曇らぬ月そみかきけるいな葉にかゝるあまのこ玉  
 同  
 みをよとむあまの川きしなみ立て月をはみるやさなみのかみ  
 同  
 浮よとて月すますなる事もあらはいかにかすへきあめのまし人  
 同  
 こさふかは曇りもそするみちのくのえそにはみせし秋のよの月  
 同  
 まそてもてのこへる空の清き上にみかける月をすませてそみる  
 同  
 ふく風にあたりの雲をはらはせてひとりもあゆむ夜半の月かな  
 同  
 きみにこそとはまほしけれちの秋の水と月との同しこゝろを  
 同  
 そらはれてきれる雲たになきよはに月のかつらの影のみそする  
 同  
 かそふれば年こそいたく老にけれ夜をへてみつる月のつもりに  
 同  
 くもりなきかゝみにむかふ心ちして老の後こそつきはまはゆき  
 同  
 住よしの松のこすゑをみわたせばこよひそかくる月のまらゆふ  
 同  
 すみよしのあまくたります松の上に空よりかくる月のまらゆふ  
 同  
 いかばかり今夜のつきにこりぬらんさはのほたるの心たかさは  
 同  
 いけ水の月おくらすはいかにまて夜ふかきやまをひとり過まし  
 同

菅原輔  
 藤原爲  
 道命法師  
 顯仲朝臣  
 盛方朝臣  
 賀茂政平  
 陸録法師  
 法眼全真

承安元年八月全支法印房

此歌判者清輔朝臣云文集に侍かや鳳凰池上月送我過三商山と  
申心なればひがごとにはあらねどもかれはきつきてきこゆ  
このいけ水の月おくらすはとあるこそうちきくもたがひて山  
のはの月などいはまほしけれと云々

永萬二年重家歌合月

秋ことに今夜はかりの影をみはめつらしけなきひかりならまし

源通能朝臣

此歌判者俊成卿云こよひの月を賞するこゝろはおなじくも侍  
り是句に影を見ばといひてをばりの影に光ならましといへる  
かげと光と同事を二所におかれたるにこそと云々

永久四年八月雲居寺歌合月

雲のゐるふもとにこよひきてみれば名には月こそ隠れさりけれ

顯仲朝

此歌判者基俊云右雲のゐるふもとなどいへるは山の名にあら  
で寺の名とこそ聞え侍れなほ山とみえてふもとといひ侍らば  
や名には月こそかくれさりけれとよめるは貫之がたみの島  
を今日行ばと云歌におなじやうにて侍かな歌合の歌にはかゝ  
る事はよまねば左のかちとこそ侍れと云々

保延元年八月家成卿家歌合月

つねよりも今夜の影のあさきかな月のかつらのはなさかりかも

權中納言經具卿

此歌判者神祇伯顯仲卿云右の歌に今宵の影いか侍らん題をこ  
めて末にあるべき事を先あらはせるをいささき難とぞき侍

又月のかつらの花さかりかもとよまれたる歌には月のかつら  
をば秋は紅葉とこそよみて侍めれ古歌云春霞たなひきにけり  
久かたの月のかつらも花やさくらんとよめるは春の花はさく  
べきにやとそ給ふれども秋月の詩に翫桂花光とつくりたれ  
ばひがごとにはあるまじきにやと云々

家集月歌中

家集

大輔長家卿にて月を

常盤井首首閉中月

安元元年閏九月歌合照枕

建長八年百首歌合

建久二年百首中

承久元年日吉社歌合

後京極攝政家時歌合月明

風又冷

和歌所歌合海邊月

秋風に夜やふけぬらんおほそらの月のかつらのなひくかけみゆ  
さてもなほをらてはやまし久方の月のかつらのはなとみるとも  
ますらをのまかきのかけもあらはれてまのふ隈なき秋のよの月  
はしちかくあさまにねやをまつらひて空行月をいれぬよそなき  
いもこふとまたはしちかきうたねの枕のそはにやとる月かな  
判者云枕のそはいかゝとてまげにきと云々

爲頼朝臣  
定家卿  
源仲正  
同  
從三位賴政卿

月の夜の聲もほそめに窓あけてこゝろをやるうたなかめかな  
くもなき衛士のたく火のかけみえて月になれたるあきの宮人  
おほかたのあらしも雲もすみはてそらの中なるあきのよの月  
あかつきはかゝらん山のつきをみよ雲もとまらず秋かせのにし  
秋の露を野邊ゆく月にみかへせておきにすしき山おろしの風  
もろこしの山人いまはをしむらんまつらかおきのあり明のつき

信實朝臣  
定家卿  
同  
同  
同  
悲鎮和尚  
後鳥羽院御製

家集月歌中

正應三年内裏御會曉月  
百首歌

文永七年毎日一首中  
千五百番歌合

寶治十二月歌合海邊月

内裏御會山中秋月

建仁元年十首歌合山家秋  
月正治二年百首

建仁元年十二月歌合山家  
秋月

正治二年百首

洞院攝政家百首

あまの原ひかりさしそふかさゝきのかゝみとみゆる秋のよの月  
里とはきこするにかけはかたふきて霧にかすめるありあけの月  
たつた山さらては春のいろもないうすきりかすむ秋のよのつき  
みたれあしの葉すゑの月のさゆるよは忍にすれる鶴のけころも  
いへくのおもひや人はかはるらんいつくも秋の月は見るとも  
やとことにひかりあらそふ秋のつきひとり涙にまつみてそみる  
名こりなく峯のあらしに月おちてひとりなみたに流れてそみる  
はれくもるさためなき夜の月かけにくめちのかみの心いかにそ  
あなし吹くなたのしほひに雲消えて波にきはまる月のかけかな  
つねよりも月にこゝろのすむ夜なかくてや人の雲にいりけん  
いさこよひなたの海士の子さるへせよ鹽路の月をこき出てみん  
かこ山の峯のまさかきまた葉まで月のかけたるあきのまらゆふ  
かけきよき月よりおつるそての雨のくもれば出るあきの山のは  
山のはをのきのこするに住みなして窓よりいつるありあけの月  
のましかき峯のくもまをなむは窓のうちよりいつる月かけ  
峯の松はらふあらしの木の間よりかけきたまらぬやまのはの月  
やまさとの木の間や風になひくらん影さたまらぬにはの月かな

爲家卿  
前大納言爲世卿  
順徳院御製  
同  
同  
爲家卿  
寂蓮法師  
野宮左大臣  
正三位季經卿  
小侍  
信實朝臣  
爲家卿  
慈鎮和尙  
寂蓮法師  
前大納言忠真卿  
大納言經通卿  
從三位行能卿

撰合初列

秋歌中

清文歌中

文永七年秋十首歌合

光明峰寺入道攝政家百首  
家歌

建長五年毎日一首中

文永七年毎日一首中

家集船中月

月歌中

正治二年百首

家集月歌中

建久八年季能卿月歌

文永十一年毎日一首中月

歌  
同年毎日一首中

文治六年五社百首

式部卿親王家十五夜御會

くもなくていつふりにけん秋の夜の月の名うつむ庭のしらゆき

如願法師  
權律師隆寛  
他阿上人  
後九條内大臣  
定家卿  
爲家卿  
同  
同  
同  
同  
家隆卿  
同  
同  
定家卿  
爲家卿  
同  
同  
爲家卿  
俊成卿  
前參議雅有卿

家集

なかつ月の十日あまりの三日のはら川なみまろくすめるつきかな

從二位家隆卿

家集

久かたのあめのおしてやこれならん秋のまるとみゆる月かけ

同

御集

さるさはの玉ものみつに月さえていけにむかしの影そのこれる

後京極攝政

六帖題

秋の夜の月をみにくる人たにもねぬ名はたてぬひろさはのいけ

光俊朝臣

正應三年丙亥月十五首

のきはより影もる月のにしにはやかたふくやらん窓ちかくなる

他阿上人

月歌とて

見るまゝにふけ行くひかり雲すみて星はまれなる秋の夜のつき

爲道朝臣

文久元年五辻殿御會野亭

ふけ行けは千里の外にまつまりて月にすみぬる夜のけしきかな

前中納言爲兼卿

文治五年に百首

御吉野はゆきふるみねのちかければ秋よりうつむ月のまたくさ

同

九月十三夜内裏御會

つき清み四方のおほそらくも消えて千里のあきをうつむしら雪

同

建保三年名所百首

山かせに月のさころもはらへともおほえぬ雪は木の葉こそふれ

從三位行能卿

家集□□□

白たへの月のころもてかたしきてねぬよあまたの宇治のはし姫

寂蓮法師

建保三年名所百首

山かせにくものまからみよわからし月さえおつるぬのひきの瀧

後成卿(女)

寶治二年百首野月

ひかりさすさとをたつねてすむ月のかけをみかける玉川のなみ

從二位行家卿

文治六年五社百首

秋風のすゑ吹きなひくすゝき野のほむけにのこる月のかけかな

後成卿

淳多院入道二品親王家五十首

たひの空のこりの月にひとくもいまやこゆらんあふさかの關

前大納言隆房卿

千五百番歌合  
六百番歌合

あきの夜の月すむ野へにふる雪はなひく風にもこほれさりけり  
秋の月ひるとは見えてそらさむし雪とおもへはにはのまらつゆ  
今夜さへたゝやかへらん月ゆるにとをもたつねし人ならなくに

後九條内大臣  
法橋顯昭  
從二位家隆卿  
藤原尹顯  
元祐法師  
四行上人  
同

此歌判云戴安道常の事たるへしと云々

弘安元年百首

玉となりかゝみとなりし人のよはいかはかりにか月もすみけん

後九條内大臣

喜多院入道二品親王家五十首

おもひやるこゝろの道やちかゝらんやかて千里の月をみるかな

法橋顯昭

四季百首月

海のはて空のかきりも秋のよはつきのひかりのうちにそ有ける

從二位家隆卿

承安五年七月右大臣家歌合

池水にくまなき月をうつしみてこのたまをもてあそひつるかな

藤原尹顯

水久三年五月大神宮社歌合月

いつこにもさやけかるらん秋の夜の月にあやなく人を待つかな

元祐法師

家集

月をみるほかにもさこそいとふらめ雲たゝこの空にたゝよへ

四行上人

建長八年百首歌合

つれなくてなみたおとさぬ人もあらし心みかほにすめる月かな

同

千五百番歌合

草むすふ秋のかりねのはしめには月こそかへす小夜の手まくら

第三御子

弘安元年百首

秋なればとてこそぬらす袖のうへものやおもふと月はとひけり  
秋はたゝ萩の葉する風のほとに夜ふかくいつるやまのはの月  
あきくさの瀧をうけたる岩かねにこほれてかゝる月をみるかな

後京極攝政  
後久我太政大臣  
後九條内大臣

文安歌  
久集百首

秋かせのつゆふきとめぬ庭くさにむらさめふりて月そのこれる  
聲はかり木の葉のあめはふるさとの庭もまかきも月のはつしも

衣笠内大臣  
定家卿

九月十三夜内裏御會山海

後京極攝政家五首歌秋色

喜月百首

家集

たまほこの道もさりあへぬ春の花それかとまかふやまの月かけ  
そめてける月のかつらのすゑ葉までうつろふころの野邊の秋風  
木のもとに月もひかりをやはらけて神さひわたるみねのまつ風  
みねにたつ松のあなたになりにけり入もいさよふやまのはの月  
紅葉ちるきよたき川にふな出して名になかれたる月をこそみれ

此歌は九月十三夜大井にまかりて清瀧川のわたりまでまかり  
てかへさに藤辨のうめつにまかりてあきらかなる月をもてあ  
そふといへることを人々よみけるによめりと云々

久安百首  
御集九月ばかり月あかき

なか月の月の有明のけしきをおくのゑひすもあはれとやみん  
秋ふかみくもりなき夜の大そらに誰かゝけたるかゝみなるらん

上四門院兵衛  
花山院御製

駒迎

堀川院御時百首駒迎

文治六年五社百首

なくなるはあふ坂山のくつはむし駒むかへするひとやきくとて  
ひきわたすせたのなかけしそら晴れてくまなくみゆる望月の駒  
關の戸にをはなあしけのみゆる哉ほさかの駒をひくにや有らん  
ゆふきりのたちのゝ駒をひくほとはさやかに見えす關のすき立

權中納言師時卿  
修理大夫顯季卿  
隆源法師  
俊成卿

文應元年七社百首

家集

賀茂社百首

久安百首駒迎の心を

永久二年三井寺歌合駒迎

文應元年七社百首

百首夜中駒迎

弘安三年新熊野歌合百首

同二年

百首御歌

六帖題

八月十五夜の心を

三十首歌中

六帖題

身につもる年はくれねとあふ坂におくりむかふるもちつきの駒  
はしりの懸樋のきりは棚ひきてのとかにすくもちつきの駒  
あふさかにけふるくもの上人はつきにのりてそ駒をむかふる  
てるつきはつもれる雪のこゝちして玉かとみゆるきりはらの駒  
あふさかの關のすき村きりこめて立とも見えぬゆふかけのこま  
もち月の駒のつなすてをはなちたなひく雲をまかせてそみん  
あふさかの神のたむけにかけをたにまみつにとめよ望月のこま  
まなのちやいしく山川をへたてきぬけふたなひけるきりはらの駒  
あふ坂のやまのはわけていりぬれと影かたふかぬもちつきの駒  
あしひきの山ちをとくやこえぬらん日たかくみゆるもち月の駒  
あふさかにむかふる駒をひきわけて使にこゆるくものうへひと  
くもりなき月もなかはの秋ことにかけるならふるひきわけの駒  
もち月のあきのひかりをさそひきて雲井にみゆるひきわけの駒  
新六  
名にたかき木曾のかけはし引わたし雲井に見ゆるもちつきの駒  
ひきわくる聲そいはゆるもち月のみまきのはらや戀しかるらん  
あふさかや山たちいつるもち月のこまふきおくる夜半のせき風  
新六  
あふさかの關路につく駒のあしも明日のひき分敷やみゆらん

爲家卿  
俊賴朝臣  
慈鏡和尙  
前大納言隆季卿  
待賢門院堀川  
親意法師  
運譽法師  
民部卿爲家  
寂蓮法師  
兼盛  
安嘉門院四條  
同  
土御門院御製  
爲家卿  
俊賴朝臣  
家長朝臣  
信實朝臣

家集駒廻

三百六十首中

むさしの、駒むかへにや關山のかひうちこえて今朝はきつらん  
みちのへのあはたの山に秋きりの立野のこまもちかつきぬらし  
風こしのみねをはるかにひくときはくもるにみゆるもち月の駒

順 好 中 原 行

霧

家集

題不知

程へて有ける人によみけ

返し

本院左大臣家前親合山橋

題不知

六帖題釋

寛保元年女御入内屏風

百首御歌

陽中紅葉

三百六十首中

秋くれはかふかの山にたつきりをうみとそみつる波たなくに  
朝霧にぬれにしころもほさすしてひとりや君かやまちこゆらん  
こころみに我こはめやはおともせてふる秋きりにぬる、袖かな  
たつやともなにかはみけん秋霧のふりはてにたる人のこころを  
朝こにきりはふれともあしひきの山たちはなの色もかはらす  
こころみにわれとはめやは秋きりの音もせてふる物にぞ有ける  
とふまでの宿をへたて、ゆふ霧のおともせてのみふる日敷かな  
かよひくるみちの朝霧ふりぬれはなほめつらしきはつかりの聲  
山田もるこころにはれぬ朝きりのいな葉の風にむすほ、れ行く  
にしきはる秋のこすゑをみせぬかなへたつる霧の園をつくりて  
おほひえやをひえの山も秋くれはとほめも見えず霧のまかきに

人 丸  
よみ人しらす  
公  
同  
同  
正三位知家卿  
同  
悲 鎮 和 尙  
四 行 上 人  
好 忠

堀川院御時百首

百首歌中

たながうにて

御集

二夜百首御歌

正治二年百首

千五百番歌合

建仁三年若若五十番歌合

或抄中

四天王院名所御障子

堀川院御時

粘子内親王家歌合

正治二年百首

寶治二年百首

爲家卿百首

川きりのみやこのたつみふかければそことも見えす宇治の山本  
ひとりねの夜るのころもは肌寒しさほの川きりたちやまぬらん  
とへかしなきり間をわけてかみ山の木まけき谷の下のくちはを  
野邊の色はみなうす、みに成にけりまはしとみつる夕きりの空  
春こそは明ほのことになかめせしか又このころのうす霧のそら  
たかやとに深きあはれををりぬらん千里おなしき里のうちに  
もみちする秋のあさきりたつた山夜半にそめけん色なくしそ  
朝きりのそことまるとはなはなれともうす、みわたる三輪の杉村  
たつねてもたれかはとはん三輪の山きりのまかきに杉たてる門  
たをやめのそてか紅葉かあすか風いたつらにふくきりのをち方  
みねのくもふもとのきりの色いつれそらもこころも秋の松かせ  
あしうきや波のきり間に袖みえてやそ宇治人はいまかとふらん  
あふさかの關の杉間をひくなればこやもちつきの影ふちのこま  
あふ坂の關よりこゆるあき霧はせしたのほしにやたちわたるらん  
あさち原むしのねまでも故郷のまくれにのこるゆふきりのそら  
關こゆるみちたとくし白かはの山邊をかくすあまつきりかも  
みねの雲かさねてしるき夕きりにかへるね山のとりのひとこゑ

前中納言匡房卿  
惠 慶 法 師  
俊 頼 朝 臣  
後京極 政  
同  
悲 鎮 和 尙  
民部卿 範 光  
参議 雅 經 卿  
定 家 卿  
同  
同  
仲 實 朝 臣  
よみひとしらす  
寂 蓮 法 師  
前中納言定嗣卿  
家 長 朝 臣

建保三年名所百首

秋歌中  
舟

千五百番歌合

建永元年歌合聯中

建長八年毎日百首中

同八年百首歌合

毎日一首中

久安百首聯を

家集秋歌中

家集

すまのうらに秋やく海士の初鹽のけふりをきりの色をそめける  
 僧正行意  
 ゆふきりに明石のとなみこく舟のほのくきゆるあとの白なみ  
 正二位忠定  
 はれ行かまきのしま風いう見えてやそうち人のそてのあさきり  
 源師光  
 たまもかる野島かさきにきりこめてゆふ波千鳥こゑのみそする  
 在長朝臣  
 現存六代  
 なにはかた浦の朝きりはれもせてよるほとみえぬあみのうき舟  
 僧正行意  
 はるくよさのふけの朝霧にあらはれたる天のはしたて  
 二條院廣成  
 いそちかきあまのとやまの夕くれに霧のまかきをあらふ白なみ  
 後久我太政大臣  
 くれはまたいつくにやとをかりの鳴みねにわかる袖の秋さり  
 爲家卿  
 入海のみなどの霧そはれやらぬ今日はひかりになりやまぬらん  
 光俊朝臣  
 あさ日さす方のむらきりはれやらて山つくくみにゆる秋かな  
 爲家卿  
 ふりすさむ雨のなこりの山かせにむらくすくる秋のあさきり  
 前大納言隆季卿  
 よひのあめ名こりのきりの朝立に我かりころもまをれてそ行く  
 定家卿  
 つふらえのせなのかすみもさききえて霧たちわたる秋の夕くれ  
 俊頼朝臣  
 ぐれにけりまたこの秋の花すきはほのめくきりに霜むすふまで  
 此の歌はたながみにて舟にのりてやしまといふ所にまかりた  
 りけるにきりたちこめていふせかりければよめりと云々

同

是貞親王家歌合

きり

六帖題不知

柿木影供百首御歌  
貞應三年百首

秋風

千鳥なくあまの川原にたつきりはくもとそみゆるあきの夕くれ  
 此歌は河内守かねくにかの國に面白き所有と申侍ければこれ  
 まかり侍けるに天河わたりて業平朝臣七夕つめにとよめる所  
 なりとて舟をとめて川のはとりにてあそび侍けるにかはら  
 けをとりにておのの歌よみけるによめりと云々  
 はま千鳥秋にしなれば朝きりにつまよはしてなかの日そなき  
 愚  
 六二  
 ゆふきりにころもはぬれて草まくら旅にあるかもあはぬ君ゆゑ  
 よみ人まらす  
 秋のきり山を千草に染めたればもみちたかはぬにしきとそみる  
 同  
 萬十五  
 あさつゆに、ものすそひちて、夕霧に、衣手ぬれて、さきくし  
 同  
 も、あるらんことく  
 雨ならはやともとるへきみちのへの霧こそいたく袖ぬらしけれ  
 中務のみこ  
 拾遺外上  
 こりはつるかりたのおものいなつまし鳴たつくれのうす霧の宿  
 定家卿

ゆふされはみとりの昔に鳥おちてまつかになりぬその秋かせ  
 風わたるまかきのくさの下折にうつもればはてぬまつむしのことる

鎌倉中務のみこ  
爲家卿

嘉元二年百首  
 康元々年毎日一首中  
 水無瀬殿秋十首歌合  
 建久元年百首秋歌  
 或抄中  
 文集百首蘭扇の秋中  
 十題百首御歌  
 西洞隱士百首御歌  
 正治二年百首  
 建長三年九月十三夜十首  
 歌合山家秋風  
 寶治二年百首  
 家集秋風  
 百首御歌  
 御集  
 三百六十首中  
 百首歌  
 永延二年七月宗資朝臣家  
 歌合松下秋風

ゆふされは草の葉むすふ秋かせになほ吹きのごす野邊のうす霧  
 深山木の下葉かつちるあきかせにまたおとつれぬ初かりのこゑ  
 あさちふの小野のまの原うちなひきをちかた人に秋かせそふく  
 木の葉ふく風のこゝろになひき來て枕にかはるひくらしのこゑ  
 つれ〜と山ちつゆけき秋かせは日かけひとへにかよふ春かな  
 はし雁を手ならすころの風立ちて秋のあふきそとはさかり行く  
 秋の夜に萩うちそよく風の音にはなありとてもいとほさかりまし  
 あき風のむらさきくたく草まくら時うしなへるそてそつゆけき  
 鳴きわたる雲井の雁もこゝろせよこぬひとたのむ秋の日のころ  
 いまよりや蟲の音さそふ山かせの音羽のさとは夜さむなるらん  
 露むすふあとなに見えすみつくきの岡のさゝ原あきかせそふく  
 柴の庵にはたものかこひそよめきて音する物はあらしなりけり  
 秋かせよ萩の上葉になれ〜てあらしにうつるけふそかなしき  
 入うみのはまなのはしに日はくれて秋かせわたるこしのまつ原  
 拾遺秋  
 秋風はまたきな吹きそわかやとのあはらかくせる雲のいかきに  
 玉維  
 秋風はむかしの人にあらねとも吹きくるよひそあはれとはるゝ  
 松の葉に秋ふくかせのおときけはくもぬあめに袖のぬれける

入道前太政大臣  
 爲家卿  
 定家卿  
 同  
 同  
 後京極攝政  
 同  
 寂蓮法師  
 從三位行家卿  
 源俊平朝臣  
 俊賴朝臣  
 慈鎮和尚  
 鎌倉中務のみこ  
 好忠  
 丑  
 藤原實次  
 之

久安百首  
 百首御歌  
 建保四年内裏十首歌合  
 寶治二年百首秋夕  
 嘉元三年建久百首  
 二百首御歌  
 六帖題  
 寛平御時歌合  
 題不知  
 家集松風いたく吹な  
 秋風

あきかせはあめよりふくをいかなればこちと薄の招くなるらん  
 さらてふすねやのいた戸は今夜こそひきたてつへき秋風はふけ  
 かかりあれば吉野のおくにふく風は秋なればとて音もまさらす  
 秋かせのけにも身にしむいろならはちしほのはとや夕なるらん  
 萩の葉にかやか下をれ亂れあひておきふしわふる野分木からし  
 時雨ゆくよもの木の葉の秋かせをことそともなきまつの色かな  
 新六六  
 ひさきおふる庭の木かけの秋風に〜こゑそ〜くむらしけれかな  
 實隆  
 秋の蟬さむきこゑにそきこゆなる木の葉のさぬを風やぬきつる  
 露霜のさむきゆふへのあきかせに紅葉しにけりやまなしのきは  
 萩の葉のいろつきたにもある物をこゝろすこくも行あらしかな  
 六一  
 うちさわきかりそきぬらしわきもこか衣のひまをときつ秋かせ  
 六一  
 秋かせは野分山わけふくなれとこひのみたればあくるよもなし  
 家持集  
 秋風はとくとふきぬえろたへの我ときころもぬふひともなし

花園左大臣家小大進  
 喜多院入道二品のみこ  
 僧正行意  
 信實朝臣  
 爲家卿  
 順徳院  
 爲家卿  
 爲家卿  
 よみ人まらす  
 同  
 同  
 中務  
 よみびとまらす  
 同  
 同

野分

我なみた木々の木の葉もおほひ落て野分かなしきあきの山さと

後京極攝政



六百番歌合

新後拾秋上 昨日までよもきにとちしきはの戸ものわきにはる、岡野への里

同

なひきゆく尾花かするに波立ちて眞野の野萩につくはまかせ

慈

萩の葉にかはりしかせの秋のこゑやかて野分のつゆくたくなり

定

新後拾秋上 かりにさす庵までこそなひきけれのわきにたへぬをのゝまの原

家

夕まくれむらくもまよひふく風にまくらさためぬ花のいろく

隆

おもひやる我こゝろまできをれきぬ野分するよの花のいろく

寂

はなそめのころもの色もさたまらす野分になひくあきのむら雨

定

ふきすすむ野分のそらの雲間よりあらはれわたるありあけの月

爲

あめわたるむらくもさわき吹かせに野分の草のいろそやつるゝ

同

秋雨

六百番歌合秋雨

ふりくらす小萩かもとの庭の雨をこよひは萩のうへにきくかな

後京極攝政

ゆくへなき秋のおもひせせかれぬるむら雨なひく雲のをちかた

定

日にそへて秋のすしさをたふなり時雨はまたし夕ぐれのあめ

慈

小雨ふるかつくわせをかるまゝに民の袖さへうるほひにけり

法橋顯昭

秋歌中

秋歌中

六帖題

正治二年百首

千五百番歌合

二百首歌

毎日一首中

文永九年毎日一首中

嘉元三年仙洞歌合

毎日一首中

仙洞五十首

建久七年秋左大將家にて

置一字卅一首

或抄中

新拾秋上 秋ふかきやまの陰野のしはの戸にころも手うすし夕ぐれのあめ

伊

日をわたる秋の村雨おとすみて木々のたもともいろかはるころ

後

新六 一 ゆふぐれの風さたまらぬうき雲にゆきてはかへるあきのむら雨

正

ちらぬより木の葉にかよふねさめかな風にむら立つ秋のよの雨

後

さ夜ふけてはとふく山のあきかせに村雨過ぎぬそてにまぐれて

從

むらさめの名残もまはし時雨けりまのたの森のあきのゆふかせ

順

秋の雨のしくれてかへるむら雲のあさけのそらは風そ身にしむ

爲

秋風のさそひですくるむら雨をなみたになしてひくらしそなく

同

秋風にむら雨すくるこす系よりなみたしらるゝひくらしのこゑ

同

朝風はこす系にあらくふきすきてくもりもあへぬ秋のむらさめ

同

露かろき木の葉の風のふきすきてかたへはれ行くうすくもの雨

爲

ふかき夜のはしにまたゝる秋の雨のおとたえぬれば軒はもる月

後

らんせいの花のにしきのおもかけにいほりかなしき秋のむら雨

定

露

またれゆくひかりにをしき月よりもあめにきこゆる萩の音かな

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

六帖題

實治二年百首秋歌

題不知

百首御歌雨

新六五  
草の葉に袖つくみちのかりころもいかなる露のいろにそむらん  
葉にあまるまつくもあるを萩のえに置なかしたる秋のつゆかな  
あさといてのさみかあゆひをぬらすつゆ原早くおきていてつゝ  
われも裳のすそぬれな

秋の窓にひとむらさめの露おちてはれ行く雲のすそすゝしき  
さりともそのよの月の曇らすはことはの露をみかゝさらめや  
月清下

此歌は御集云九月九日作文ありけるに家房卿詩をおくるべき  
よしありて時にのそみて十三夜にと侍ければ遣侍と云々

みかくへきことはの露のおけはこそ其夜の月のかけもまたれめ  
かきつめしことはの露もかすことに法の海にはけふや入るらん  
さゝかにのいとにかゝれる白露はあれたるやとの玉すたれかな

露さえてねぬ夜の月やつもるらんあらぬあさちのけさの色かな  
今はとてまきはたつなり秋のよのおもひのそこに露はのこりて

夜をかさねはたおる蟲のいそくな草のたもとに露やさゆらん  
露さゆる小野のまの原うらかれて月ふきはらふあさちふのかせ

さえなはや草の葉つたふしらつゆの身をはうけくに秋の夕くれ  
ならひふす尾はなの袖のかさなりてはするもつたふ秋のしら露

信實朝臣

同

人丸

慈和

後京極攝政

中宮大夫家房卿

前中納言長房卿

能因法師

同

前大納言忠真卿  
中務卿のみこ  
爲家卿

三島社奉納十首草枕

御集秋歌

正治六年百首

一句一首

返し

はいのはてにて佛事おこ  
なひて  
くしのいに露のかゝれる  
をみて  
實多院入道三品親王家五  
十首

おけはかつ下をればつるあさちふのはするにつく露のしら玉  
ひくらしのなく夕くれのなてしに秋もさひしくおける露かな  
露まらむ庭はまとはになくむしの木かけの草に夜をのこすこゑ  
朝またきにはもまかきものわきして露おきあかる草のはもなし  
はやいてかたとたにやとれあきの月葉のほる露の数やみゆると  
みやきの本あらの小萩またはれて葉のほる露にやとる月かな  
人ならはみやこにみましみやきの露をいさよふ萩のゆふかせ  
秋のつゆまのふの軒に影そへてほしにそかよふ夜半のなめは  
時雨つる夕日のいろにそてさえて山かせさむき木々のむらつゆ  
風つらきもとあらの小萩そてにみて更ゆくそらにおもる白つゆ  
まくれつる今朝のむら雲ほともなく入日にみかくやまのはつ露  
あひみてはまつと思ひしことはに心のつゆのなほおもきかな  
ひとすちに秋のゆふへもかこたれす心のつゆにぬるゝたもとは  
かくしつゝ在ふる程に身の露やたまりてまつむふちとなるらん  
新拾遺秋上  
夜もすからをきの葉風はたえせぬをいかてか露の玉とぬくらん

貞應三年百首漢茅露

千首歌

秋歌中

六百番歌合野分

家集田家待月

建保三年名所障子

建保三年内裏歌合野分風

正治二年百首

建仁元年老若五十首歌合

六百番歌合朝戀

千五百番歌合

同歌合逢戀

文永七年九月十三夜中務

卿親王家十首歌合

家集述懐古來歌合

萩の上の露盤

同

同

爲相卿

有家卿

俊頼朝臣

僧正行意

家隆卿

正三位季經卿

民部卿範光

寂蓮法師

定家卿

大納言通具卿

慈解和尙

典侍親子朝臣

和泉式部

同

中務卿のみこ

恒久親王家歌合

建保三年名所百首

建久二年左大将家百首歌  
園中草花

建長八年百首

家集

千五百番歌合

永久四年百首小篠

旅五十番御歌

約字百廿八述體

建保三年秋十五首歌合秋

文永八年每日一首中

秋歌中

建保三年内裏歌合

堀川院御時百首

權中納言經忠卿家にて五  
十首

永久四年百首松虫を

文治二年百首

かりのなくうはの空なるなみたこそ秋のたもとの露とおくらめ

むさしのや月かけなから時雨けりをはなのうへの露のしたみち

あたたえて風たにとはぬ萩のえに身を忘る露はきゆるひもなし

人ことのこひの千草もかすくにおのかおもひの露やかはらん

小篠はらする葉のつゆはたまに似て石なき山をゆくこちする

みせはやなあかつき露のおきわかれ篠分るあさの袖のけしきを

露まけきをさか原にわけゆけはころものすそになひくしら玉

昨日けふ野にもやまにもむすひつゝ草のまくらや露のふるさと

いかせん深山のつきはまたへともなほおもひおくつゆの故郷

袖ぬらすまのふもちすりたかために亂れてもろきみやきの露

まらつゆの玉のおひするかさこしは雪かともゆる庭のおもかけ

いつくよりおくとまらぬ白露のくるれば草のうへにみゆらん

月いつるとはやま松の木の間よりまたきやとかる露のころもて

みるもをしたちにてたる秋萩をまをれせさする露のまからみ

秋萩もつゆのまからみかけつればいくまほに葉を染かくすらん

夕されは野邊もや物をおもふらんまつむし鳴てつゆまめりけり

ふちはかまあらぬ草葉もかをるまでゆふつゆまめる野への秋風

友 則

從三位範宗卿

定 家 卿

後九條内大臣

四 行 上 人

家 長 朝 臣

二條太皇宮常陸

後京極攝政

定 家 卿

同

爲 家 卿

同

光明峰寺攝政

仲 實 朝 臣

後 頼 朝 臣

同

定 家 卿

秋御歌中  
家集百廿首

正治二年百首

元久元年詩歌合

三百番歌合秋夕

老の五十首歌合

六帖題

建保二年内裏秋十首歌合

秋雜

萩のはなさきみたれたる玉はこのあしたの露はいつことに見ゆ  
まのゝめに秋おく露のさむければたゞひとりしも蟬のなくらん

花山院御製  
大江千里

秋夕

野はらよりたもにかよふ風の音におなしつゆちる秋の夕くれ

うらみしな秋のゆふへはいまそこれそれにもよらす心つよさを

あかつきの鳴たつまでもなかりけりいな葉にこもるやとの夕暮

たれかまた千々におもひをくたきても秋のころにあきの夕暮

おなしくはあはれまらんひとまかな鹿とむしとの秋の夕くれ

まをりしてつらき山とはまらさきたこのころの秋の夕くれ

暮ぬれば野邊もひとつに露おちてむしのねになる庭のあさつゆ

秋とあきとおもひ入てそなかめつる雲のはたての夕くれのそら

みすまらぬむかしの人のこゝろまであらしにこもる夕暮のそら

みよしのを秋のはるにてなかわれは明ほのよしも夕くれのそら

秋されは野に鳴きしのほろくとなみたこほる夕まくれかな

鳴のたつ野さはの秋の夕まくれいつくとまるこゝろなるらん

前大納言忠具卿

寂 蓮 法 師

同

同

後 島 羽 院

如 願 法 師

寂 隆 卿

後京極攝政イ

同

同

衣笠内大臣

範 宗 卿

湖邊秋夕

百廿歌

永仁三年家歌合

秋歌中

家集秋歌中

萩のつゆ萩のうはかせ見るめなきうらはの秋もたゝならぬかな  
新撰古秋上  
蟬のこゑむしのうらみそきこえける松のうてなの秋のゆふくれ  
くれうつる木すゑの日影袖に落てはらふころもはうすきりの露  
あはれさをいふもこゝろのきはならてことはにあまる秋の夕暮  
ふさわたる風にあはれをひとまめていつこもすこき秋の夕くれ

知家 前少納言定嗣卿  
爲相 爲  
他阿上人  
西行上人

秋夜

建保二年秋十五首歌合逸

文集

承久二年四季百首喚

夜

喚

承久四年百首

題まらす

老かよはあはれすその草かれによるのおもひもなかな月のそら  
鐘の音をねさめて聞くや秋ならぬそてにまちかき天のかはなみ  
たか里のいつらは秋のかねの音を月よりのちもなかくてそきく  
むかしとてこふともあはん物なれやなに面かけの秋のよのそら  
新撰古秋下  
明かたに秋のねさめやなりぬらんのことなく物そかなしき  
まらねする長月の夜のさひしきは鳴なきぬとてたのまれもせず  
風三  
ななき夜をひとりやねんときみかへて過行人のおもほえらくに  
風三  
いまよりは秋風さむく吹なむといかてかひとりななき夜をねん

定家 定家卿  
悲願和尙  
同 同  
仲實朝臣  
よみ人まらす  
家持卿

秋雜

文集百首

區一字三十一首

建保二年十首

初一字區卅首

建保三年名所百首

六帖題

秋時雨を

旅千五百番御歌

建保四年百首御歌

障子内親王家歌合千鳥

題不知

惟貞親王家歌合

秋に堪ぬことのはのみそ色に出るやまとの歌ももろこしの詩も  
唐國のむかしのひとまたへさりし秋のあはれはたれかまのはぬ  
たまきはるわか身時雨とふりゆけはいとゞ月日もをしき秋かな  
としのうちにはよしした秋のなかはにて心もたへす人もうらめし  
きよみかたひまゆく駒もかけうすしあきなき波のあきの夕くれ  
新六四  
つれづれの秋の眺めのうたゝねにやすく日影のかたふきにけり  
をしねほすいほのかきしは風立ちて時雨まらるゝ秋のやまさと  
ともなくて草葉にやとる秋の野のほたるはかりや夜のともしひ  
我かとのいつもとやなき時雨つゝあへすうつろふ秋はきにけり  
ねさめしてたれか又きく小夜千鳥おとなふ秋のふかきあはれを  
ななめする空にもあらでまぐるゝは袖のうちにや秋をまららん  
新勅秋上  
いかにして物おもふ人のすみかには秋よりほかの里をたつねん  
秋くれは深山里こそわひしけれ夜るはほたるをともし火にして  
ひとまれす涙やそらにくもりつゝ秋のまくれとふりまさるらん

定家 定家卿  
同 同  
同 同  
知家 知家卿  
前民部卿雅有  
後京極攝政  
光明寺入道攝政  
宣旨 宣旨  
女御 女御  
相模 相模  
千原 千原  
元方 元方